

アンナプルナ日記

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会

京都大学図書



1000267155

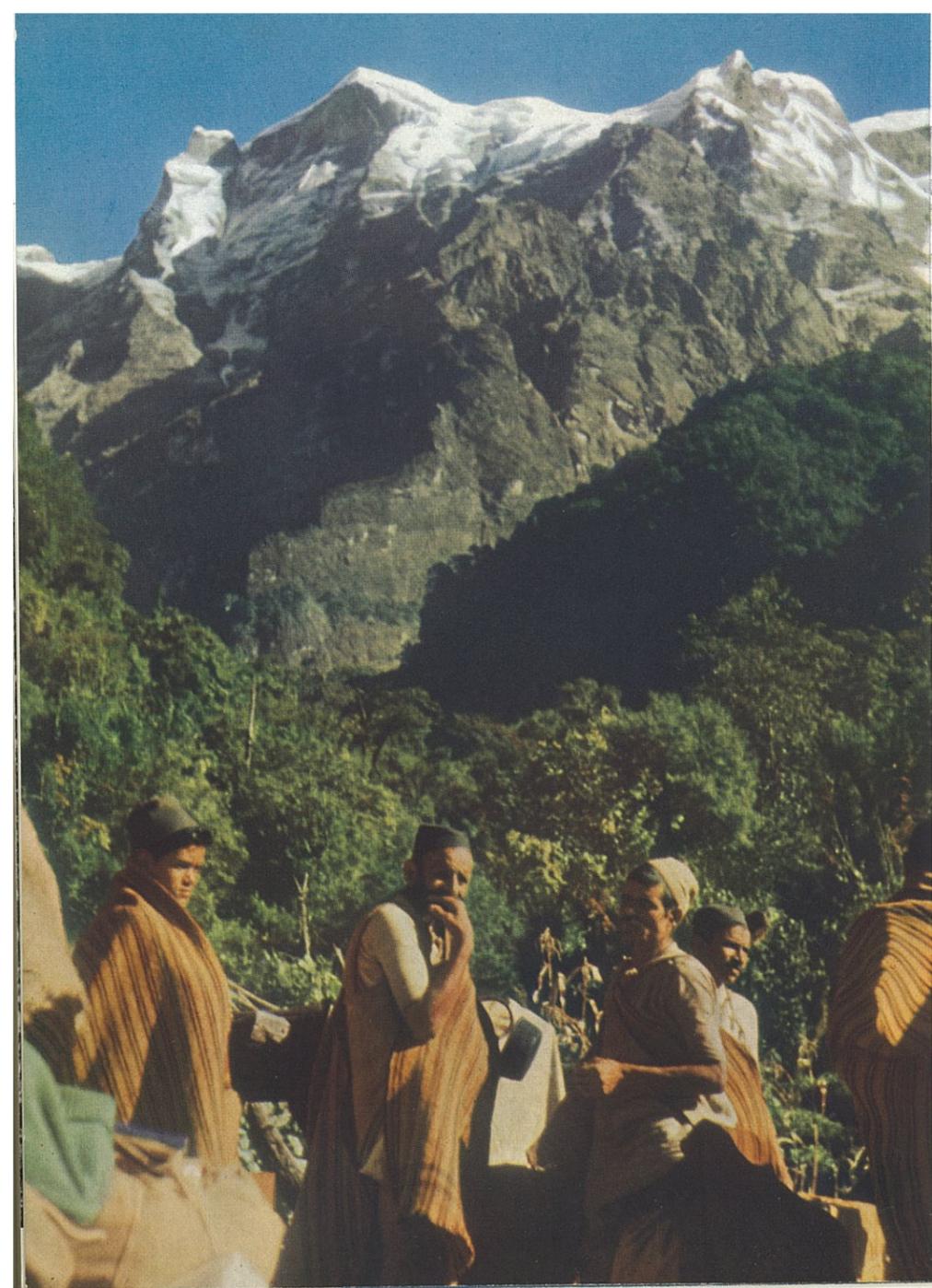
大学院 AA研究科

COE-SC

001

25

4

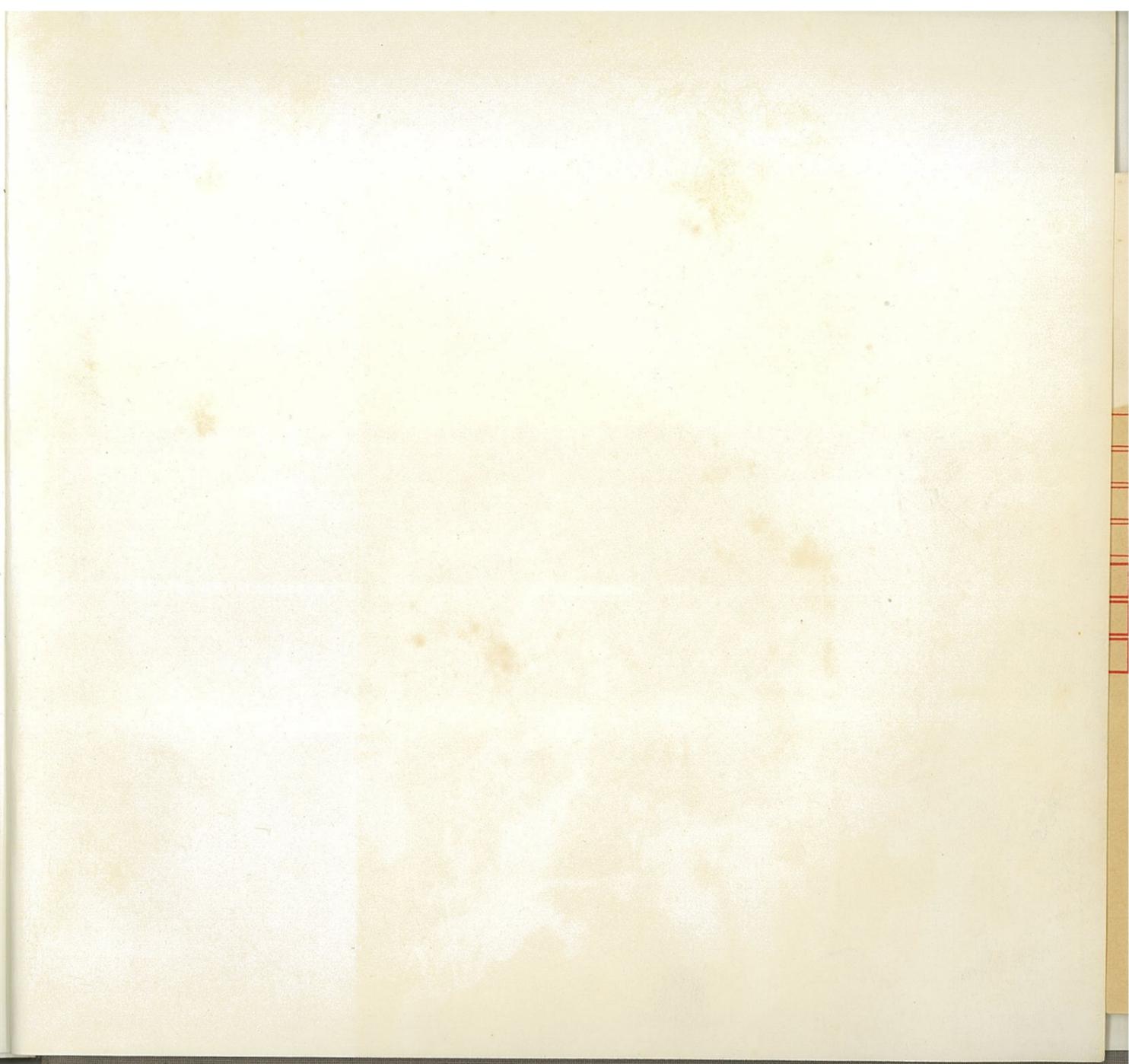


京都大学

00026715

図書

アンナブルナ南面
…マディ・コーラ
のベースキャンプ
の朝、ナムン越え
のため集められた
人夫たち





二つのアンナプル
ナ…ポカラ南郊ペ
ワ・タルの湖水
に倒映したマチャ
プチャリ、第三、
四、二峰及びラム
ジュンの峰々

092,58

2



アンナプルナ日記



京都大学理学部山岳会



アンナプルナの北面へ…マルシャ
ンディ河畔より仰ぐ、正面のユル
は第四、第三峰間の最低鞍部

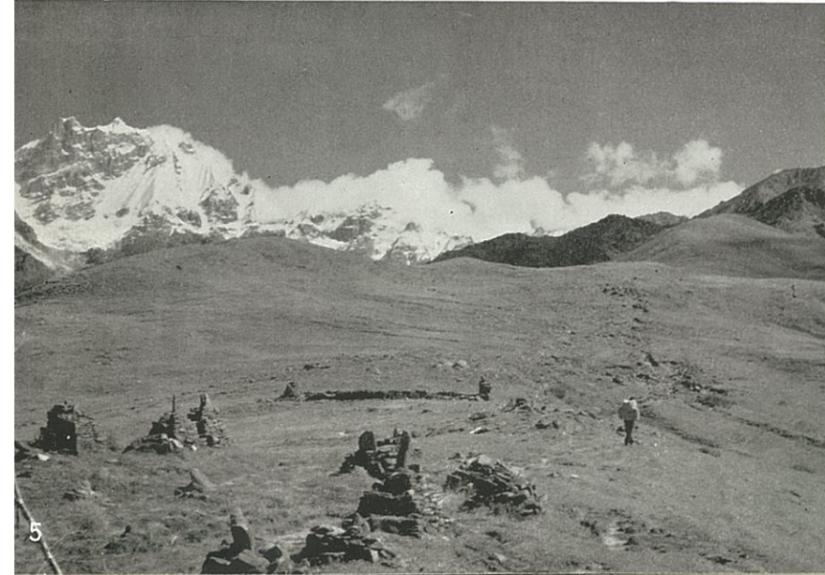


ヒマラヤの小供たち、秋祭りの祝いの「神聖な米つぶ」を額につけている

AAOK
 THE ACADEMIC ALPINE CLUB OF KYOTO
 京都大学学士山岳会
 国際登山探検文献センター
 蔵書
 受入番号 00006
 受入年月日 1972年9月28日

並河 功 氏寄贈





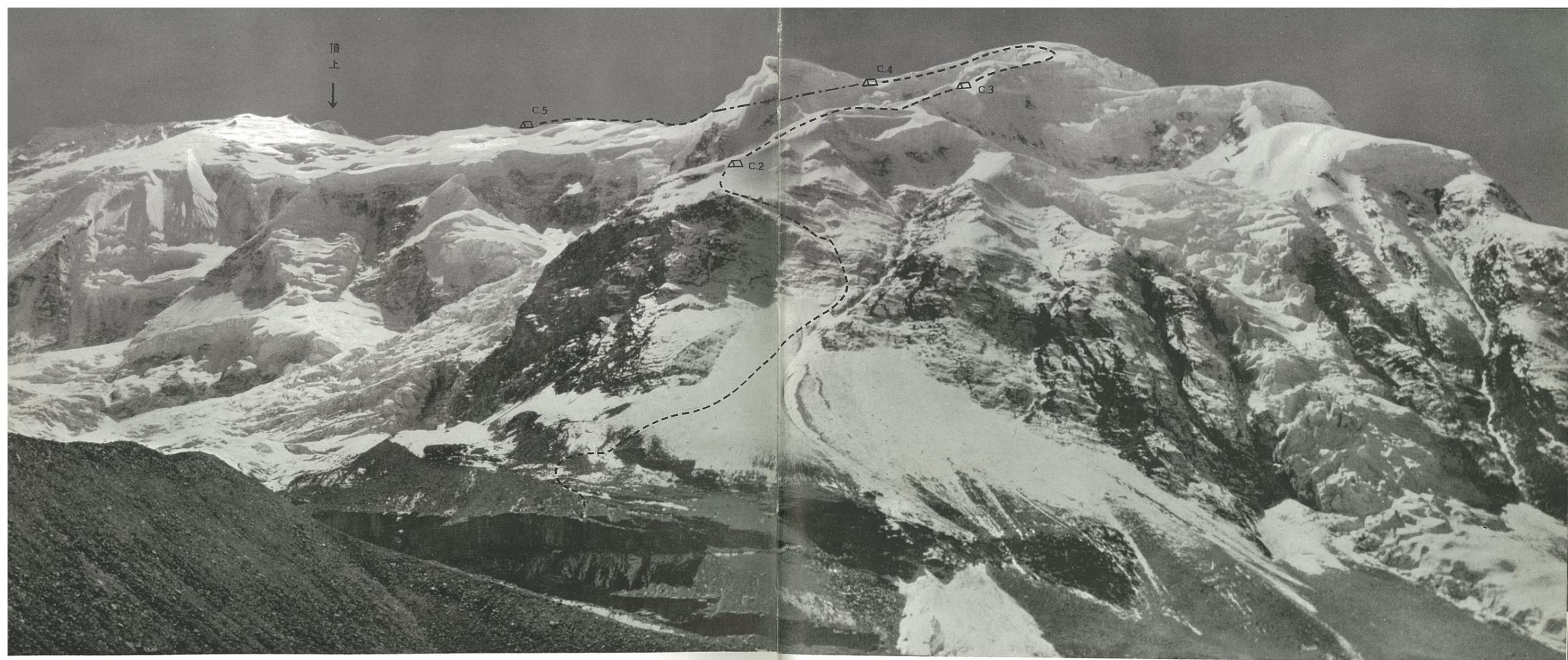
上 バンジャン(峠)には、新雪の中に風変りなケルンが林立していた

中 サーブもシェルパも同じく重荷を担いで苦しい登高が続いた

下 ナムン・バンジャン附近の無名峰群が、明るい秋の太陽を浴びて眩むばかりだ、急がねばならない



ナムン・バンジャン(5140米)の上からは、マナスル、ピーク29、ヒマールチュリ(5140米)の山々が手にとるようにみえた



アンナプルナ第四峰の北面、(第一キャンプ5000
米のうしろの堆石丘より仰ぐ、遠征隊のルート及
びキャンプの位置を示す)



第二キャンプから東方を望む、第二峰の鋸の歯のような北稜の向うに、はるかマナスルがみえる



右上 第一キャンプの朝、見上げる目は一せいに主稜線上に予定された登路を追う（左から伊藤、舟橋、立平の諸隊員、後は第三峰）

下 休む間もなく荷上げが開始された（第一キャンプへの途中にて舟橋、伊藤両隊員、後は三・四峰間の稜線）

左上 氷の張りつめた急峻なルンゼを登り切った小さな台地に、第二キャンプが建てられた

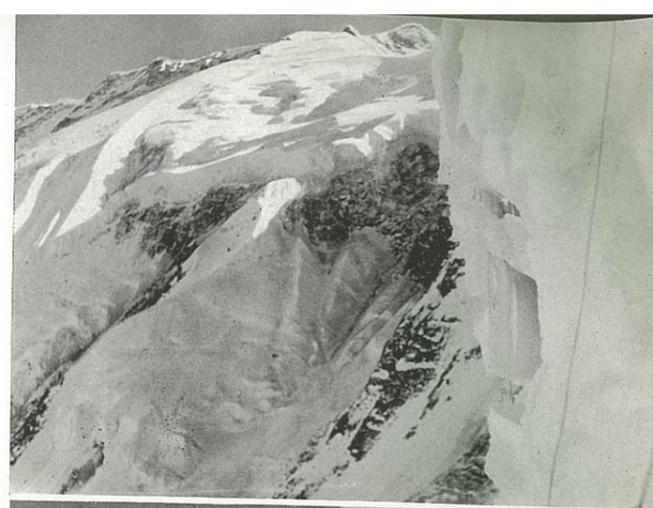
アイス・ウォールを越えて、
今日も荷上げが続けられてい
る（6050米の地点より仰ぐ）



蒼氷はぎらぎらす
る逆光を反射し、
あたかも挑戦する
かのように輝いて
いた



アイス・ウォール
では、まる二日間
の苦闘を強いられ
た（向うに第四峰
の頂上が見えてい
る）



ザイルで次々と荷
物が吊り上げられ
ていく

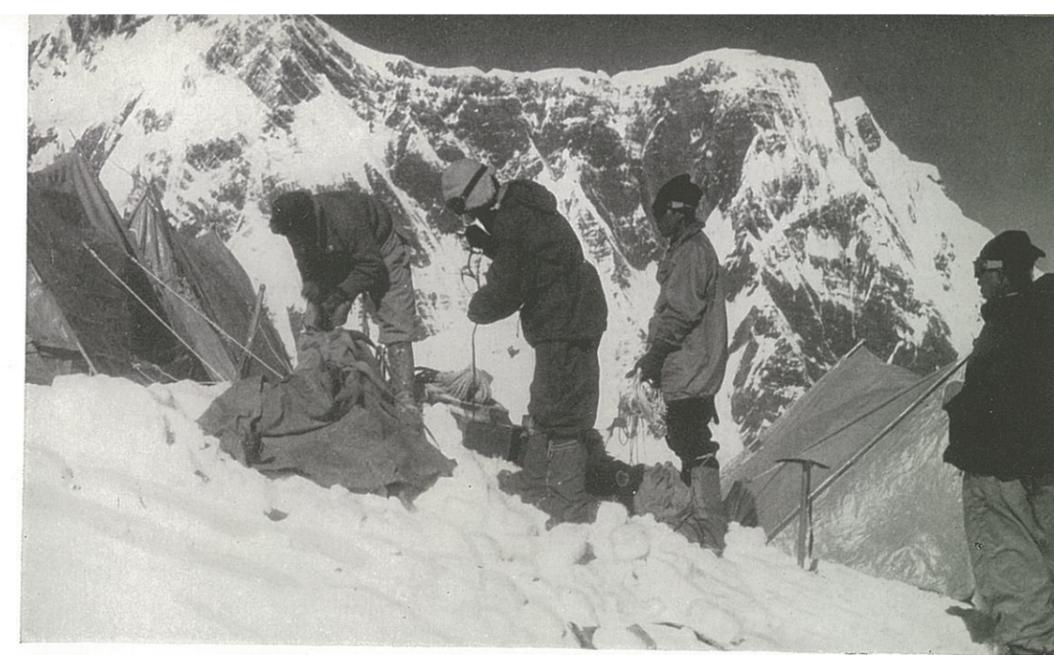


壁の直下は全く日
が当たらない、荷を
引揚げていると靴
の中で足指がじん
じんと痛んでくる



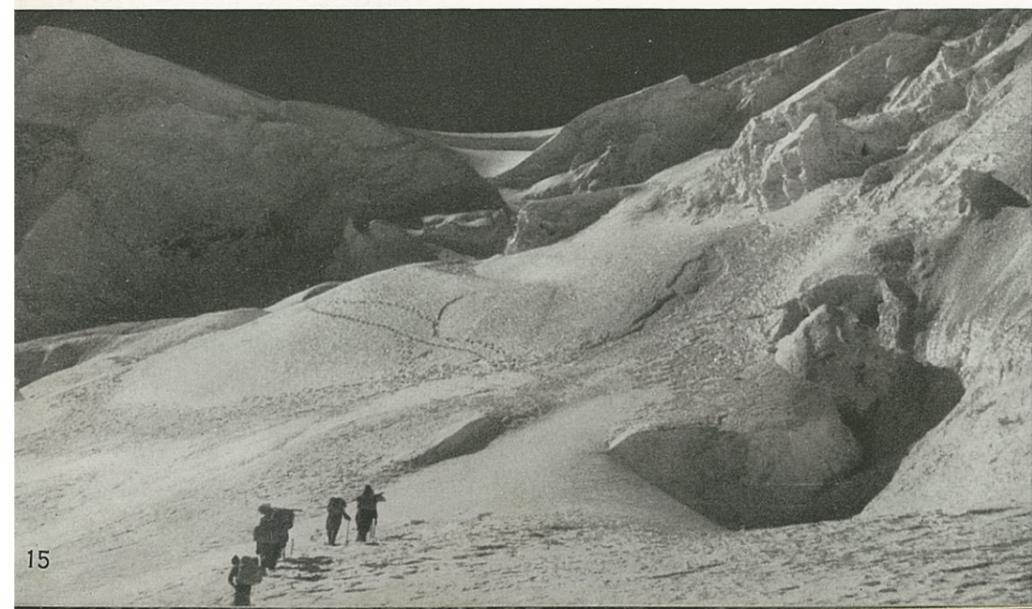
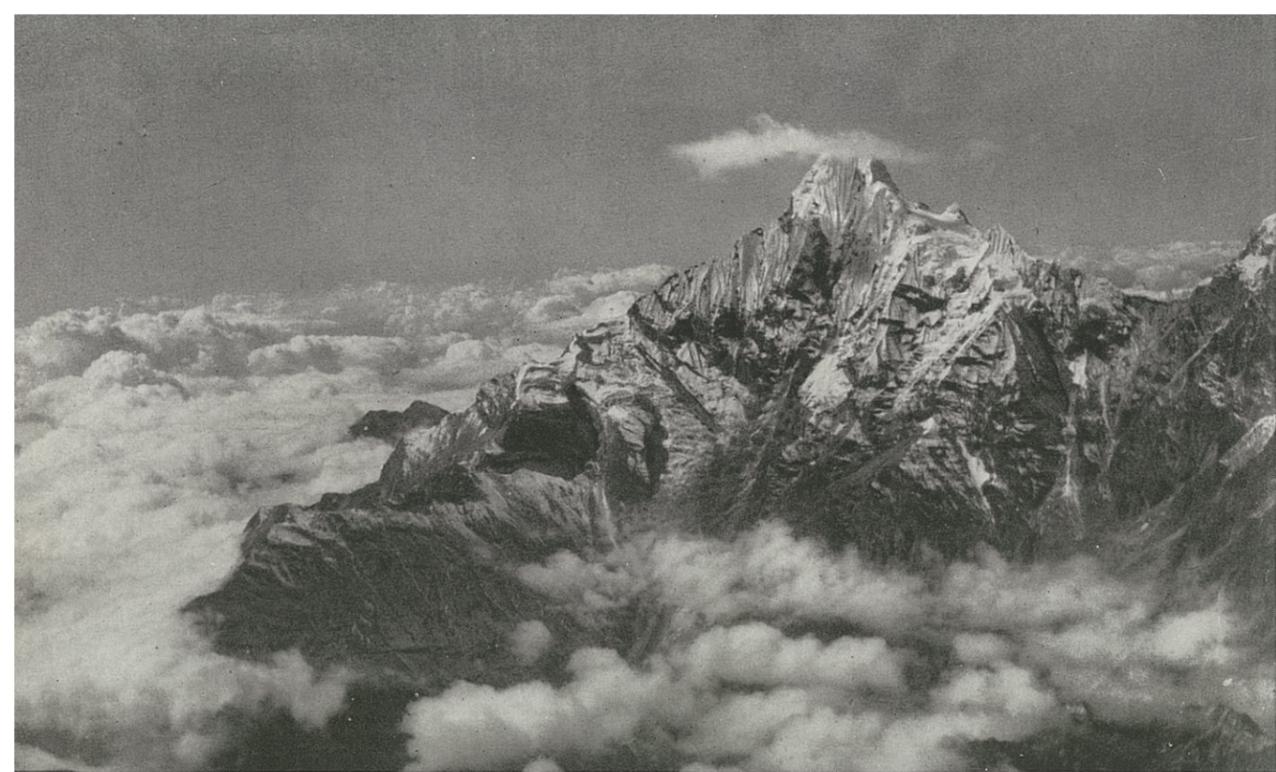


冬の足あと、ときどき見上げる稜
線上に、はげしい雪煙が立ち上る、
もうヒマラヤには冬が来たのだら
うか



上 氷壁をこえた雪の台地
に建設された第三キャ
ンプ(6140米)が前進
根拠地となった(うし
ろは第三峰)

下 アンナプルナ第二峰の
北面を横に仰ぎながら
一歩一歩踏みしめて登
っていく(第三キャ
ンプ附近にて)



上 主稜線に出ると南側にマチャプチャリが、そして遙か遠く雲の下には懐しいポカラの町が見えた

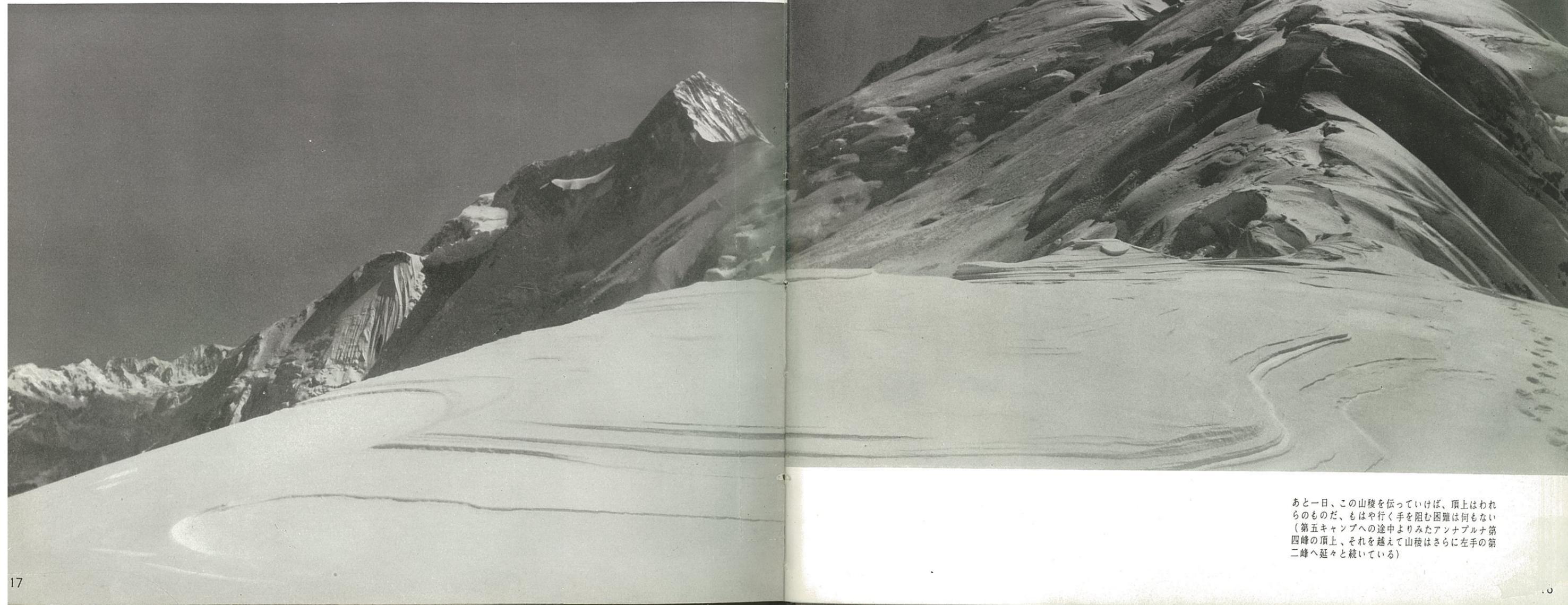
下 十一月一日の朝、今西、藤平、船坂と六人のシェルパは、登頂の夢を抱いて第四キャンプ建設に向った



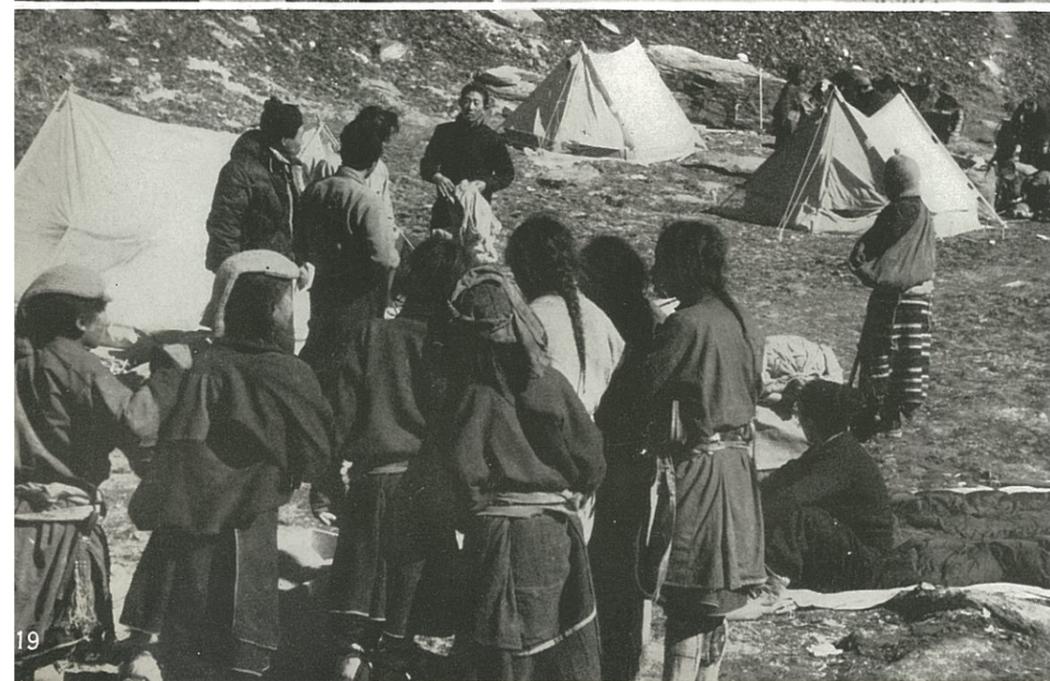
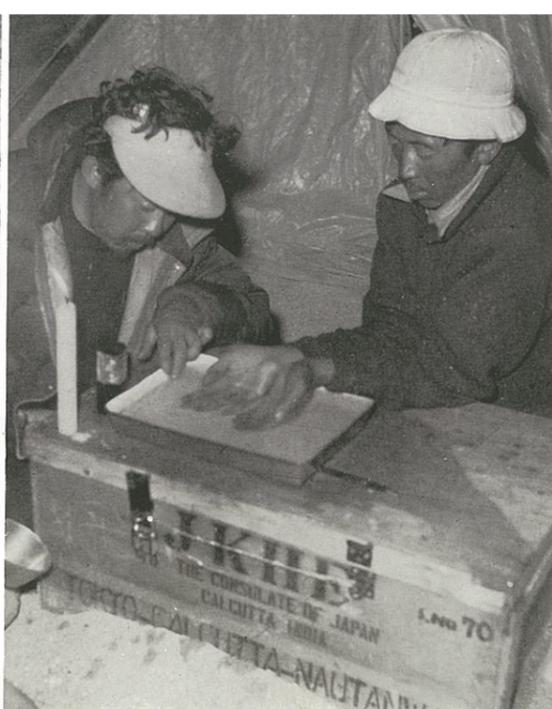
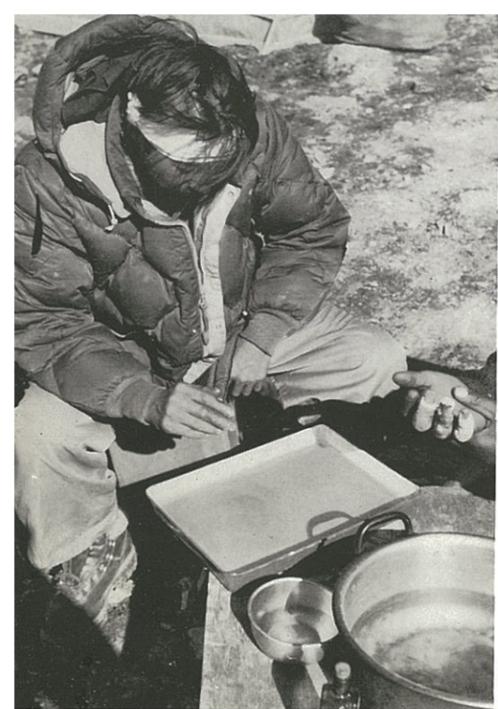
右上 隊の写真係でもある伊藤ドクター、御自慢のニコンで迷作?をねらっている(うしろは藤平隊員)

下 頂上攻撃隊を見送る舟橋隊員(第三キャンプにて)

左上 傾斜はいよいよ急に、呼吸はますます苦しくなってくる(第四キャンプ建設への途上にて)



あと一日、この山稜を伝っていけば、頂上はわれらのものだ、もはや行く手を阻む困難は何もない（第五キャンプへの途中よりみたアンナブルナ第四峰の頂上、それを越えて山稜はさらに左手の第二峰へ延々と続いている）



左上 嵐の中の苦闘で藤平隊員（中央）とシェルパのダナムギャルが手、耳などに凍傷をうけた

右上 伊藤ドクターの微温湯療法をうけるダナムギャル

下 第一キャンプに別れを告げる日が来た（荷を運びに上ってきたチベット系の人夫たち）



十一月三日、冬の嵐は終にやってきた、第五キャンプは吹き飛ばされ、われわれの夢も消え去った（第三キャンプよりジェット気流に、わき返るような第四峰頂上附近を望む）



遠征隊の顔

上右より 今西寿雄隊長
 藤平正夫隊員
 伊藤洋平隊員
 舟橋明賢隊員
 下右より 藤村良隊員
 脇坂誠隊員
 立平宣雄隊員

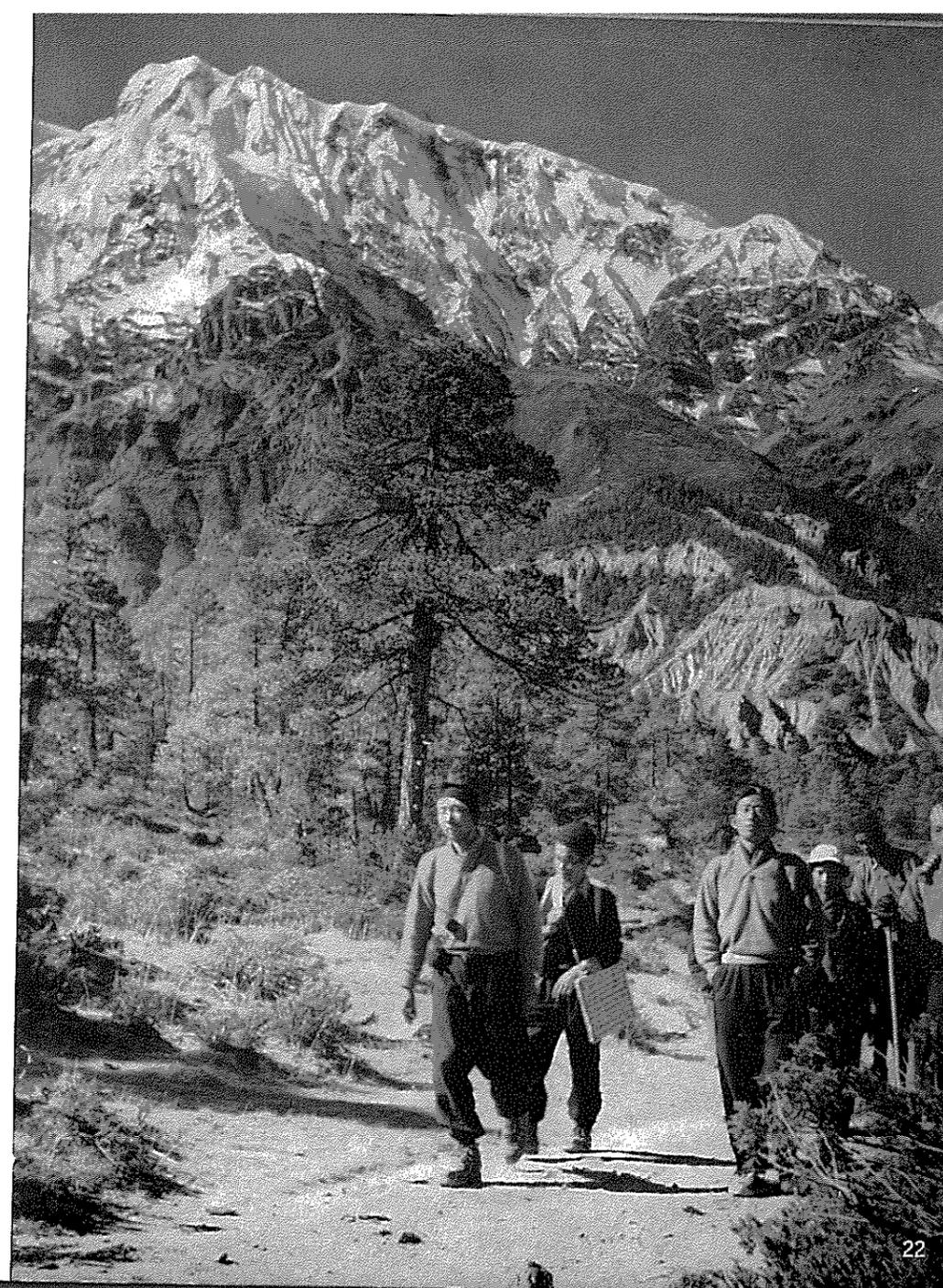


登高を終え第一キャンプに集結した遠征隊（前列右より伊藤、藤村、藤平、今西、舟橋、脇坂、後列二人目よりアンニマ、パサンダウ、ダナムギャル、グンデイ、ギャルゼン、タンドウ、一人おいてダワトングップ及びポーターたち）

アンナプルナよ、さらば(チャーメ
附近より見た第二峰の東面の絶壁)



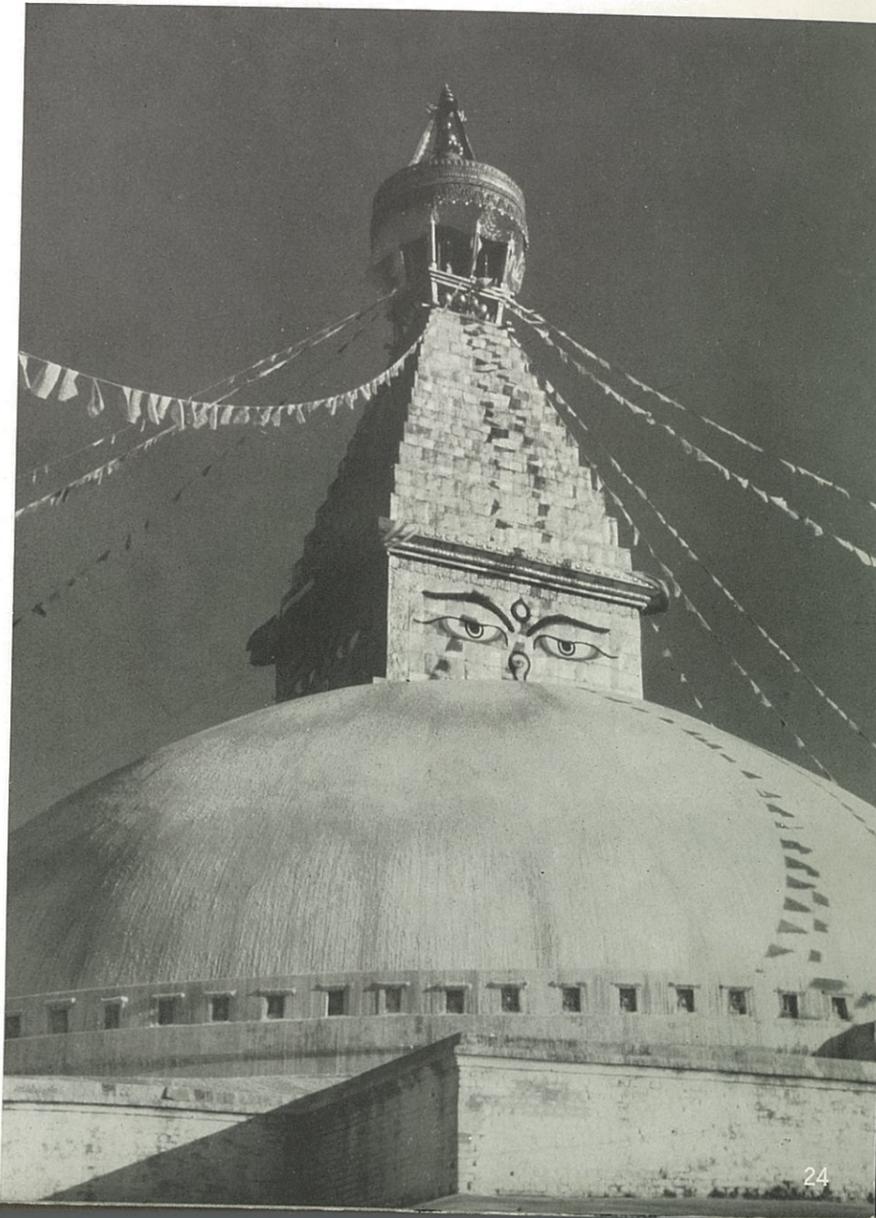
マルシャンディの
深谷に沿った道を
下山の途についた
(左より藤平、藤
村、舟橋、ディリ
ー、脇坂、後は第
三峰の東北面)



目次

1	序
2	第一章 世界の歴史
3	第二章 世界の地理
4	第三章 世界の文化
5	第四章 世界の政治
6	第五章 世界の経済
7	第六章 世界の社会
8	第七章 世界の環境
9	第八章 世界の未来
10	終章 世界の平和

ネパールの首都カトマンズ、ラマ教の寺院のバゴタの基部に描かれた「眼」には「中世」の光りが宿っていた



序

出発まで

アンナプルナ日記

一、カルカッタにて

三、ヒマラヤに向つて

五、マディ・コーラへ

七、ナムン・パンジャンを越えて

九、マルジャンディ輸送隊

十一、冬のあし音

十三、主稜線に第四キャンプ

十五、嵐の中

十七、戦いは終りぬ

十九、再びボカラへ

二十一、一路故国へ

アンナプルナ遠征を顧みて(座談会)

附録

食糧に就いて

気象に就いて

装備に就いて

遠征日誌

アンナプルナ遠征経費決算報告

A・A・C・Kアンナプルナ遠征に援助を賜つた法人及個人(アイウエオ順)

二、インドからネパールへ

四、アンナプルナ見ゆ

六、南面の偵察行

八、北面のベース・キャンプへ

十、攻撃開始

十二、氷壁にルートを開く

十四、第五キャンプ建設なる

十六、友情に支えられて

十八、ベース・キャンプを後に

二十、首都カトマンズを訪問

四
七
一九

二七

一四

一五

一六

一七

一八

一九

写真

アンナプルナ南面の朝(カラー)

二つのアンナプルナ(カラー)

アンナプルナの北面(カラー)

ヒマラヤの子供達

南面の大障壁

ナムン・パンジャンからのマナスル三山

パンジャンの上で

重荷を担いで

パンジャン附近の無名峯群

アンナプルナ四峯の北面(ルートを示す)

第一キャンプの朝

休む間もなく荷上げが始つた

第二キャンプから上方を望む

第二キャンプからマナスルを望む

氷壁の荷上げ

アイス・ウォールを越えて

第三キャンプにて

アンナプルナ二峰を仰いで

冬の足おと

迷作をねらうドクター

頂上攻撃隊を見送る舟橋隊員

傾斜はいよいよ急に

主稜線からマチャプチャリを望む

第四キャンプ建設に向つて

頂上は指呼の間にあつたが

ジェット気流の襲来

凍傷をうけた藤平隊員

ダナムギヤルの凍傷を治療する

第一キャンプ撤収の日

第一キャンプに集結した遠征隊

遠征隊の顔

山をあとに

アンナプルナよさらば

中世の「眼」

1
2
4
5
5
5
6
8
8
8
9
10
11
12
12
13
14
14
14
14
15
15
16
18
19
19
20
21
22
23
24

一九五三年はわがAACK(京都大学学士山岳会)にとつて記念すべき年であつた。すなわちこの年にはじめてAACKは会独自の計画によつて創立以来の念願であつたヒマラヤ遠征隊を送ることができたのである。

AACKがヒマラヤ遠征を目的として京都大学関係者を以て結成されたのは一九三一年であつた。結成直後計画されたシッキム地方のカブルーを目標とした遠征が実現直前に挫折して以来、私達は度々ヒマラヤ遠征を企画したのであるが何れも具体化されるに到らず、特に一九三六年にはカラコラムの盟主K₂を目指す計画が樹立され、会員の一名は現地交渉のため印度へ向つたのであるが、この計画も遂に実現されるに到らなかつた。この間会員は白頭山、樺太、興安嶺その他の外地への遠征登山や探検などを繰返しつつ時機の到来を狙つていたのであるが、遂に第二次大戦の勃発となつて本会の活動も休止状態にならざるを得なかつた。

しかし第二次大戦後は国際情勢は一変した。すなわちネパール王国は外国の遠征隊に対し門戸を開き、また装備、食糧等の登山装備においても急速な進歩をとげ、ヒマラヤ遠征は戦前に比べてはるかに容易になつた。この期に到つて今西錦司を中心とする会員の一部は学内の有志とともに、本会名誉会員並河功先生を会長として、生物誌研究会(F.F.)を組織してヒマラヤ學術探検を企画し、これについてAACKは再建され、生物誌研究会と協力のもとに、多年の宿望を実現すべく再び活潑な活動が開始された。

最初に立てられた計画はマナスルを目標とするものであつたが、当時の情勢判断により、これを全日本的計画とすべきであるとの結論に達し、この計画は日本山岳会に移譲された。しかし一度び燃え上つたヒマラヤへの炬火は消えず、AACK独自の立場でヒマラヤ遠征隊を派遣することを決意し、その第一回を一九五三年のポスト・モンソンと定めた。そしてその向うべき地域は、別項にあるように最も事情のよくわかつているアンナプルナ山群が選ばれ、未踏の第二峯の登頂と、その週辺の科学的調査とを目的とした。

かくしてこの計画を実現すべく、一九五三年五月にはAACKヒマラヤ委員会が結成され、諸々の準備が開始された。同月には遠征隊の隊長として今西寿雄を任命し、具体的準備が開始された。準備は、各方面の助力を得

て、急速に進捗し、遠征隊は京都市民の盛大な見送りに送られて、八月二十四日の夜、京都を発することができたのである。

遠征隊は、はじめアンナプルナ第二峰を第一目標として、南面よりの登路偵察に努めたが、遂に好適なルートを発見し得ず、次に北面より第四峰の登頂を敢行することに目標をかえ、苦勞多いナムン・バンジャンの峠越えを行つて、北面への大迂回を試みた。そして十月中旬北面にベースキャンプを設けて後、極めて順調に登高し、第五キャンプを十一月上旬第四峰頂上直下に建設したのであつたが、最後の登頂を目前にひかえて突如天候の急変に襲われ、強風のため天幕を吹き破られ、遂に登頂を断念せざるを得なかつた。これらの経過については別項に詳しく述べて改める必要はないと思うが、不幸登頂の機を逸したとはいえ、このような悪条件のもとで全員が無事に下山することができたのは、長い年月の間に培われたAACKの伝統を受け継いだ隊員達が、隊長の統率の下に強固な団結力とメンバーシップを発揮した結果であることを述べておきたい。

本遠征隊のアンナプルナ第四峰の登頂は遂に成らなかつたとはいえ、AACKの最初のヒマラヤ登山隊として充分な成果を収め得たことは、創立当時の古い会員から戦後の若い会員にいたる会全員のヒマラヤへの熱意の結集によるものではあるが、特に後援会会長鳥養利三郎先生、AACK会長木原均先生、FF会長並河功先生ならび同会員の絶大なお力添えと会の大先輩である松方三郎氏の適切な指導と助言がなければ、この成果を得ることは出来なかつたであろう。ここに改めてこれら諸氏に会員全員の心からの感謝を捧げたい。

又当時の京都大学学長服部峻二郎先生からは常に激励を賜り、大学当局からは種々の便宜をあたえられた。中部日本新聞社取締役亀山敏氏、京都新聞社社長白石古京氏は本計画の遂行について種々の援助を賜つた。又共同通信社豊田利助氏、大阪倶楽部小泉仁一郎氏、神戸の津田周二氏及び名古屋工業大学清水勤二氏は多忙な日常にも拘らず遠征隊の準備、資金面の交渉その他についていろいろの助言、援助を賜り、これによつて本計画の準備を短期間のうちに完了することが出来たのである。京都洛北高校、鳴沂高校、山城高校各山岳部の諸君、学習院大学山岳部からは遠征準備に献身的な援助をうけた。

更に京都府、市、大阪府、市、兵庫県、神戸市をはじめ別表(一六七頁)の如き各方面の個人及び法人には遠征隊の準備に関して多大の援助をうけた。これらの方々及び会社に対して深甚の謝意を表したい。

又大蔵省為替局、文部省社会教育局、外務省渡航課の方々には本遠征に必要な外貨、旅券等の御世話を、更に中

中央気象台長からは観測上の御指導といろいろの御援助を頂いた。

日本山岳会はAACKのこの計画について友好的な支持をされ、このため遠征の遂行は円滑に行われたのである。

更に在印日本大使館西山大使他現地官民の方々、カルカッタ気象台マル博士にも謝意を表したい。これらの方からは遠征隊の在印中多くの援助及び助言を、又ヒマラヤ山脈に於ける気象に關しての適切な助言を頂いたのである。

最後にわれわれの遠征計画を援助し、入国を許可され、又ネパール国内に於て絶大な支援を賜つたネパール国王陛下、クリシュナ氏、ダルシャン氏、ポカラ知事ポーランシン氏及び故デイリー氏にAACK会員の心からの謝意を表す。又故デイリー氏はわれわれの遠征を援助された後、一九五四年フランス隊のドーラギリ遠征の途上死去されたのであつて、ここに併せてわれわれの追悼の意を捧げるものである。

又この遠征によつてアンナプルナ山群附近の地域に於ける科学的調査がなされ、植物及び蝶の新種が発見されたことをつけ加えておきたい。この成果は京大生物誌研究会(F.F.)の報告に発表され、その標本は京都大学、九州大学その他に保存されている。又気象学上の資料は隊員藤平正夫により測定され、その一部の結果は『天気』第一巻(一九五四年八月)一〇七頁に発表された。

この遠征報告書の刊行は遠征隊の帰国後直ちに計画されたのであるが、種々の事情により遅延したことを御寛容頂きたい。今回東大山の会の朝比奈菊雄氏ならびに若溪堂店主坂本矩祥氏の御力添えによつて出版されることになつたのである。又、遠征隊の映画製作については、フィルム準備から編集にいたる迄、高橋照氏より終始懇切な指導をいただき、同氏の献身的な援助によつてはじめて記録映画「アンナプルナ一九五三年」としてまとめることができた。両氏の好意ある御協力に対して心からの謝意を表したい。

尙本報告書の編集にはAACK編集委員として今西寿雄、伊藤洋平、林一彦、梅棹忠夫が當つたことを附記する。

一九五六年春

四手井綱彦



出発まで

われわれの貧しいヒマラヤへの旅、アンナプルナ登山の物語りを始めるに先立って、われわれ山仲間集りである京都大学士山岳会(AACK)の生い立ちを説明しておかなければならない。

大正から昭和にかけて、日本アルプスを足場に日本の山々を歩きまわっていた京都大学の学生が卒業して、日本の山では厭き足らず、人間の欲求である未知のより高きを求めて、ヒマラヤへの野望をいだいたのは当然のことである。この欲望を満さんものと同志が集つて一九三二年六月、AACKを創設した。

八〇〇〇米のヒマラヤでは幾つものキャンプを建設せねば、その頂きを踏むことはできない。南極大陸において、アムンゼンが南極到達のため実施した前進方法を極地法といわれているが、この方法によつて同年から翌年へかけて、今西錦司リーダーのもとに、富士山大沢でトレーニングを行つた。日本でのヒマラヤ登山の実践への第一歩を踏み出したのである。

富士山から帰つた仲間はシッキム・ヒマラヤのカブルー遠征の計画を立てた。郡場寛博士を隊長として、若い学生もその隊員に加えられていたのであるが、満洲事変勃発のため、あえなくも第一次ヒマラヤ計画は挫折の止むなきに至つたのである。

満洲と朝鮮の国境、鴨緑江の源流に聳える冬の白頭山を目指して、一九三四―五年、今西錦司博士を隊長として登山し、続いて学生達は加藤泰安を隊長に、雪のホロンバイルに馬糧を駆つて、大興安嶺の未知の凍てついた峰へ歩を進めていた。

この頃から木原均博士を隊長とするカラコラム遠征をもくろみ、一九三八年を期して、伊藤愿はインドに渡り、現地との交渉を続けていた。ヒマラヤン・ジャーナルにも日本隊カラコラムに来ると報ぜられ、実現の曙光が見えたかの如くであつたが、戦争は次第に拡大して日支事変となり、入国を拒否され、ヒマラヤは再び遠い夢となりつつあつた。

それでも、遠征に対する情熱をおさえることのできない仲間は、その捌口を求めて大陸へと歩を進めて行つた。

一九三八年には学術調査隊と学生隊の二隊が木原均博士と鈴木信隊長のもとに、戦乱の治まらぬ内蒙古の奥地へと調査旅行に向つた。学生隊は奥深く黄河を渉つて、オールドスに入らんとしたが、現地は戦乱の真最中とて多倫附近を歩くにとどまつた。翌年には周布光兼を隊長とする学生の一隊が小興安嶺を横断している。

一九四〇年春には木原均博士のイラン計画をとりあげて、航空機による空地連絡と無電の実験を兼ねて、富士山に登つた。この計画は木原博士の小麦の研究とイランのデマベント登山を目的としたものであつたが、実現の域に至らなかつた。

同年から翌年へかけて、藤本武隊長のもとに樺太の調査を兼ねて、樺太の山中国境近くまで異型の犬糧を三台、オロッコとギリヤークに操縦させて、雪上を走つた。戦火はますます烈しさを加えたが、今西錦司博士を中心とする科学者たちは大興安嶺、ポナペ島等を旅行して、成果をあげていた。

このようにしてAACKの仲間は学生と表裏一体となつて、ヒマラヤへの望みは断たれていたが、広きを求めて大陸を歩いてきた。日本の諸情勢からみて致し方ないことであつた。学術にその情熱を注ぎうる人達は一応の満足を得たであらうけれども、高きを求めて、ひたすらヒマラヤの氷雪に想いをはせていた仲間は、何れにしても終極の目的はヒマラヤにあつたことはいうまでもない。

戦争のためAACKは開店休業の形であつたが、若い学生達は終戦を迎えても、黙々と山を歩いていた。日本人の生活もなんとかめどがついてきたころ、そろそろヒマラヤへ名乗りをあげてもよいのではないかの議が起り、まず第一に取りあげられた山、それは長い鎖国を解いたネパールの中部に聳える未知の山、その名を「マナスル」といつた。

この起りは京都大学生物誌研究会のネパール学術調査計画であつた。一九五二年一月のインド学術会議に出席した木原均博士のインドでの交渉につづいて、木原博士に同行した西堀栄三郎博士は単身、忍耐とその外交手腕を発揮してカトマンズに飛び、入国の申請をして帰国した。

木原、西堀両博士の帰国によつて、AACKの会員は召集され、マナスル計画が討議された。戦後最初の遠征隊としては、全日本的なものとして、「日本山岳会に移譲すべきである。」と計画を日本山岳会に移すことに決定された。

やがて、ネパール王国からマナスル登山の許可が日本に伝えられた。ヒマラヤへの灯火は点ぜられ、西堀博士の努力は報いられたのである。機は熟してきたようである。しかしながら経済的に恵まれない日本の国にあつて、同時に二つの隊がヒマラヤ入りをするということは考えも及ばないことであつた。というのはマナスルの計画が日本山岳会によつて、着々進められていたからである。一九五二年八月、今西錦司博士を隊長とする踏査隊が出発した。この隊には隊長をはじめ、中尾佐助、林一彦の三名の会員が参加していた。

今西隊長の意図はマナスルの登路発見という大きな任務と、日本人がヒマラヤを登るのに欧米人と比較してどうであろうか。その経験を次の年にくる本隊に適應させようとするのであった。學術調査をその旅程に組んでいたことは勿論である。学生時代から夙にヒマラヤを夢み、計画し、五十代にして、ようやくマナスル踏査隊長としてヒマラヤ入りをした今西博士は数少ない機会を、ティルマンの故智にない、できるだけ広く歩いて、ヒマラヤを見てきたいというのがその狙いであつたようだ。

まず第一に、ティルマンが一応手をつけたアンナプルナ四峰を試み、直ちにマルシャンディの対岸の山、チュール（約六二〇〇米）に登つた。秋の旅は日照時間が短かきといへ、毎日のように続く素晴らしいコバルト色の空に、驚きの目をみはりつつマナスルに向つた。マナスルの東面サマの部落からマナスル氷河を登つて、その登路を発見したのである。

やがて、翌年には本隊がマナスルへと向つていた。この隊にも加藤泰安、中尾佐助、川喜田二郎の三名が参加していた。中尾、川喜田は科学的成果を十分に収めた。

マナスル踏査隊が帰国するまでに、伊藤洋平を隊長とする若いOBと学生の一隊は厳冬の北海道・知床半島へ向い、ヒマラヤへの足ならしをすると共に、悪天候の中を知床岳、硫黄山、羅臼岳に登つている。

マナスルの計画に先立つて、桑原武夫教授を委員長として、戦後のAACK再建準備が進められていたが、工楽英司教授がこれを引継いで、準備は軌道に乗りだしていた。一九五三年四月一日、四手井教授室に今西錦司、四手井綱彦、工楽英司、鈴木信と私が相寄り、目標とすべき山の選定が行われた。若い会員はその後ダウラギリ、チュールン・ヒマールを提案した。またヒムルン・ヒマール、チェオ・ヒマールの名もあがつていた。

時あたかも、カトマンズからアンナプルナの南山麓を歩いてきたマナスル隊の科学班中尾から、旅行の様を記した私信が京都に着いた。その中の一節に、

「アンナプルナ二峰の南面、アイス・フォールからの攻撃可能のようである。飛行機はポカラまで飛んでいる。ポカラからシクリスまで三日の行程で、更に二日もかければアンナプルナの南面にベース・キャンプが建設できるだろう。都合五日間で山麓に達せられるのだから、誠にアプローチが短い」と記されてあつた。この通信を読んだ今西博士は五月十五日の京都大学京園での会合で、

「アンナプルナ二峰か四峰を南面からやつてみてはどうだ」と提案した。時期は秋、即ち十月のポスト・モンスーンとされた。この案に基づいてアンナプルナ二峰の計画書

が作製され、十八日の生物誌研究会委員会に、

「AACKの計画として、アンナプルナ二峰に登山隊を派遣したい」と。

この議案は直ちに通過した。案を更に練つて、二十四日私は上京し、松方三郎、西堀栄三郎、伊藤應、工楽英司等の東京在住会員と上京中の木原会長を囲んで、資金、外貨、入国の手続等の重要問題について討議が重ねられた。私の帰洛後、木原会長を委員長とするヒマラヤ委員会が結成され、四手井綱彦博士を準備委員長とする総務会が活動を開始した。

準備はまことに急を要するものであつた。少くとも八月末には日本を発たねばならない。遠征の時期については、今日までの殆んどどの隊が春のプレ・モンスーンに決行されているのをも分る通り、プレとポストの何れを選ぶかについては、議論の余地は十分にあつた。準備の前途には幾多の障害が横たわつてゐることは明らかであり、入国、資金、外貨の諸問題を順序よく処理するのが望ましいことは分りきつてゐた。戦前の二回の失敗に終つたヒマラヤ計画に鑑みて、敢えて一九五三年ポスト・モンスーンに決行することになつたのは、このチャンス逃さず、ヒマラヤ遠征を実践するという行動主義の立前からであつた。

続いて決定すべきことは隊員であつた。参加希望者を全会員から募り、その候補者から誰を隊員にするのが適当かのアンケートをとつてみた。このアンケートを基本として、六月十四日のAACK総会当日、ヒマラヤ委員会では隊員の詮衡が行われた。私は隊員候補者とは、そのゼネレーションが違つてゐたため、山での実力が分らない連中であつた。候補者の山の経歴や精神力、体力、技術、性格について、多くの会員から意見を聞き助言を得ていた。私の頭の中でその働きぶりを想像できるまでになつた。それぞれの任務に従つて、十分な働きを示さざらうことは明らかであつた。この日選ばれた隊員は藤平正夫、伊藤洋平、舟橋明賢、藤村良の四名。予備隊員として脇坂誠、広瀬幸治の二名があげられた。

隊長として、私が計画の当初推薦されていた。五名という隊員は資金関係にしばられた数であつたが、どうしても八〇〇〇米の山を目標にするには手不足に思われた。資金の増額を委員会に依頼し、七月中旬予備隊員の脇坂誠が追加されることに決定した。まだまだ参加して貰いたい候補者があつたが、割愛せざるを得なかつた。私がぜひ隊員にと希望したが、個人的な理由のもとに参加できない者もあつた。スポンサーの新聞社からは、会員である立平宣雄が参加することになり、最終決定の七名の隊員はつぎの通りである。

藤平正夫。二十八歳。経済学部卒。北陸銀行に勤務。出身地が富山であり、山好きの兄二人をもつ生れながら

の山男。十三歳にして北アルプスに足を踏み入れ、その足跡は広く、四季を問わず剣岳の西面、東面を開拓している。見るからに強靱な体軀は第一線に立つて活躍するであろう。彼の専門外ではあるが、氣象観測を担当してくれることになっている。

伊藤洋平。三十歳。医学部の出身で、細菌学を専攻している。穂高の屏風岩正面の岩壁の開拓者として夙に知られている。最近冬の知床遠征隊の隊長をつとめている。戦後沈滞していたAACKにあつて、今西博士を訪ねてヒマラヤ計画を懇話し、今度の計画の遠因をなした男でもある。この隊ではドクターとしての任務の外に、豊富な語学の才能を活かしての渉外係と、さらに隊の写真係として活躍することになっている。

舟橋明賢。二十八歳。法学部出身で日本ペイント株式会社営業部に勤務。彼がもつとも親しんだ山は奥日光の山と谷。続いて穂高、富士山、八ヶ岳、谷川岳、剣岳と豊富な経験をつんでいる。彼は均衡のとれた体軀をもち、自分はどうであろうとも、人を立てるといふ天性の美德の持主であり、てきぱきと事務を処理する才能は隊随一であろう。隊ではマネージャーの大任を果してくれる筈である。

藤村良。二十六歳。農学部で蔬菜園芸を専攻中。彼は戦後、藤平、伊藤、舟橋らの手によつて再建された山岳部を引きつぎ、「科学的登山」をスローガンにして多くの有能な新人の育成につとめてきた。知床遠征の副隊長であり、なかなかの理論家である彼に、食糧係を任せることになつたのは、まさに適任中の適任。かたわら、植物学徒として、可成り厄介な植物標本の採集と整理に當ることになつてゐる。

脇坂誠。二十七歳。農学部で花卉園芸を専攻。卒業後も大学院で『栽培バラの台木について』のテーマで研究を続けている。剣岳を中心に数回の登高を試み、知床遠征に参加。この隊では装備係をつとめ、蝶の採集をすることになつてゐる。多少荒削りのところはあつたが、素直な性格と頑丈な体軀の持主であり、山ではもつとも活躍してくれる男であろう。

立平宣雄。二十八歳。法学部を卒業して、中部日本新聞社に入社。東京総局政治部に席をおき社会党を担当して、国会を走り廻つてゐる政治記者。八高時代、伊藤洋平に指導されて山を歩き、京大時代には、穂高を数度登つてゐる。報道員として、白羽の矢を立てられたのは当然のことである。

最後に、私（今西寿雄）は三十八歳。農学部で砂防工学を専攻した。満洲で四年の軍隊生活とシベリヤで三冬を過ごし、帰国後建設業に従事している。十二歳のとき、はじめて大峰山に登つてから、近畿一帯の低山を数十回歩き廻り、後立山連峰、特に鹿島槍を好んで登つた。済州島の漢拏山、内蒙古旅行、樺太の犬樺行にも参加した。困苦欠乏に耐えなければならなかつたシベリヤ越冬は、私にこの上ない経験を与えたようである。

資金関係はわれわれの計画の規模からいつても、全額をスポンサーに求めることは無理であることが分つてゐた。半額を関西の自治官庁や財界から浄財を仰ぐこととして、京都大学ヒマラヤ援会が結成され、前総長の鳥養利三郎名誉教授が会長に推された。京都、大阪、神戸では、このために何回かの会合をもち、各方面に依頼状が発送された。こうした面倒な事務に、貴重なヒントを与え、多忙な公務の余暇をさいて奔走していただいた鳥養会長をはじめ、共同通信の豊田治助氏、神戸の津田周二氏を忘れることは出来ない。会員の中でも多田政忠教授、小泉仁一郎、睦田菊太郎、野田吉兵衛、近藤良夫……名前をあげればきりが無い。これらの募金はほんの緒についたばかりであつて、その大部分は遠征隊が発してからのことであつた。

隊員の詮衡が終るとともに、準備の促進を計らねばならなかつた。会員の松方三郎（共同通信専務理事）の世話で、スポンサーが中部日本、京都、神戸の三新聞社に決定したのは七月の初旬であつた。

一方東京では藤平、舟橋が正式に大蔵省に外貨使用の申請書を提出するとともに、私は今西博士と上京して大蔵省参事官室の伊藤憲を介して、われわれの計画の意義を説明し、格別の配慮ありたいむねを依頼した。外貨については、全く五里霧中であつたというのが本音であろう。入国申請はかねてネパール政府に提出されてあつた。日本に留学中のクリシュナ氏からの添書も送られていた。この方は多少自信はもつてゐた。時は刻々と迫つてゐた。かくするうちに、七月十四日ネパール政府から待望の入国許可の報が京都にとどけられた。

京都大学の一室に遠征隊本部が設けられ、計画に基づいて、四手井準備委員長、鈴木会計を中心として隊員や若い会員、学生が動員され、使は八方にとんだ。

食糧と低地用装備は主として京都、大阪で購入されて、本部へ集積されてゐた。輸送方法として、費用をできるだけ節約するため、早急に購入できるものを、船荷として七月末神戸港を出帆する大阪商船銀光丸に積込むことになつてゐた。製作に日数を要するものを航空便に託することとした。

私は外貨のことで最後の追い込みをかけるべく上京していると、京都からは外貨使用の許可を待たず、銀光丸の積込みは予定通り行かうと指合がでてゐた。全く無謀といへば無謀であつた。本部の氣勢は正に意気軒昂であつた訳だ。ちようど東京にはマナスル隊が帰国したところで、装備、食糧、現地の状況について、隊員からいろいろの忠告をうけた。

△吊下式のテントは良好である。支柱の継手はユルめにした方がいい。入口は両側につけること。低地用は白色、山ではオレンジ色がよい。▽

▲靴の羽毛カバーは快適である。▼

等々細かい点にいたるまで、根ほり葉ほり問いただして、装備係に伝達した。装備係は緻密な頭脳をもつ山口と精力的な脇坂が各方面に発註した。食糧は理論的な藤村の正確な計算によつて、ラッシュン・システム（一日分の食糧型式）が採用され、それぞれポリエチレンの袋に封入されていた。特別に味つけをした缶詰も発註されていた。医療用として携行することに決定された酸素吸入器は、専門の伊藤が川崎機械（航空）の明石工場へ往復し、これらの品々の総仕上げとしての梱包方法は広瀬の設計によつて、運送会社が製作を急いでいた。マナスル踏査隊に参加した林は彼の経験を生かして、全般に対する注意を与え、これらの準備の推進力となつていたようである。

かくして、第一次輸送の品々は京都の高校生の応援をえて、夜を徹して梱包されて、七月の終りに二屯の荷が銀光丸に積み込まれた。京都での闘いを終えた連中は休養のいとまもなく、直ちに東京に向つた。すでに東洋レヨン寄贈のナイロン繊維製品は夫々の用途に従つて染色され、東京に着いていた。いよいよ高所用の装備の製作にかかる訳である。一部の食糧はポリエチレンに包装されていた。これは試作のものであつた。われわれの戦場は京都から東京へ移つたのである。

京都—東京間は毎日定時通話によつて連絡がとられていたが、とかく意志の疎通を欠くこともあつて、口角泡をとぼして、罵詈が往復したこともいくたびか……作業員の睡眠不足は目立つて、彼等の眼は充血していた。その中でも、さしも頑健な脇坂隊員も面やつれしてきた。出発も迫つてきたというとき、隊員の健康状態は私の大きな心配の種であつた。山麓への旅の間に、何んとか休養と栄養をとらなければならぬ。

外貨使用の許可がおりたのは八月であつた。藤平、舟橋隊員はやつとこのことで渡航手続を出発に間に合わすことができた。日本通運支店の好意によつて、日通倉庫に装備類が運び込まれ、学習院大学の学生の応援によつて、徹宵の梱包のち羽田空港に持ち込まれ、二屯の荷が月末にカルカタ指して飛び立つたのである。

このようにして、「悪戦苦闘の二ヶ月は過ぎて、」第三次ヒマラヤ計画はついに実現した。▲同じことが三回繰り返される。▼という諺はくつがえされた。関西在住の隊員は八月二十五日夜、多数の京都市民、AACKの会員、友人達に送られて京都駅を発つた。準備はすっかり完了した訳でなかつた。東京では事務がまだ山積していた。航空便にも間に合わない装備が本隊の出発真際にやつとどくとどくという始末であつた。われわれは機上の人となつ

ていたが、やつと緒についたばかりの資金獲得はどう結末がつくのであろうか。後援会の人々や会員に万事を託するのほかはない。故国を発つたわれわれは、思ふ存分ヒマラヤの大地に接する訳であるが、われわれはAACKから幸運にも選抜されたという点でもあつて、すでに登場した人々がこの遠征隊を造りあげたことを特筆したい。これらの人々の温かい援助にたえることのできるような成果をあげたい、というのが私の大きな願いである。さらに、かつてAACKの主力として活躍し、われわれには忘れることのできない人、宮崎武夫氏をあげなければならぬ。私の山岳観を成長させていただいた人でもあつた故宮崎武夫氏の霊に、この貧しい報告書を捧げたことと思ふ。

われわれの旅行記は次章から記されるが、伊藤隊員の採集した地衣、藤村隊員の植物、脇坂隊員の蝶の科学的成果については、京都大学生物誌研究会から発刊された。

FAUNA AND FLORA OF NEPAL HIMALAYA.

Scientific Results of the Japanese Expeditions to Nepal Himalaya. 1952-1953. Vol. I. Edited by H.

KIHARA.

を併読されることを希望する。なお藤平隊員の気象報については（日本気象学会発行の「天気」第一巻第四号）「ヒマラヤ登山と気象」に記載されている。ポスト・モンスーンの一端を窺い知ることができるものと思う。

続いて、アンナプルナ登山史を一通り記しておこう。

アンナプルナ・ヒマールはネパール国内を走るネパール・ヒマラヤのほぼ中央に位置し、北緯二八度三〇分、東経八三度四〇分から八四度二五分にわたり、東西に延びた約七五軒の延長を有する山群を総称する。印度測量局の地図（五十万分の一）によれば、東経八四度一〇分以東をラムジュン・ヒマールと記されている。ティルマンはラムジュンという名称は使用せず、アンナプルナ連峰という名で総称している。

この山群の南方約二十五軒に位置するポカラの郊外から、一望のうちにその景観が眺められる。西よりカリ・ガンダキから高くアンナプルナ一峰（八〇七八米）の巨塊が聳え、三峰（七五七七米）へ続き、一たん高度が約五七〇〇米に落ちこみ、この山嶺の大きな窓をなしている。窓から主稜線はゆるい傾斜で四峰（七五二五米）に延びて、特徴のある屋根型のピラミッド二峰（七九三七米）となり、ここからわれわれがラムジュンと呼んでいたピークを経て、マルシャンディに終り、アンナプルナの東端となつていく。三峰から南に派生して、アルプスのマッターホルンに似たマチャ・プチャリ（六九九七米）がポカラの街の北方に聳え、その容姿は孤立した鋭い

ピラミッドとなつてゐる。

これらの景観の美事なことは、ヒマラヤ広しといへど数多くはないであろう。一九五二年カトマンズから空路が開設されたがネパール政府の政策如何によつては世界の観光地となるのも遠くはないであろう。ポカラ近辺の湖に映つた山々の姿は旅情を慰めるに十分である。アンナプルナとは「穀物の堆積」を意味するらしい。ポカラ盆地の収穫の豊かなことを指しているのであらう。

この山群の登山史は永い間の鎖国のため、比較的新しく一九五〇年に始まつている。カリ・ガンダキの西方に奇怪な容姿で屹立するダウラギリを目指したフランス隊は、その登路を発見することができず、直ちにアンナプルナ一峰に矛先を転じ、全くヒマラヤ的でない素晴らしいスピードで隊長エルゾグとラシュナルが山頂に達した。当時は人類が達した最初の八〇〇〇米として、その悲壮な登攀物語りとともに、世界の登山家を奮いたせたのである。

時を同じくして、ヒマラヤのベテランである英国のティルマンはマルシャンディを溯り、アンナプルナ北面の登路を探索したが、マルシャンディ沿いからは一、三峰の登路は発見されず、サブチ・チュ・コーラを溯行して、四峰へのルートを発見した。アンナプルナ・ヒマールの北面の唯一のルートであると断言している。そこで四峰への登高を試み、二ヶ所の仮泊地を経て雪稜上に四つのキャンプを建設して、エヴァンスとパツカードは七二五四米に達した。二峰は四峰の肩を通つて、さらに四軒近くの稜線を辿らねばならず、その峰頂のピラミッドは急峻で困難なようであつた。

一九五二年十月、今西錦司博士を隊長とする日本のマナスル踏査隊はティルマンと同じ経路を辿つて、四峰を試登した。五四〇〇米の雪稜上にキャンプを建設して、さらに荷を上げたが、マナスル偵察という重大任務をもつていたため、じつくり腰を落着ける余裕もなく、マルシャンディの対岸の山、チュル（約六二〇〇米）に登頂してマナスルへ向つた。

ティルマンがマナスルを踏査した時期はモンソン中であつて、マナスルの頂きはモンソンに隠されてゐた。今西隊はモンソン明けの秋、全く晴れ上つた紺碧の空にマナスルの登路を発見して、その任務を果たしたのであつた。もしもティルマンが天候に禍されていなかつたならば、日本のマナスル隊はすつかり状況が變つてゐたに違いない。日本隊にはこの天候の相異が幸いしたのである。

一九五二年の秋にはカトマンズ・ポカラ間の航空路が開かれていた。インドに滞在中のB・R・グッドフェローとフランク・イエイツは翌年の三月にポカラへ飛んで、二週間の短期間ではあつたが、アンナプルナの南面の

アプローチを踏査した。グッドフェローは英国山岳会と地学協会の合同ヒマラヤ委員会(エヴェレスト登山隊)の名譽書記として、エヴェレスト登頂に大きな貢献をした人である。

彼等はセティ・コーラの最奥の部落バルバレーからマチャ・プチャリの山裾の四二七〇米の地点まで登り、南面のパノラマをほしのままにして、マディ・コーラへ迂回してシクリスの部落に入つた。ところが部落民は始めて見るヨーロッパ人のためか、彼等の聖なる雪山を穢してはいけないといふのであるか、異国人の入山を拒否した。村の長老をやつと納得させて、まる一日だけシクリスの裏山へ登ることを許された。それも護衛つきであつた。四五〇〇米のところ、マチャ・プチャリ、アンナプルナ二、三、四峰を真近にして、マディ・コーラのゴルジュの壮麗な岩壁に驚きの目を見はつた。

グッドフェローの観察の結果を要約すると、次のようである。

△モディ・コーラへは入れなかつたが、マチャ・プチャリの足下から見たところではセティ・コーラと同じく、その源頭は巨大な氷河の圈谷となつて、アンナプルナ一峰は鋭く聳え、カンチエンジュンガの南側の如く近づき難く思われた。この附近の地形図は北側と同じく、南側も違つてゐるというフランス隊の意見を確認した。

一峰の南の七一九五米のピークは壮麗な山で、頂上から南々西への主稜は恐るべきステップのある長い稜ではあるけれども、ルートを見出しうるかもしれない。

マチャ・プチャリはマッターホルンと驚く程似通つていて、スケールは約二倍であろう。マルディ・コーラを境として、地図上に示された二つの稜は約五一八〇米のピークに合し、そこから主峰へ南西稜が続いてゐる。南西稜は六〇〇〇米から七〇〇〇米の高度にあつて、第一級の山の困難と取り組む準備のできた、真に固く決意したパーティならば登頂できると信ずる。

セティ・コーラのバルバレー部落附近は一五〇〇米の高さしかなく、ゴルジュは十二、三軒の長さのよう、急な壁と密林になつてゐる。セティ・ゴルジュの源頭の氷河盆地へは勧めめるようなルートではないが、マチャ・プチャリの東側(四六〇〇米あたり)をトラバースして廻りこめるようである。アンナプルナ四峰の西側面、及び四峰からの南山稜の西側面は黒ずんだスラブと雪が交互に水平のバンドでできた急な壁となつて、落ちこんでゐる。

アンナプルナ主稜へは多分三、四峰の中央あたりに達せられるだろう。(註—今西が北面からこの主稜に登つて、セティ・コーラを覗いたが、岩と雪の急な斜面となつてゐた。とても登れそうには思えなかつた。)この主

稜から四峰へは長い山稜により登頂できるだろうが、三峰へは無理であろう。私の写真を見たパッカード（テイルマン隊の隊員）は、この南のアプローチは北面からの一九五〇年ルートより更に困難だといっている。

マディ・コーラは河床に沿って、山の岩壁の裾に上つていよう思われた。その源頭では、一〇軒の広さをもち盆地から流れている永河は恐ろしいアイス・フォールとなつていよう。二峰と六九八六米ピークの間の広い盆地からのアイス・フォールは一部ゴルジュの上の巨大な漏斗の崖を越えて落ちていよう。巨大な氷雪崩が常時落下していた。三〇〇〇米に及ぶ雪崩もあつた。懸垂氷河はゴルジュを登るルートをおびやかすであろう。もしもこのゴルジュを攻めとれたならば、アイス・フォールを迂廻して雪原に達し、四峰へ登頂できる。

黒ずんだアンナプルナ二峰は全山を威圧して、灰黒色の岩のスラブを露呈している。西の稜線は平均傾斜が四〇度位で、さしたる困難はないようだ。頂上に達するには長い頂上の稜線をトラバースせねばならない。さすがはエヴェレスト委員会のオノラン・セクレタリーである。一週間ばかりで、これだけの立派な成果をあげたグッドフェローの着眼には敬服のほかはない。われわれはこんなことは知らずに、同じ年の九月日本を発つたのである。前もつて、これらのことが分つておれば、南面での苦闘は味わなくてすんだであろうに……ポカラで県知事に会つたとき、始めて聞いたのであるが、しかしその内容については、

△さる英国人が三月、ポカラからマディ・コーラを溯つて、アンナプルナ二峰を偵察して帰国した。登れるだろうといつていた。▽

というのみで詳しいことは聞けなかつた。けれども、われわれは小踊りして喜んだ。ところが、実際はグッドフェローの偵察したことを実地にトレスして、漏斗状の大障壁は登れないことを証明したにすぎなかつた。

彼等はシクリス部落で、山への行進を阻止されている。その理由は前述した如き、聖なる神を犯してはいけないと推測されていた。われわれはシクリスのポーターに度々ストライキをやられて、手を焼いたのであるが、山へ登つてはならないというようなことは問題とならなかつた。通訳のディリーの説明がよかつたか、ポカラ県知事のつけてくれた警察官の威光によるものか、同じような容顔をした黄色人種であつたためか、それとも伊藤ドクターの医術によるものか、事件が起つていないので分らない。何としても辛いことであつたことは間違いない。△神聖なる白い頂きを穢してはならない△というようなことで入山を拒否されたとしたならば、これには、何かほかの条件が欠けているように思えてならない。右の言葉が絶対的のものであれば、われわれも同じようにマディ・コーラを溯行することはおろか、ナムン・バンジャン越えもできなかつたであろう。（今西寿雄）



アンナプルナ日記

暑い。全くお話にもならない暑さである。ガンジス河のデルタ地帯にできたこのカルカッタの街は、九月といつても、まだすぎましい酷暑が続いている。まるで、一日中蒸風呂に入っているようだ、とてもいえば、幾分は当つていようか。

一週間前に先発して、荷物の通関やらネパール入りのビザの問題などの処理に当つていた伊藤・舟橋両隊員に迎えられて、ダムダム飛行場に下り立つたのは去る九月六日のことだ。それからは、連日華氏九一度、湿度九〇パーセントという暑さのなかで、私たちは、さまざまな仕事に追い廻された。

日本総領事館への挨拶、入国許可をもらいにネパール領事館への日参、嚴重をきわめた荷物の通関手続き、鉄道輸送の準備、燃料その他の買物、通貨の交換など……。

「日本を出たら、しばらく体が休まる」と、といつていた出国当時の話など、とんでもないことだつた。

今西隊長は挨拶廻りと作戦計画。伊藤ドクターは上手な英会話にもをいわせて渉外事務一切。マネージャー格の舟橋隊員は荷物の処理・手配・会計。気象係の藤平隊員はカルカッタ気象台と連絡して気象観測の資料交換・気象特別放送の依頼に奔走。植物学徒の藤村・脇坂両隊員は世界でも有数のカルカッタ植物園を訪れたり、野菜市場をみて歩いたり、それぞれに、なかなかの張り切り方だ。

着いた当初は、ものすごい暑さと、街頭の余りにしつこい物乞いなどの異国の町の風景に、いさゝか辟易気味であつた私たちも、次第に場馴れしてきて、警察署長と雑談してきたとか、強引に値切つて半ルピー(約三十五円)負けさせたとか、他愛もない自慢談に、「アチャ」とインド流に相づちを打つほどの余裕をみせるようになった。「アチャ」というのは、ヒンズ語で「なかなかよろしい」といつた意味である。

アンナプルナ攻撃の作戦会議は毎晩ひらかれる。が、何といつても計画をずらせているたつた一つの問題、二トンの装備を積んだ銀光丸の入港がおくれているのが悩みの種だ。モンソンの影響で荷役が捗らないための遅延だとのことだ。

私たちがネパール国王へのお土産として持つて来た二鉢のさつきの盆栽も、涉外係の大奮闘でようやく通関と検疫を終えることができ、わざわざカトマンズから、そのために出て来てくれたアマリタナダ大僧正に託する

ことができた。大僧正は、国王に対して一ばん影響力をもっている高僧で、インド国内の仏教の再興にも力を注いでいるとのことだ。インドの第一流の英字紙「ステーツマン」が、私たちの到着を写真入りで大きく扱つてから、在留邦人はじめ、いろんな人たちの訪問と激励をうけた。当地の大学で人類学・言語学を研究中の東洋文化研究所助手の中根千枝嬢、金子良太氏が二度も訪ねてくれたり、マナスルの科学班に随行したというブータン人、戦時中日本海軍の特務機関で働いていたというインド人、フランス山岳会々員だというフランスの尼さんらがやつてきて、シェルパは誰だとか、ポカラからふもとまで路はあるのか、などとかかなり細かいことを聞いては、「成功を祈ります」とお世辞をふりまいたりしてくれた。

九日の夜、日本領事は盛大な壮行会をひらいてくれた。さらに十一日の夕方には、当地の主だつた新聞記者七名が、共同会見を申し込んできた。さすがヒマラヤの表玄関といわれるカルカッタの記者たちだけあつて、質問も、どうしてアンナプルナ第二峰を選んだか、通信はどうしてやるのか、気象通報は放送してくれることになっているのか、酸素吸入器は開放式か閉塞式か、などと、なかなか良いところをついてくる。

酸素吸入器といえば、インディアン・オキシジェン会社の工場で、十五本のボンベに酸素をつめたのだつた。羽田で酸素をつめたまま空輸することを拒まれたために栓を抜くのやむなきに至つたものを、ここで改めて詰めたわけだ。吸入器もボンベも、すべて国産品であるとの伊藤ドクターの説明に、インド人の記者たちは感嘆の身振りを示し、やがてメモを掴んで急ぎ足で引揚げて行つた。

いよいよ明十二日の夜、今西隊長・伊藤・藤村・立平の四名が、先ずカルカッタを汽車で出発することになつた。すべてのお膳立がネパール政府の好意もあつて、極めて順調に進んでいるのに、二トンの装備をつんだ船の入港がモンソンの影響で一日一日とおくれ、これ待っていては時期的に攻撃の好機も逸する恐れもなしとしない状況に立ち至つたことが、この先発の理由である。行く先々で必要な仕事の処理をすすめる一方、アンナプルナ第二峰への進入路をできれば踏査しておいて、船積の装備を携行してくる後発隊の到着を待つて攻撃をはじめようという目算である。

インドの大陸の構成する大きな三角形の基部を横断していく、この急行列車は、しばしば今でも強盗に襲われるとかいう話に、一同「ベンガルの槍騎兵」じみた気持になつた。

たされることになった。ノータンワ着は完全に一日おくれたわけだ。荷物の積下しを終え、待時間を利用して釈迦の遺蹟などで世界的に有名なこのベナレス街を見物することにした。

駅を出るとたちまちリクタク屋にかこまれた。「プリーズ」と「ノー」の応酬があつてタクシーを見つけ、有名なところへ行くと命ずると心得たもので、これが大学、あれが裁判所と下手な英語で説明しながら、四十分で目的の聖地についた。

最初に入ったシナ風の寺は、白と朱と金色のけばけばしい配色だけで、素人目にも安っぽい。ついでM・K・ヴィハラ・サルナートと称する寺にクツをぬいで入る。上品な服装をした現地の見物人が多い。吊鐘のある廊下から本堂にすすむと、正面の仏像はともかく、三面の壁に描かれた仏画が目につく。これは日本人の仏画家野生司香雪（のおず・こうせつ）氏の筆に成るもので壁画の隅に英文と並んで日本語で書かれてある同氏の趣意書によると、インドで発生したのに現在には全く滅んでいる仏教の再興をはかる、マハブダイ・ソサイエティ（大菩提協会）から、日本政府を通じて依頼され、四年間の労作ののち、昭和十一年完成したもので、壁画達為の大願成就はひとえに仏陀の廣大無辺な慈悲の賜物と合掌礼拝する、とみえている。

インド・ネパール国境附近のカピラバツ（ネパール領内）に生れたシッドハルタが、ガヤで悟りをひらいて仏陀となり、ついで教義を説くためにやつてきたのが、このサルナートである。芝の美しい静かなところだ。

そのすぐとなりには、ダメークの墓という、茶のみ茶碗を二つ重ねたような遺跡と、有名なアソカのコラム（円柱）があつた。帰途、タクシーの運転手が気をきかせたつもりであろう、ガンジス河のほとりへつれていった。ガルワル・ヒマラヤに源を發するこの大河は、とうとうたる泥の流れがうずを巻いていた。よくインドの聖なる河に水浴をする信者の群れを扱つたニュース映画などにあらわれてくるのも、このベナレスの町の河畔なのだ。鱗の頭も何とやら、この濁流にひたつて身体が清まる思いがするのにも信心なればこそだろう。

面白いことに、この町にはリクタクが多い。日本のとちがつて後に人力車のようなものがついている。その名も「リキシヤ」。六千台もあるという。

ベナレスは非常によく整つた、おだやかな感じの街だ。立派な舗装道路とその両脇の並木は全くすばらしい。藤村植物学徒にいわせると、こんな見事な並木道路は日本にはどこにもない、とのことだ。イギリス統治の結果であろう。カルカッタでは全くといつてよいほど見受けなかつた婦人の往来も多い。牛が大通りの真中にドックとすわつていたりするのは相変らずだが、乞食には一人もあわなかつた。ただサルナートの広場で小さな子供がていねいに合掌してから手を差出したのにはまいった。乞食して仏陀となつたお釈迦さまゆかりの地であつてみ

れば、カルカッタでやつたみたいにつけから「ジャウ」といつて追払うわけにもゆかない。

カルカッタでは日本人とみると、集つて来たのは乞食と猿まわしとポン引きであつた。ここでは、インテリ層の人たちが「日本から来たのか」と物珍しげによつてきた。駅の荷物係までが「ジャパン・キョウト・ベリーナイス」などとお世辞をいう。

夜十時半、ゴラクプール行きの汽車にのりこみ、好印象をもつてベナレスを後にした。レールは狭くなり、席は二等のコンパートメントが二つ、二人ずつ別れて現地人も相乗りということになつた。

九月十四日（月）晴

今日も昨日と同じように明るく晴れている。そして、また昨日と同じような泥水の氾濫と牛の群れだ。

午後一時、ゴラクプールについた。ここでもモンスーンの影響で六時間のおくれだ。

待合室で荷物の整理をしていると、四十がらみの男が入つてきてなんだかだと話しかけてくる。そしてチャンドラ・ボースというえらい人がいるのを知つてるかと聞く。彼は死んだじやないかというといや、ほんとはどこかで生きているんだ、と真顔で答える。チャンドラ・ボースのことをきかれるのがこれで三度目だ。しかし遠征とは関連ないことなので、突込んできくのはやめた。

例によつて市内散歩に出かけた。リキシヤと馬車がよつてくるが、生憎と英語の分る車夫は一人もない。仕方がないので片言のヒンズー語と手まねで馬車にのりこむ。繁華街に出るとなかなかの人出で、ラジオ店、スポーツ用品店など三・四軒あるのが物珍しく感ぜられた。青物市場は大変な混雑だが、カルカッタのような殺伐さはない。ある広場で象が三頭、鼻でぼだい樹の皮をはぎとつては口へ運んでいたし、サルが屋根づたいに散歩している。概して奥地へ入るにつれて町も、人の生活も平和になるようだ。

夜八時半、ノータンワ行きの汽車に乗りこむ。コンパートメントの「武装状態」は依然として嚴重だ。ゴラクプールを離れるともう電灯がない。雷鳴を伴うものすごいスコールのなかをゴトンゴトン走つて十一時半終点のノータンワについた。雨はあがつてなかなか涼しい。休暇をもらつて帰郷するグルカ兵が数人、やみのなかに消えていく。

私たちはここで、数日前からいろんな準備をしていくれた通訳のディリー君（日本に留学中のクリシュナ氏の弟）や、ガルツェンを長とする七名のシェルパに迎えられた。彼等は今後われわれと終始行動をともしてくれる人達である。ガルツェンは今春のマナスル隊にやはりシェルパのサーダー（頭）として参加、グンディもマナスル

を七五〇米まで登り、ほかのダ・ナムギャル、アン・ニマ、ダワ・トンダップ、パサン・ダワ、タンドウの五人はいずれもイギリス、スイスのエヴェレスト遠征隊に参加したそうそうたる顔ぶれだ。荷物の積みおろしもシエルバが非常に能率的にやつてのけた。

私たちは駅の待合室で一夜を明かすこととなり、シエルバが用意してくれた空気マットの上にスリーピングバッグ(寝袋)を伸べてもぐりこんだときは午前二時を廻っていた。

九月十五日(火)晴

朝六時半にはもう物見高い住民のざわめきに眠りから起された。デイリー君やシエルバもやつてきた。デイリー君の話によるとここから三十数キロ奥地にあるプトワールまで、自動車で行く手配をつけてあるという。ありがたい。ノートンワから人夫に荷物をかつがせて徒歩行進をするというのが当初のわれわれの計画だったが、この分で行くとおくれた日程を少くとも二日分はとりもどすことができるわけだ。

ここでネパール領に入るための手続きをしなければならぬ。パスポートをもつて、まず警察へ行つた。この町へ日本人が乗りこむのは、おそらくはじめてのことなのだろう、かな交りの日本文字が珍しいらしく、ギャガイ云いながらパスポートを手渡ししている。一時間近くも待たされて、やつと署長のお出ましだ。りつばな鼻ひげをたくわえた日本人をつくりの男である。われわれの荷物を珍しげにながめわたして、署員とギャ／＼おしゃべりをつづけ、なかなか手続きをくれない。やつとこのことでエンピツをとりあげヒンズー語でこまごまと書き出したが、何をかいているのやらわからない。三十分も書きつけてやつとサインする段取りとなり、放免。そこから郵便局と税関に行く。税関はなかなか厳重で、おひるすぎまでかかった。

当地の有力者ヒットマン氏の好意で、おそらく最上級と思われる昼食を出してくれたが、四人とも一口々々顔を見合せて、情なさそうな顔つきをすといつた程度のものであった。私たちが当初から利用しようかどうかを考えていた現地食糧の味覚の度合いを知つたからであり、船荷の装備をもたない先発隊が低地旅行の間、ずつとこの昼食には遙かに及ばない現地食糧で三度々々をまかなつて行かねばならない立場を覚つたからだ。

ともかく荷物をつんだトラック、私たちとシエルバをのせた大型ジープは、午後二時半真北に向つて出発した。アンナプルナに向つて直進するわけだ。

日本を出てからここまでの間、荷物の処理など一切の仕事をわれわれ自身の手でやらねばならなかつたが、ここではデイリー君とシエルバがてきぱき事を運んでくれる。遠征隊員ははじめてサーブ(旦那)になつた。

三時十分国境をこえてネパールに入つた。沿道の風景は日本の八月なかごろとそっくりだ。伊藤ドクターは関西線で鈴鹿山脈に向つて走っているのとちつとも変らぬともらず。日本の松杉がバニアン樹やぼだい樹と入れ代つているだけのこと、異国を走っている感じがしない。もつとも車中のシエルバや沿道のネパール人たちの顔付きがあまりにも日本人とにていることからくる親近感も手伝つているのだろう。道の状態は国境をこえてから心持よくなり、お尻をたたきつけなくてすむようになった。

ジープはおおむね十分おきくらいにエンジンがとまり、後押ししたり、ガソリン補給したりしてあえぎながら進む。牛の遊牧が多い。牛のむれを追い抜こうとして、クラクションを鳴らせば鳴らすほど、道をよけようとして車で車の前を一散に走つて行く。

真正面にみえる一八〇〇米位の山々は大雨だ。四囲の風景も見あきた頃、黒みがかつた灰色の雲が上昇していく。その切れ目から、明らかに雲ではない白銀の幕がのぞいた。ヒマラヤだ。今西隊長は地図と磁石で調べた結果、まさしくあれはアンナプルナだと断定した。われわれの挑戦をうけるアンナプルナは、その巨大な容姿を威嚇するために雲間をあげたのか。じつと見守る間もなく、灰色の雨雲につまれてしまつたが、私たちに強い感銘を与えるには十分であつた。

そうこうするうちに雨があがつたばかりのプトワールに入つた。

宿営所は赤壁のかなり大きくて古い家である。二階のテラスみたいところにベッドが運びこまれた。デイリー君とジープの運転手がわめきあつているのは、車代が高いの安いのと争つているのだろう。

戸もたて板もないので、見晴しはあけつばなしによろしいが、ジープのなかでみた一八〇〇米の山なみがおおいかぶさつているので肝心の北の方は見通しがきかない。上高地に入る途中の沢渡部落を思わせる宿場町である。

荷物の整理は翌日廻しとし、今後の行動の打合せをして早目に寝袋にもぐり込んだ。

ブトワールの朝。六時半に起床。まもなくはげしいスコールがやってきた。私たちの宿泊所となつた、この二階から見下ろすと、村の中の川のようになつた路を、十数頭の放牧の牛が、雨やどりの場所を求めて、行きつもどりつしている。

九月十六日(水) 晴

朝食にロティとやき玉子が出る。ロティとは大麦の粉を主とする雑穀粉を水でこねて円形にのぼして焼いたものだ。問題の現地食のはしりだ。藤村食糧係が、おそろおそろ香をかいでみてから、パクリと一口。やゝあつてから、

「まあ、いけんことないですがなあ」

と、半ばお義理めいた判定を下した。

船の荷物さえあれば、日本のうまい食糧がくえることになつてゐるのに……。

「グチいつている暇に早くこの現地食に慣れんとポカラまで歩けんよ」と今西隊長。お茶でグイとおしこむようにしながら、ようよう二枚ずつ食べて終う。

今西隊長は前夜われわれが打合せた結果を通訳のデイリー君を通じてシェルパに命令する。

- (一) 明十七日、ポカラに向つて徒步行進をはじめ。八日ないし九日間を要する見込みだ。
- (二) このためポーターを七十人、本日中に募集しなければならぬ。
- (三) 荷物はポーター一人あたり三十ないし三十五キロ(八ないし九貫目)となるよう、われわれがここまでもつてきた装備の梱包をやり直ししなければならぬ。
- (四) 藤平・舟橋・脇坂の三隊員の到着は二十二日となる。従つてシェルパのうち三人は居残り再びノータングに出迎えてほしい。

さあ人夫の募集と荷物の再梱包は一日でやつてしまふにはあまりにもむずかしい仕事だが、なんとしてでもやらなくては、せつかくのスケジュールがくずれてしまふ。

デイリー君の従者、ミン・バハドゥール君が人夫募集係となつた。藤村隊員はシェルパを使つて再梱包にとりかかる。今西隊長は計画の立案、予算編成、報告書の作成に没頭、マネージャーの舟橋隊員と装備係の脇坂隊員

がないので、隊長が代りになつてやつている。伊藤ドクターはこの地方の有力者の診療をはじめ、とにかく全装備の半分をつんでいる船の入港が、不可抗力によるとはいへ日ましにのびているということが、ここでわれわれの仕事を決定的にややこしくさせているのだ。先発後発の二隊に分れたのもそのためだつたし、分れたために装備の分配も一々一覧表と首つ引きでしなければならぬ始末だ。伊藤ドクターも、医薬品の大部分が舟積みになつてゐるので、思うように薬がつかえないらしく、渋い顔をして、患者の胸に聴診器をあててゐる。

人夫募集はなかなか難航のようだ。ミン君がむらがつている部落民を前に、エンピツをもつたままの右手をふりまわしながら、さかんにわめいている。きいてみるとわれわれの予算に組んだ日当三ルピー(約百五十円)ではお話にならず、六ルピーでなければ動かぬらしいとのこと。いま帰農休暇でぞくぞく帰農したり帰営したりしているグルカ兵が、七ルピーも八ルピーも出しては人夫をやとつているため、この地方の日当水準が乱されているというのが、一ばん大きな理由だ。それに収穫期前後の秋祭りが連日のようにあるので、動きたくないらしい。デイリー君が、

「五十人も集まればいいんじゃないか」

とのんきなことをいつて今西隊長を悩ます。

パチパチそろばんをはじき終つた隊長は、貨幣の両替にいく。ネパール国の貨幣単位は、インドと同じルピーだが、価値が低く、インド・ルピーが円貨で約七十五円であるのに対し、ネパール・ルピーは約五十円である。そしてやつかないことには、この地方には紙幣が通用しないので、全部一ルピーの硬貨でもつていかねばならぬ。直径三種もある大きな硬貨を五百枚ずつ袋に入れて運ぶのだが、人夫の日当だけでも大へんな重量になる。銀行なんてものはないから、お金持の家で両替してもらつてくる。

夕方また雨がはげしく降つた。例によつて、牛の緩慢なあわて方がおもしろい。

荷物の梱包は、夜も懐中電灯をたよりにつつけられ、全員汗みどろになつて、夜十二時ようやく完了した。ベッドにホタルが二三匹とんできている。明日からいよいよ行進である。

九月十七日(木) 晴

朝六時半ごろ、ベッドの近くでガヤガヤワイワイと騒々しいので目が覚めた。人夫がきたのだ。この土地の有力者とか巡査とか人夫か見物かわからないのが群つていてゴツタ返しているなかで、前日つらい思いをしたロテ

イを早々とかじる。天気は上々だ。後発隊に置手紙をする。もつともディリー君の話によると、ノータンワープトワール間のパイロアというところに飛行場があり、うまく飛行機をチャーターできれば一気にポカラまで入るという手があるらしい。高い人夫賃を払って長旅をするよりは、結局安くつくだろうということだ。もし後発隊がこれを利用できれば、私たちを空から追越すこともありうるわけだ。

人夫賃といえば、五ルピーで折合いがつけたいらしい。前日最後までブツクサねばっていた男もけりとした顔でできていた。七十人集まっているそう。有力者が巡査を使つて集めたものらしい。シェルパのサーダー、ガルツェンから、ルピー貨を二日分の十ルピーずつ重ねたのを前金として受取つたものから、荷物を運びはじめた。日本なら背負い繩を肩にかけてかつぐのを、このポーターはひたいにかける。左手で背負い繩を確保し、右手にもつた丈夫なツエで安定をとるといふ仕組だ。私たちがすてたタバコの吸殻は、足の指にはさんですくいあげるようにひろうという器用さ。彼らが全部はだしであることはいうまでもない。

かくてポカラまで一二〇キロ、幾山河をこえるキャラバン旅行ははじまつたのだ。今西隊長らわれわれは、後発隊をまつたため当地に残るディリー君、シェルパのダワトンドップ、アン・ニマ、グンディと別れ、十時半ブトワールを出発した。

人夫たちが町はずれで食糧を調達するのに一時間も待ち、いよいよ山路にさしかかった。まもなくスコールがやつてきて苦勞の多い登りとなる。二時間のうち、八九〇米の峠につく。ここからまた二時間の下り、吊橋を渡つてまもなく、小さな部落に到着。午後四時四十分、二階建の家を宿泊所とする。標高四九〇米。五十分の一の地図しか持合せがないので、正確にはわからないが、八キロもすすんだかどうか危つかしい。

コックのタンドゥッが作った夜食が出る。食器もスプーンも持たないわれわれのために、フライパンのようなナベに竹箸をそえてくれた。日本人に箸ということは、マナスル隊に参加したガルツェンがよく心得ているわけだ。献立はパンと鼻につくパラパラの現地米にウリの煮つけ、じゃがいも、かしわのこまぎれ。コックの腕前はイギリスのエヴェスト隊の訓練をうけたものだ。舌つづみを打つて、というわけにはゆかないが、この程度のものならまあまあいけるとしなればなるまい。

星月夜にほんのりと浮ぶ四囲の風景は、日本の奥山に入ればどこにでもみられる風景である。遠くにきこえるタイコの音と歌声は、お祭りなのだろう。

「ちつとも異国情趣がないなあ」

と伊藤ドクターはむしろ不服気だ。パイヤとバナナの樹がわずかに日本の風景でないことを感じさせるにすぎ

ない。

今西隊長がラジオの感度を調べるためダイヤルをひねつて、日本語放送をきいている。人夫たちはあちこちの軒下でごろ寝している。これでもちやんと宿賃を払っているのだというから面白い。

九月十八日(金) 晴

六時起床。七時出発。二時間半で一〇〇〇米の峠。民家が数軒あつて茶店にいろんな小間物が並んでいる。バナナを買求める。このあたりの生活は裕福なのか服装などはきれいだ。子供がちゃんとネパール帽をかぶり、ズボンをはいている。

この道路は非常に交通量が多い。西部ネパールとインドをつなぐ唯一のメイン・ストリートであつてみれば当然のことだろう。胸に一ぱい記章をつけたグルカ兵も、二人ばかりの人夫をつれてしきりに往来し、片言の英語でお愛想をいつて過ぎる。彼等も、郷に帰れば郷に従え式で、軍隊グツを背中にぶらさげてはだしで歩いているが多い。

七十人の人夫は、ゆるい歩度だが着実にすすんでいく。彼等の服装やもちものをみると、少くとも二種以上の種族がいるようだが、はつきりしたことは分らない。道中の風物などについても、理由だの由来だの知りたことはヤマほどあるのだが、どうにもならない。四人の日本人と八十人近くのネパール人とが一つの集団をなして歩いておりながら、両者の間には表情でよみとる以外ほとんど意思の疎通がないという、奇妙な旅行をしているのである。一三六〇米の峠をこすと北の方向に電線がはつてある。あとで電話線だと分つたが、藤村隊員

が

と道づれになつたグルカ兵にきいたら、

「イエスサー・ノーサー」

と答えてニツと笑つたという。万事こんな調子だ。かといつて、たまたま英語の話せるものに出会つても、うるさいやらしくこいやら、そのカメラはいくらだの、その時計は、万年筆は、といかにも物欲しそうでゆつくり話もできない。

峠を下り河を渡つたところのルームレという小さな部落で宿営となる。標高八〇〇米。午後三時だ。もつと前進できる時刻だが、峠を二つ越し、川を二つ渡るといふはげしい行程だったので、人夫がかなりまいっているよ

うだ。先頭と後尾と一時間余のひらきだつた。

ポーターの親分格が二十人ばかりの子分をつれて、ガルツェンに食つてかかつている。ストライキを起しかねない気配だつたが、ガルツェンはどうやら納得させたようだ。

伊藤ドクターが診療をはじめ。三カ月前からひざに大きな傷をつけているというポーターに、貴重なペニシリンをつけてやりながら

「日本でこれだけの治療をやつたら相当高くつくんだがねえ」

とぼやきながら、セロファン・テープを判削膏代りにベタベタはつて、「アチャ」

頭が痛い、熱がある、寒気がするなどと、中にはもらえるものなら何でも、といった調子のニセ患者もあるようだ。

ネパールの家はおしなべて壁と床が同じ粘土でできていて、壁の上半分は白く壁の下半分と床は赤くしてある。そしてカマドが床の隅にやはり赤粘度で床に固定して作られている。片言の英語が話せる現地人をつかまえて、藤村隊員がなぜ赤い色を使っているのかと聞いたら、何度もつかえたり詰つたりしながらネパール共産党の勢力について一席プチ出したのでお笑いになった。

ネパール政府から、この沿道の部落に対して、近く日本遠征隊が通るから然るべく取計らうようとおふれが廻っている旨、この男が話してくれた。

夕食は相変らずの献立だが、なれてきたためか、「味の素」を入れさせるようにしたためか、結構味わるようになつてきたから、不思議なものである。



四、アンナプルナ見ゆ

九月十九日(土) 曇後晴

七時半出発。河沿いに前進する。前日ブツクサいつていたポーターたちも黙々と歩いている。

今日通過する予定のタンシンは、さつきから山の中腹にみえているが、田んぼみちが蜿々とつづいて一向に近づかない。途中キザッぽい英語を使う男が「この道を歩くより飛行機で飛んだ方がよいのでないか」と注意してくれたが、今さら何をいつても始まらない。路は沙羅双樹の林のある尾根にかゝる。直射日光がすごく熱い。

昼食にロティをバターでいためたのが出た。これなら十分いける。あすから一枚ずつふやしてもらうことにする。

タンシンに入らず近道をとつたポーターたちから一時はなれて、私たちはクツを買うためガルツェンをつれてタンシンの町に入った。低地旅行用のクツがないとて、ブトワールで買求めた安っぽい運動グツが、早くも破れてしまったからだ。

タンシンは一四五〇米の高所にあるかなり大きな町である。そして、町の風物を見て、こんなところにこれだけきれいととのつた町があるのにおどろいた。全体に傾斜のつよいところなのに、サッカーのグラウンドが作られている。商店街は二階、三階建の家が軒をならべ、二階のテラスには植木鉢をおいてある。商品も豊富で、ラジオがあり、蓄音機がまわっている。道路はきれいな石だたみで、凹凸がない。学校があり、病院がある。山の頂上は近いのに、水は水道栓をおせばどんどん出る。町の人たちの服装も清潔だ。子供までちゃんとネパール帽をかぶり、ズボンをはき、髪はきれいに分けている。婦人が、耳・鼻・首・腕・足首の八カ所に、赤・金・銀とりどりの色の飾りものをきらびやかにつけて、なかなかきれいである。

クツを買っている私たちをとりまいた群衆のなかの、学校の先生らしい男から、戸数一〇〇〇、人口八〇〇〇ときかされた。山また山の奥深いこの地方に、なぜこんなにすばらしい町が発達したのか、だれしもが抱く疑問だが、それを説明するだけの時間の持合せがない。水を一ぱい所望し、バナナを買つて、この印象的な町をあとにした。今春、ダウラギリに挑戦したスイス隊が、帰途この町に三日間滞在したというのも、なるほどとうなずけた。

郊外には至るところ牛が放牧されており、山の斜面は草刈機を使っているかのように、ほとんど一本の雑草も

のびていない。牛がたえず草をむしるからだ。農家はパイヤとバナナでかこまれ、憩いの菩提樹があちらに一本、こちらに一本と広い木蔭を作っている。詩歌、音楽なんにでもあれ、この景観は芸術家にまたとない素材を提供することだろう。また歴史的にも、おそらく興味ぶかい所であるに違いない。

この町をあとにしてまもなく、山の尾根路に出たとき、われわれは思わずアッと絶叫してその場に坐りこんでしまったのである。雪の山ヒマラヤがドカッとみえたのだ。前山のはるかかなたに、これが地球の北の果だといわんばかりの高さと鋭さで天を割つてそりたつ白銀のヒマラヤ。AACK(京都大学の学士山岳会)が二十年來夢にまでみてきた中部ネパールの巨峰に、いまはじめて接することができたのだ。みえる、みえる。一ばん左がダウラギリ(八二七二米)だ。不恰好な山だ。南面の壁はものすごい。雪がほとんどついていない。スイス隊は今春ここに苦闘して引下つた。その右がアンナプルナ第一峰(八〇七八米)だ。これも南面は、すさまじい切れ方だ。「全くすげえ岩壁もあつたものだなあ」

伊藤ドクターは十六ミリのシネ・カメラのクランクを廻しながら、つぶやいている。しかし、あの絶頂は、一九五〇年にエルゾグらのフランス隊によつて、別の側からではあるが、既に人間の足跡が印せられているのである。

そこから右に、第三峰(七五七八米)第四峰(七五二五米)がみえる筈だが、一面に雲におおわれている。そのやや右、雲の上にわずかに頭を出しているのが、目ざす第二峰(七九三七米)だ。雲のために細部の観察ができないのが残念だ。隊長はここから二峰までの距離を八〇キロと測定した。二峰の右にやや低くみえるのがラムジュン(六九八六米)。さらにはるか右に三つの雪山がバランスのとれた姿でそびえている。今春日本の三田隊が挑戦したマナスル(八二二五米)とピーク29(七六〇〇米)、ヒマルチュリ(七八六四米)のいわゆるマナスル・トリオである。ダウラギリからヒマルチュリまで以上のジャイアントを五座もふくむヒマラヤを、一望の下におさめることができるというすばらしいパノラマが、一体どこにあるのか。私たちは先行のポーターに追付くこともわずれ、この雄大な景観を、あかず眺めているのであつた。

次第に上昇していく雲のために姿をかくしていくヒマラヤをながめつつ、そして、アンナプルナ第二峰いかに高くとも、その頂上をわれわれの足の下にふまえずにはおかないであろう、と固く心に誓つて、略をいそいだ。それにしても、日夜この大パノラマをあかすながめてくらししているタンシンの人々は、一体ヒマラヤにどんな感じを抱いているのだろう。ピークの名前をきいても、ダウラギリとアンナプルナ連峰を知っているだけだ。そして真正面にみえる連峰がアンナプルナと呼ばれて、この地方の田畑を見守ってくれる「穀物の神様」になつて

いるのだ。彼等にはそれだけで十分なのである。

一五五〇米の峠を越したところの、まだヒマラヤの見える斜面にできたボグナスという部落の民家を宿泊地とした。半弦の月夜の下に静かに眠るヒマラヤを仰ぎつつ、われわれは来し方の数日を語り、これからの抱負を話しあつた。

九月二十日(日)晴

「そら見えるぞ」

隊長の一声で、われわれは五時にカメラと双眼鏡をもつてシュラフザック(寝袋)から飛び出した。アンナプルナの氷河を調べ、またとない大パノラマをカメラにおさめるのだ。だがマナスル・トリオは、厚い密雲のため全くみえない。アンナプルナ連峰もよくみえない。ダウラギリ山群だけがいやにはつきりしている。始めはどんよりした灰色だつたのが、やがてマナスルの方向から昇る太陽とともに、ヒマラヤは白く、そして赤く映え、ついで白銀となつた。

第二峰はまだ全容を現わさない。逆に雲が多くなるばかりだ。あきらめて朝食をとり七時半出発した。約三十分歩くと、雲がだんだん切れて第二峰がみえた。双眼鏡でくはい入るようになっている今西隊長は、氷河の末端はすごいゴルジュになつていくがよくわからぬ。六〇〇〇から六二〇〇米附近のアイス・フォールはやはり難所だという。概観しただけで登高のポイントを指摘することは軽卒かもしれないが、カギはやはりこのアイス・フォールの突破にあるようだ。二峰と四峰をつなぐ稜線、及びそこから二峰頂上に走る急傾斜の稜線はカミノリの刃のような鋭さをもっているようだ。

「なあに、稜線に出さえすれば必ずゆける」

と今西隊長は自信に満ちた声だ。

まことに暑い日である。気温そのものは三〇度にならないのだが、日斜が強いのだ。だから、木蔭に入るとまことに気持ちよい涼しさだが、カンカンteriりつける路となると堪えられないくらいだ。シエルパたちは、わりあいきれいな谷川でこの時とばかり洗たくをし、からだを洗い、ひげをそつていた。

隊員は「モンストーンはやつぱり明けらしい」とつぶやく。十八日から一滴の雨もふらないのである。

「いまごろベース・キャンプにいたことができたらなあ……」
と思わずグチが出る。

十一時三十分、カリ・ガンダキを越えた。標高六二五米。一名クリシュナ・ガンダキとも呼ばれるこの河はアンナプルナ第一峰とダウラギリの二つのシャイアントの流れをあつめて南に、そして東に走る急流である。川幅は四〇米もあるうか。灰色の粘土がうねっているような流れだ。

ここからまた登りとなる。暑い。ポーターたちもあえいでいる。

道中とところどころに、大きな菩提樹があつて広い木蔭を作り、休憩の場所になつている。荷物をおろして休憩できるように、石を積重ねた広い荷物置場がある。木蔭でひるねしている旅行者をみかけることもあるし、部落のなかの菩提樹では、部落の集会所となつている。

部落の家の構造が奥地へ入るにつれて若干ずつ変つてくるのが興味をそそるが、先を急ぐ旅では止つて調べることもならず、なんとも致し方ない。

四時半プレバツティという一一一五米の部落で宿営する。民家の軒下だ。

伊藤ドクターは、日ましにふえてくる患者の診療に大わらわ。今西隊長は、隊長としての仕事のほか、氣象観測の整理。藤村植物学徒は途々採集した標本の整理。それぞれ毎夜十一時すぎまで仕事に追われる。

くらやみのなかで時々ゴゴゴという音がする。超特大の底に水が入ったキセルでタバコを吸っているのだ。どこからともなくお祭りの太鼓がここでもきこえてくる。

九月二十一日(月)晴

六時起床、七時出発と日程通り。宿営といつてもテントをはるのでないから、出発までに手間どらない。高低の差の少いらくな日かげ路をすすむ。

子供が至るところで山羊や牛を追っている。単調な歌をうたつては山の頂上まで家畜を追い、日ぐれ時もどつてくるのが、彼等の生活である。婦人はすべて金属の食器を灰でみがくこと。壁と床の雑巾がけ。そと目には、感激も野心もない日々のように見える。しかし彼らは彼らなりの「幸福」をつかんで満足しているに違いない。彼等のつづらな眼が、それを物語っている。

一三三〇米の峠に出る。まず左にダウラギリが一昨日みたときよりもかなり近くにみえる。しばらくすすむと、アンナプルナ第二峰とマナスル・トリオがみえる。雲が邪魔してこまかくはわからないが、やはりポイントはいす・フォールにあるようだ。もつと山の下の方がみたい。ポカラに近づくにつれて五〇〇〇米以下の部分は恐らく見えなくなるだろうから、氷河の末端がどうなっているのか、雪線の付近はどうなのかについては、こ

の辺から調べなければ、チャンスを失うというわけだ。二時間近くも雲のはれるのを待ったが、次から次とわいてくる雲はついに希望をかなえてくれなかつた。二峰までの直線距離は六五キロだ。

金持らしい人が背負い台にのつかり、トランクを二つかいだ人夫を従えてのぼつてくる。四、五歳くらいの子供の手をひいた夫婦がおりていく。ひたいでかついでいるカゴに、きれいな模様のきれをかぶせてある。彼等が菩提樹の下でカゴをおろすのをみていると、まず毛布にくるんだ乳呑児が現われ、つぎにナベとツボの炊事道具が現われた。

石ころばかりの急な下りだ。雨がふつていたらポーターはずいぶん難儀しそうな坂だが、雨はここ数日来一滴もふらない。

さてキャラバン旅行も五日目となると、ポーターもかなり馴れてきたか、コンデイションもよさそうだ。ポーターのなかにカトマンズからきているのが五人いる。今春マナスル隊にやとわれ、こんどまた日本の遠征隊がくるといので参加したとのことだが、なかなか愉快な連中で、休憩のたびに歌をうたつたりタイコを打つたり、他のポーターに気合いをかけたりしたのしんでいる。軍隊でいさばさしづめ分隊長格といったところだ。

ミン君はキャラバン隊の唯一の紳士だ。ワイシャツをきて革ぐつをはいて、コーモリ傘をさして手ぶらで歩いている。ポーターの休憩が長すぎると何やらわめいてせき立てる。ポーターのえんま帳をもっているという、いわば監督官だ。

シェルパは、低地旅行では荷物をかつがない。自分の身廻品だけをリュックでかつぎ、日本うちわであおぎながら、ポーターにらみをきかせている。サーダーのガルツェンは、何もかつがない。私たちよりも上等の旅行グツをはいて、コーモリをさして歩いている。まず曹長か准尉あたりのところ。炊事軍曹のタンドウは、部落に入ると物資を調達してまわっている。

ポーターのなかに夫婦が一組、親子が二組いる。休憩のたびに妻は夫の、子供は父親ののみをさがしたり、しらみをつぶしたりして、情愛こまやかなところをみせている。

五時、九七〇米のブーブレ部落につく。魚の泳ぐのがみえるという、日本をはなれてはじめてみるきれいな川に入つて、からだを洗つた。

九月二十二日(火)晴

ポーターにマラリヤ患者らしいのが二人出たために、荷物のふりわけに若干手間どり七時半出発。ずつと川沿

いの道をすすむ。ほとんど高低のない単調な路だ。

相変らず往来が多い。ランブと毛布、ナベとツボと食糧袋、そして時たまではあるがクツ、それにククリと称する、小刀からまきわりまでの用を果す小型の青龍刀のようなのを一まとめにしておいてある。衣食住の三拍子をそろえ、日暮れば軒下に夜露をしのぎ、日高ければ木蔭に午睡をむさぼるといふ、いわば行住坐臥、人間至るところ青山ありの大悟の旅行であり生活である。一見してお葬いとわかる行列にしばしば出会う。

マリヤ患者調のポーターは、フワフワとおどるような足どりから、身で歩いている。そいつの分を元氣なポーターがかついでやっている。五〇キロを越えていようが、平氣なものだ。

四時十五分ガイル・ジャガール部落で宿営。標高一二七〇米。部屋のなかにとり小屋がくつついている。にわとりと共寝するわけだ。ポーターは菩提樹の下で石コロを三つばかり組みたてたカマドに二、三本木ぎれをもやして夕食を作っている。

伊藤ドクターの診療がはじまる。ポーター十数人のほか、現地人がわんざとおしかけている。われわれの通過をつたえきいて、待ちかまえているためか、日を重ねるごとに数がふえてくるのだ。悲鳴をあげたドクターは、ついに以後部落民は「婦人と子供」に制限するとのおふれを出した。が、果して徹底したかどうか……。

前から不思議に感じたことだが、ネパール人は治療してやつても、ペンを貸してやつても感謝するということがなく、私たちのクツをふんでも遺憾の意を表するということがない。「ありがとう」とか「すみません」という言葉を知らないのだ。総じてネパール人には感情を表現するということがない。

私たちのねているそばで部落民がカン高い声でしゃべりまくっている、サーブに対してちつとも失礼ではないらしい。もつともこうした世界でエチケットをうんぬんしたがる方がおかしいのかもしれない。

九月二十三日(水) 晴夜雨

私たちと同居している早起きどりにおこされる。また川ぞいの田んぼみちだ。元氣なポーターは一時間余も休みなしですつとぼしている。

十時、プリコートという小さいな部落を通過し、若い人夫が二人ここで革グツを買った。ここから谷川にそつた急な坂となる。坂を上りきり、二時、一八九〇米のヌワコートという部落につく。地図ではかなり大きな町になつているが、家もまばらである。もつとも屋根のこわれた刑務所があるところをみると、かつてはかなりの町であつたらしい。

黒いチョッキをきて、村田銃みたいな銃をかついで往来するのが多い。何人かにきいたところを綜合すると毎年この時期にポカラで検査と訓練があるとのことらしい。昔日本でやつていた簡點呼というやつだ。

一九七〇米の峠に出る。アンナプルナが幾重もの雲におおわれ、全くみえないのを残念がついていると、飛行機が一台、南方から飛んできた。行方を見守るとポカラとおぼしき上空を旋回して高度を下げた。ブトワール出発の時、デイリー君からきた飛行機が、バイロワからとんだのだろうか。藤村隊員は

「あれはてつきり後発隊がチャーターしたやつですよ」と主張する。

「もしそうなら万事うまくいくのだがなあ」

と今西隊長。

三時デオラリ部落についた。はじめ菩提樹の下の休憩所に設営し、珍しげな部落民にとりかこまれながら

「これも一興、一つケツカフザして悟りでもひらくか」

と冗談をとぼしていると幾日ぶりの雨がやつてきたので、小さな民家に居を移す。

さあ明日はいよいよポカラにつく。われわれの顔や腕は日焼けで真黒だ。現地食にもすつかりなれた。後発隊がさつきみた飛行機で私たちを追越したとすれば、ポカラで一日休養だ。

九月二十四日(木) 晴夜雨

七時出発。一九二〇米の峠に出る。アンナプルナ連峰がぐつとのしかゝつてみえる。ここまできるともはや一峰から二峰までを一望の下におさめるといふことができない。二峰までの距離は四十数キロだ。左から一峰、三峰、そして三峰の前面に高度は劣るがマチャ・プチャリという鋭い山。右に四峰をして二峰。一峰と二峰は五〇キロもはなれている。日本の北アルプスにあてはめてみると、一峰が槍ヶ岳とすれば二峰は御岳あたりになる計算だ。しかも三峰と四峰との間の尾根は深くきれているので同じアンナプルナとはいつても、一・三峰をふくむ山群と二・四峰をふくむ山群とは別箇のものだといつて差支えなからう。

二・四峰はむしろラムジュン・ヒマールに属するとみてよいのではあるまいか。

二峰をいろいろ検討するが、その結果は日本で検討した結果と違っていない。やはりアイス・フォールの突破がカギだ。稜線の風はずいぶん強いように見受けられる。

シエルバもアンナプルナをみてよるこんでいる。パサン・ダワがポーターを相手に両手の指を折つてみせてさ

かんにしゃべっているのは、フランスのエルゾーク隊長の凍傷の話でもしているのだろう。

高低のない尾根筋を、ヒマラヤを仰ぎながらすすむ。ダウラギリもみえる。マナスル、ピーク29、ヒマルチュリもずいぶん近くみえる。快適な散歩路だ。万里の長城のような石壁が至るところに長々とうねっている。牛が田畑に入るのを防ぐものらしい。ヒマラヤを背景にきれいな芝生で笹をふいている子供。赤や金色の首輪・腕輪・足輪をつけて、水くみのツボを肩に歩く女。平和な絵。美しい音楽。明るくて静かな大スベクタクルだ。ポカラに近いというためか、ポーターも大はりきりで、急な下り坂もノンストップで飛ばす。

飛行場がはるかにみえる。双眼鏡をのぞいた隊長は、三つの白い帽子と黄色の帽子がみえたようだという。後発隊はもう作業をはじめているらしいと付け加える。

これに活気づけられたように、飛行場へかけ足のような足どりでもたどりついたが、どこをさがしても日本人の姿はみえない。荷物もない。現地人が飛行機の発着をみるために集まっているだけだ。前夜からの推測は全くぬか喜びに終わった。

まもなく着陸してきた双発飛行機の事務員に事情をきいてみるとつぎのようだ。

- (一) 飛行機は前日から飛ぶようになった。十月一ばいまで飛ぶ契約になっている。
- (二) 航路はカトマンズーポカラーバイロワを一日一回往復することになっている。
- (三) バイロワに日本人が三人待機しているのみだ。明日あたりはこの飛行機でくるのではないか。
- (四) 君たちの一行が山の中を歩いているのがみえた。われわれは諸君のためにできるだけの協力をするであらう。

というわけで後発隊がともかくも飛行機できてくれることになれば助かるのだ。

ここからポカラに入り二時五十分芝生のきれいな広場についた。スイス隊か日本のマナスル隊かテントをはった跡がある。私たちもここにテントをはり、人夫に日当をはらい、ともかくも八日間のキャラバン旅行が事故もなく終わったことを祝い、カル Катタを出てはじめて一杯のロクシー(焼酎のようなネパールの酒)にのどをうるおした。

三〇ルピーずつもらった人夫は、喜び勇んで帰っていった。このうち十八人がベース・キャンプまでの荷上げに残った。

ポカラ州の知事がきて、人夫の募集はかなり困難だがなんとか努力しようとの話であつた。夕方から雨となり深夜まで降った。

五、マデイ・コーラへ

九月二十五日(金) 晴後雨

朝五時半、テントから脱け出して、広場の真中に立ち、まだほの暗い中に浮んでいるアンナプルナ連峰をみる。広場の東側のバザールの家々も、まだ固く戸をとざしている。静かな夜明け前だ。

山々の輪廓が、次第にはつきりとしてくる。左手の西から、アンナプルナ第一峰、マチャプチャリ、第三峰、そして私たちの目ざす第四峰と第二峰、その前にラムジュン・ヒマールの峰々が、いまや静かに眠りからさめようとしている。思わず身の引きしまるような神々しい光景だ。

双眼鏡を片手に、今西隊長と伊藤ドクターが、かわる／＼二・四峰のスリバチ状になった部分を見きわめようと懸命になつている。太陽が第一峰から順々にねむりをさましていくところには、もう下の谷から巻きあがるガスのために顔をかくしてしまつた。駄目だ。

シェルパたちが、前夜のどしや降りにぬれたものを干している。広場の一隅で警察隊らしい銃をかついだ数人が、ラッパを先頭に行進をしている。

さて、ここを出発するまでにしなければならぬ仕事は多い。まず一ばん大事なことは、ポーターの募集だ。ポカラ州知事の前日の話では、この地方ではどうも集まりにくいとのことなので、一苦労だ。プトワールのポーターも、十八人残っていたのが六人にへつてしまつた。

食料の買入れ、インド・ルピーの両替え、それに、後発隊が飛行機でとんでくるのではないかというわけで、飛行場へも毎日様子をみに行かねばならない。荷物の整理もある。

午後から雨となる。飛行機は、気象がわるいので今日は飛ばないということで、今西隊長、伊藤ドクターがガツカリしてもどつてくる。

夕方ポカラ州知事に招かれ、マナスル隊が残した「ジャパニーズ・ティー」をすすりながら、よもやま話にひとときをすごし、秋のお祭りでポーターは動きたがらないこと、ポカラは人口一万三千の、西部ネパール唯一の町だということ。私たちが八日間にわたつて歩いてきたところを飛行機は三十分たらずで飛んでしまうということなど。

雨はずつと夜まで降りつづいた。十八日から二十三日までは一滴の雨もふらなかつたのに、昨日からは午後か

ら夜にかけて雨のところをみると、モンズーンは明けたのかどうかわからない。いずれにしても、一日も早くアンナプルナのふところに入らねばならぬ。

九月二十六日(土) 晴後雨

朝アンナプルナがよく晴れた。二峰と四峰の雪をあつめてぶくぶく泡立って見えるアイス・フォールから頂上までの状況は、よく観察できる。双眼鏡で見ると、なだれがあちこちに落ちていて、

六二〇〇—六三〇〇米の高度にかゝっているアイス・フォールから、七二〇〇米のゴル、そこから二峰あるいは四峰への登高ルートは、一応予定することができるものの、マディ・コーラの奥からアイス・フォールの末端あたりまでの下の部分が、四峰から南東に走る尾根とポカラ郊外の前山に邪魔されて、望むことができない。

七時ごろからポーターがポツポツ来はじめたが、果して七十人集るかどうかはなんともいえないと、サーダールのガルツェンが首をかしげる。八時、九時、十時をすぎても集まらない。片隅でポーターが、ミン・バハドゥールとガルツェンを相手にさかんにわめいている。五ルピー(二五〇円)の日当ではいやだとゴネているのだ。ポーターが必要な人数だけ集まらないとすれば、隊員も同時に出発できないことになるというわけで、藤村隊員が装備と食料を分割するための目録表を作り出さねばならないという気のみみようだ。

十一時半になつて、やつとガルツェンがオーライといつてきた。やれやれだ。町外れの菩提樹の下で整理して前進をはじめたのが、午後一時十五分。

道は東方に向い、稲田を突切り、川沿いとなる。川の渡渉や湿地帯などの通過で、一々クツをぬぐ。現地人ははだしだから、橋をかけたりみちを直したりする必要はないのかもしれないが、愉快ではない。

三時四十分、たつた二時間半ばかりなのに河原の芝生で野営となった。ここは土曜日が休日なのだから、とあきらめてテントをはる。まもなく豪雨におそわれ、テントのふちにみぞをほるのに大わらわという一幕で夜になった。

九月二十七日(日) 曇夜雨

七時半出発。川を渡渉して急な登りとなる。尾根路に出ると、右手はるか下に、二峰から流れるマディ・コーラが谷を深くえぐつてうねっている。ずつと尾根筋をゆく。

このあたりの耕作物は米とひえととうもろこし。見渡す限りの山が、谷川のふちからほとんど頂上近くまで、

ピシッと田畑が耕されているのには感心する。段々になつていのが、等高線の入った立体地図をみるようだ。数戸しかないと思われるような民家の軒下で昼食をとっていると、こんなところにこんなにも、とおどろくほどの部落民がおしかけて、私たちが腰をあげるまで立去ろうとしない。そして、私たちのすてるものは、タバコの吸さしはもちろん、カンヅメの空カン、写真フィルムの空箱、なんでもかでも拾いあげて、大事にふところにしまいこむ。プーンとおつてくる乳くさい彼等の体臭には閉口する。とくに御婦人ときたひには一人だけでもかなわない。

相変らず菩提樹かバニアン樹におおわれた休憩所がある。ポーターの調子はよろしくない。牛の歩みそのものだ。前夜の雨でほとんど眠っていないためらしい。また急な上り坂となる。ワシがむらがつている。雨がポツポツやつてくる。カトマンズ・ポーターは順調に歩いていくが、ポカラのポーターはずいぶんろい。私たちのだれかがタバコを吸っていると、一本くれとよつてくる。ふてえ野郎だ。ガルツェンが「ポーターズ、ノーグッド」をいいながら、こんどは手ぶりで、しかしながらもつと歩かせねばならないと意思表示をする。

いく人かのポーターの足に血が流れている。山ひるにくわれたのだ。タクという部落で、石のスレートで屋根をふいた家をめずらしがつっていると、部落民が「サーブ・ズウガ」といつて足を指さす。みるとクツ下が真赤だ。クツ下のぬい目からもぐりこんだ山ひるが腹一ぱいに血を吸いこんでくたばつてやがる。

ずつと低くまでおりているガスのために、視界はきかない。ヒルが多い。路はようやく山路らしくなる。四時、タプラン部落で宿営。ここまでくると、もはや街道筋ではないためか、部落民の見物がすごく多い。こんなところに外国人がくるのは、おそくはじめてのことだろう。したがって例の牛だかヤギだかのおいがすごくくさくさ。

夜通し雨の音。

九月二十八日(月) 曇

ポカラのポーターが若干帰ってしまったので、補充やら何やらで、出発は八時となる。段々になつてい田畑のあぜ路を伝つて、ぐうつとくんだり、マディ・コーラに注ぐ支流に出る。竹の縄で支えたかんたんな吊橋があるが、危いから渡渉した方がいいと、シェルパがいう。ポーターに夫婦が二組いて、この渡渉に、夫が女房の手をとり荷物をかついでやつて、うるわしいところをみせたのには、カメラをむけていた隊長たちを「アジャーパー」といわせた。アッチャーファー(ネパールの言葉でなかなかよきであるの意)をもじつたしやれた。

これをこえて、マディ・コーラの河原に出た。牛と羊を放牧してある草地に、一本の菩提樹と石瓦の小さな小屋がある。これで晴れたヒマラヤをあおぐことができれば、スイスあたりの、いわゆるアルプよりも、数等まさる景観だろうなどと考える。

河原を廻り、さらに段々の稲田の間をドンドンあがついて、午後三時、シクリス部落に入った。およそ二〇〇戸はあるかと思われる大きな部落だ。標高二三六〇米。マディ・コーラ沿いの部落としては、一ばん奥にある最終部落である。

ここでもまた、ものすごい数の野次馬に包囲される。例の乳くさいにおいもさることながら、牛のフンが至るところに集積されてあるので、とてもたまらない。だいいち、これを気にすると一歩も歩けない。ポーターのしんがりがついたのが五時。荷物にさわつたり、われわれの持物を手にとつてみたり、野次馬どもにはかなわぬ。民家の二階に居を占めることができ、やれ幸いと思つたのもつかの間、ドカドカあがつてきてはすわりこんでしまう。追つても追つてもあがつてきて、おちおちメモの整理もできない。その厚かましきにはまじめに腹も立てられない。

夜になつてもガヤガヤワイワイ。ポーターは二日行程のところを三日できて、ちやんと三日分の日当をもらい、毛布をひつかぶつてどこかへ消えていった。

九月二十九日(火) 雨

ポーター募集で一日のび。一日中雨が降つた。ここからベース・キャンプ予定地までの計画をねる。三日くらいで三五〇〇ないし四〇〇〇米の地点にベース・キャンプを建設することはできないか。要はポーターの能力次第だ。五十万分の一の地図では正確なことはわからないが、ともかく路はまだついていて、偵察隊を出そうかとの話もだが、一日も早くできるだけ前進するために、行けるところまで行つてみよう。偵察はそれからいいじゃないか。後発隊はわれわれがベース・キャンプを建設していることを期待しつつ追つているのだというわけだ。そこでポーターの募集である。ここでまた七十人あつめねばならぬ。村長格の男にきいてみると、集めるとも集めないとも要領をえない返事でたよりない。

日本の岡山市にいたというグルカ兵あがりの学校の先生にきいても、「わからない」の返事だけ。これから先にはまだ人家が数軒あること。シーズンには羊飼いが雪線近くまで入つていくことくらいを知り得た程度だつた。

とにかく、アンナプルナを南側から接近した岳人がいないことだから、われわれがこの目でみる以外には方法がないわけだ。

終日降りつづいたなかを、この日も部落民が終日私たちの宿営所をとりまいていた。

九月三十日(水) 晴後曇

朝ラムジュン(六九八六米)の主峰が、谷間のガスをつきぬけてものすごく高くみえた。ここでもポーターの集まりはわるい。ガルツェンやミン・パドゥールや部落の顔役が四方八方に飛んで、二人三人とあつめてくるが、七十人にはほど遠い。あすから、もう十月。われわれが日本でたてた日程がずいぶんおくられているだけに、事がスムーズに運ばないことほど気持をいらだたせるものはない。

せまい庭に並べられた荷物をとりかこむ部落民で身動きもできないなかを、一枚のゴザのうえで二人の少女が盛装してもらつてゐる。朝からお祭りでもあるまいにといふかつたが、部落民の表情をみると、どうやら私たちの壮途を祝福するための踊りを始めるらしい。やがて単調な太鼓と歌声に合せて、ミス・シクリスが単調な踊りを舞い出した。しやがんだり背のびしたりして、ぐるぐるまわるのは蛇の踊り、ノコギリに似た棒ぎれをかついで踊るのが剣の舞というところだろう。足を一歩ふみ出すわけなく、動作が緩慢なのですぐ見あきてしまう。そのうち赤・黄・青いろとりどりの花をつんで花輪をつくり、私たちの首にかけて、どうぞ腰かけて踊りをみてくれという。ポーターのことでそれどころでないのに、迷惑しながら義理立てをしていると、こんどは牛乳と米粒を入れた皿をもつたミス・シクリスが、私たちのひたいにペタリと米粒をくつつけてくれる。迷惑至極なことながらこのあたりの慣例であるかもしれないものを破ることははばかれて、されるがままにみると、ミン・パドゥール君が両手を合せたりひろげたりゼスチュアたつぷりに、「アンナプルナ」という言葉を二三度はさみながら、嚴肅な宣言をやつた。一体どんなことをおつしやつたのやら、あきめくらの私たちには知るよしもない。ガルツェンが祝儀を出すべきだという。なんのことはない、踊りを買わされたわけだ。

さて、ガヤガヤワイワイのうちに、七十人あつまつたのが十一時。出発は十二時近くとなる。

段々畠をおりて谷川をわたり、マディ・コーラをずつと下にみながら、絶壁をまいて下つたところの一軒家までくると、ポーターは動かなくなつた。三時だ。一日わずか三時間くらいの前進で終りとは、なんたることかといらだつたが、手まねで、これから先は山ヒルが多くて野営地がないといつてきかない。どうにも仕方なくテントをはる。

十月一日(木)晴

ラムジュンがきれいにみえる。近づくにつれてだんだん高く見え、グッとふりあおがなければ望むことができない。路はマディ・コーラ沿いに上下している。

山ヒルが飛びついて、ポーターの足は無残にも血だらけだ。十歩すすんで足もとをみると、十数ひきのエゲツない形をした山ヒルが、血を求めて頭をふりあげている。頭をのぼしたときの長さは、五センチくらいはある。棒ぎれで落そうとしたつてきかない。クツでふみつけたくらいでは平気だ。草の葉のうらに待ちかまえているのがヤツと飛びついたら、手でつかんで放り投げない限りクツ下からもぐりこんで、死ぬまで血を吸うことをやめない。そのうち手にまで飛びつくようになる。

十一時ごろまた降り出した。マディ・コーラはせまい谷だ。川幅は十米程度だが、水量は多い。水は灰色にごっている。おそらく永久に灰色だろう。

一時半ごろ、ポーターは雨をさけて岩かげに入ってしまった。勝手に野営の準備をはじめた。シェルパたちが尻をたくようにして促しても動かぬ。半日行程しか歩かずに、何ぬかすかといきまいてもダメだ。テントを張つて雨の音をききつつ、ポーターの質の悪さに憤慨した。

西部ネパールではポーターのことで苦労するとは、日本を出るときからきいたことではあつたが、こんなにひどいとは思わなかつた。

十月二日(金)晴

五時半起床。山がよくみえる。六〇〇〇米台のアイス・フォールが泡立ってみえるが、おどろいたことには、その末端が切れてしまつて、赤茶の岩壁がのぞいている。その左右はほとんど垂直に近いと思われる大障壁だ。下の部分はまだみえない。どうもすごいところのようだ。

伊藤ドクターは、シェルパのダ・ナムギャルをつれて、前進路の偵察のため七時出発。われわれは八時出発した。マディ・コーラ沿いに、尾瀬沼のような路を行く。

谷川に出る。丸木橋を渡れないポーターのために、ガルツェンらが、ククリで木を切りたおしてそえ木とし、竹のひもを作つてしぼりつけ、一時間くらいのアルバイトで立派な橋をこしらえた。

それを渡つてもまもなく、石垣造りの家が二、三戸あるところで、ポーターは、昨日、一昨日のように、荷をお

ろしてしまつた。十一時だ。なんのことはない。シクリスから一日行程のところを三日かかつて歩いている。クノくらえといった気持だ。こんなにも程度の悪いポーターでは、使いものにならぬ。

ミン君がポカラへ下つて強いポーターをさがして来ようと思案する。ともかく先行している伊藤ドクターがもどるのを待つて、今後の対策をきめることにして、荷物を一つとところにまとめた。

午後二時すぎ、もどつた伊藤ドクターの報告によると、マディ・コーラ沿いには路がなく、上流は三〇米くらいの滝となつて十数段もかかっているとのことだ。「この分では、谷をつめていくことはまずできない。隊員は行けてもポーターは絶対にのぼれないから、左の尾根の岩壁ぞいにジャングルを切りひらいていくほかはない」とつけ加える。

結局、明日本格的な偵察隊を出すこととし、とりあえず現在地点をベース・ハウスとすることになつた。標高二三八〇米。ここは畠のなかで、ジャングルの山にかこまれたスリパチの底にあたる。快適な場所ではないが、荷物を動かせぬ限り、ここに一応滞在せざるをえない。

そして、いずれにしても荷上げに必要なポーターも集めてこなければならぬし、食糧も要ることなので、あすミン君がポカラに下ることになつた。

そのうち後発隊もやつてくるだろう。

午後から夜にかけて雨。ここ数日来、午後になるときまつて雨となる。この気象が全般的なものか、この地方だけのものか。もしこの谷特有のものとするれば、ポーターを伴う私たちの行動は午前中だけに限られるわけではなはだおもしろくない。

果してここからアイス・フォールまでの高さ約三〇〇〇米の間はどうなつていようだろうか。



十月三日(土) 晴後曇
 前夜の決定通りこの偵察隊が出た。今西隊長、伊藤ドクターは、シェルパのガルツェンとダ・ナムギャル、それにカトマンズのポーター三人を伴ってマディ・コーラの源流をめざして出発した。藤村隊員は、パサンダワをつれて西方の支流をつめていつたが、視界が全然きかなかつたという。数時間して本流偵察隊のポーターが隊長の連絡をもつておりてきた。

「一時半、氷河の末端についた。標高二七二〇米。ここにテントをはり、翌朝さらに偵察をつづける予定だ。このあたりにはベース・キャンプに適當な場所がない。ここから先はまだ見当がつかない」
 午後になると、例によつて雲が下りてきた。まだモンソンは明けていないのだろうか。

十月四日(日) 曇

主流をつめていつた今西隊長と伊藤ドクターらが戻つて来た。いきなり隊長は、

「あかん、あかん、ひどいところだよ、南面は——」とためいきだ。

説明によると、つぎのようである。

- (一) 氷河状のところをつめていつて、三一九〇米までのぼつた。
- (二) その地点から観測した結果、二峰と四峰から出ている尾根がとりまくスリパチ状の底にあたる部分がアイス・フォール(水瀑)になつている。その末端の高さは、だいたい五〇〇〇米と思われる。
- (三) そのアイス・フォールが、こんどは漏斗状をなしている大障壁の底(約三〇七〇米)に向い、雪と氷と水とが一本の滝になつて間断なく落ちていく。
- (四) その雪や氷が漏斗の口から押し流され、長さ一二〇〇ないし一三〇〇米、幅は広いところで二〇〇米にわたつて堆積し、その末端が二七〇〇米の高さにまで達している。氷河というよりも氷河状をなした氷の堆積といつた方が正確だ。
- (五) 大障壁は一五〇〇から二〇〇〇米内外の高さをもち、正面も右も左も、氷と水の滝が落ちていくところ以外は、すべてこの垂直に近い大障壁をなしている。

(六) この障壁は荷物を全然もたなければ登れるかもしれないが、ポーターは登れない。強行すれば必ず事故を起す。

(七) 終日ほとんど二十分おきくらいに、なだれの轟音が障壁に反響している。

各方面の遠征に参加したガルツェンも、両手をひろげて「ノー・グッド」とさじを投げたという。

潤葉樹のジャングル帯からいきなり岩石帯になつており、針葉樹林帯と草地帯は大障壁があまりにも急峻で、あまりにも高いために省略されてしまつていくという、ちよつと類例のない植物分布を示しているわけだ。そして氷河が発達する余地もないほどひどいのだ。

「こんなヒマラヤつてあるのかい」

昨夜、大豆大のダニに噛みつかれたという伊藤ドクターが、吐きすてるようにいう。

「北面は急峻だから、南面はゆるやかだろうなんて、とんでもないこと、北面よりずっと急ですワ」と、今西隊長。

あまりにも絶望的な地形に、しよげかえるのも忘れたほどの絶望ぶりだ。しかし断念するかどうか、結論はまだ早い。

十月五日(月) 晴時々曇

今日も偵察隊が出た。隊長と藤村隊員は、二日分の食料をもつて本流に入り、伊藤ドクターは、地形全般をみるためにテントをもつて、支流をつめていつた。

天候が昨日から、変つたようだ。ベース・ハウスから仰ぎみるラムジュンには、西風をうけてすごい雪煙をあげているし、これまで午後からきまつて雨が降つていたのに、昨日から降らず、しかもガスが巻き上つて来ない。モンソンが明け、秋が来た徴候なのか。

夜に日をついで私たちのあとを追つてきた後発隊の藤平・脇坂の両隊員が上つてきた。カルカッタ以来二十五日ぶりの再会だ。舟橋はポーターをつれて明日上つてくる由。つもる話も数々あるが、話題の中心はやはり偵察の結果である。

十月六日(火) 晴時々曇

舟橋隊員をつれたポーターの隊がつくと、間もなくおひるすぎに、伊藤ドクターが戻つてきた。

「完全にだめだ」

五〇

朝の晴れ間に、第二峰・四峰の頭とアイス・フォール、及び大障壁の一部を望むことができたが、不吉な予想は、ことごとく的中していることを認めざるを得なかつたとの偵察報告だ。

「よし、転進しよう」

あまり明らかすぎて、悲劇もくそもない。

隊長の帰着を待つて計画の変更を協議することとした。

転進するすればどのルートをとるか、ポーターをどうするかと話合っていると、隊長から伝令がとんできた。

「二千岩の側壁を三七〇〇米までのぼつて奥の方をのぞいてみたが、四日の偵察状況と変りない。結局こちら側からの二峰、四峰はダメ。漏斗状をなしている部分は、なだれの巣で、全く手が出ない」
これで結論は出た。南面からする攻撃は断念せざるをえない。

十月七日(水) 晴時々曇

午後二時半頃、偵察から戻つてきた今西隊長を中心に、一同すぐ計画の再検討に入つた。

まず南面からの攻撃は断念することを確認したのち、ベース・ハウスに残つていた五隊員が前夜来話し合つてきたことを参考意見として舟橋隊員がひろうする。

隊員「ともかくこのベース・ハウスを撤収して、ほかへ転進すべきだというのがみな意見であり、攻撃目標は

当初の予定を変えることなくアンナプルナにおくべきだというのも、一致した結論だ。従つて今後の計画は、

北側にまわつて第四峰を攻撃するということになるが、隊長の見解はどうか」

隊長「北側にまわるとはわれわれのとるべき態度としては正しい方法であり、また残された唯一の途であると思ふ。そしてまた北側からの攻撃が南側からの攻撃にくらべてはるかにらくだということも、一つの条件として考えられると思ふ」

隊員「ここには一日ものんびりしていることは許されないから、新しい計画をたて次第、このベース・ハウスを撤収した」

隊長「少人数で機動性に富んでいるというのがわれわれの隊の特性の一つになつているのだから、機敏に動くことは必要であり、またできることでもあるが、要はポーターがどれだけ集まつてくるかにある」

隊員「ポイントはそこにある。東廻りでいくにしろ、西廻りでいくにしろ、ポーターの集り具合を計算に入れないければ、計画は成立しない」

隊長「基本的な構想はどんなのか。ナムン・バンジャン(五七八五米)を越えるのか」

隊員「ここからナムン・バンジャンを越え、マルシャンディ河にそつて北側へ出るというのが最短コースだが、いろいろ確かめたところによると、この地方のポーターはナムン・バンジャンの峠の下までしか行かないだろうということだ。五七八五米の峠に雪が降るかららしい。晴天つづきで雪が降らなければ越えるかも知れないという状況だ。しかも、向う側の新しいポーターも、峠をこえてこちら側まで荷物をとりくるといふことを見込めないとすれば、峠の下におかれた荷物をわれわれとシェルパと若干のカトマンズ・ポーターで何回も峠を往復して運ばねばならないことになる。

そこで一日も早く北側にベース・キャンプを建設するという前提と、ナムン・バンジャン越えの困難を併せ考へて、転進の構想をたててみると、

- 1 隊員とシェルパと若干のカトマンズ・ポーターで、できるだけだけの軽装備でナムン・バンジャンを越え、八日間くらいの旅行のうち、ベース・キャンプを建設する。
- 2 登高に必要な装備・食糧は、一部の隊員がまずポカラまでおろし、そこから東廻りに北側へ出る隊商路を通つてベース・キャンプまで輸送する。この間十数日を要する。
- 3 本隊はベース・キャンプ建設後、装備・食糧がつくまでの間に偵察と登高をつづけ、概ね六〇〇〇米前後の地点に前進キャンプを建設できるようルートを確保、装備がつき次第直ちに頂上攻撃できる態勢をとつておく。

これが現在考えられる最も能率的な転進方法と思ふ

隊長「荷物はベース・キャンプにどの程度集積するか」

隊員「原則的には装備・食糧をふくめて一トン五〇〇を予定している。登高日数は頂上攻撃の日をもふくめて二十日という計算である」

十日という計算である」

隊長「隊員が再び別れて行動することの不利や峠越えの困難を思うと、軽々にはきめられない問題だが考へてみる」

こんな調子で真剣に協議を重ねた結果は、結局ここから再び二隊にわかれ、東のナムン・バンジャンを越える本隊と、西のポカラ廻りの輸送隊とにわけて、四峰北面のベース・キャンプに達するとの結論に達した。

この決定をデイリーとシェルパたちにつたえ、直ちに装備・食糧・輸送のそれぞれの計画の立案、ポーター募集の手配などにとりかかった。

ブローグは、再びはじまつたのである。脳裡にやきつけられた南面の二峰と四峰の姿は忘れられないが、この氷雪にピッケルをふるうことができないとて、もはやなんの未練もない。

十月八日(木)

八日は朝から夜にかけて完全に一日、装備・食糧のふりわけに忙殺された。シェルパもカトマンズ・ポーターもふらふらになるほどの激務だった。

ナムン・バンジャン越えは、ポーターの関係で、われわれ自身も二十キロの大型ルックを背負っていく。装備は極度にきりつめて、ポカラ廻りの輸送にまわすのだ。

それにしても、われわれがヒマラヤを目ざして以来、七人そろって生活する日数のなんと少なかったことか。ベースでようやく一緒になつたとたんに、また東と西に別れて行動せねばならないのだ。

十月九日(金)

ポーターが、まだシクリスから上つて来ないので出発できない。とにかく、ポーターが確保できない限り動くことはできないのだ。どれだけ、果して集ってくるだろうか。その数によつて計画は変つていく。トランスポート・オフィサーの舟橋隊員は、終日、あらゆる場合を想定して、輸送計画を立案し、それによつて装備計画、食糧計画をも立て直すといつた厄介な仕事に忙殺されている。その他の隊員も、それぞれに荷物の整理やら、分担の仕事の検討やら、あわただしく動きまわっている。私たちの前途は、果して「凶」か「吉」か、それは誰にも分らない。

七、ナムン・バンジャンを越えて

十月十日(土) 快晴

いよいよ今日出発だというのに、五時半から一部荷物の再梱包だ。梱包のやり直しは、転進ときまつてから何度目のことか知れない。それというのもポーターの集まり具合がよくなく、集つたかと思えば、山に降つた新雪に腰を抜かして帰つてしまつたりして、そのたびに、この食糧は削ろう、この装備は下から廻る藤村隊員に持つてきてもらおう、ということになる。私たちの行動は、ピンからキリまでポーターの条件に左右されるだけに、ポーターが予定通り集るか、どのあたりまで歩いてくれるのかは大問題である。もつともこれが遠征というものの実態なのかも知れないが、いずれにせよ大へんなことだ。その大へんな輸送事務にキリキリ舞いするのが、舟橋隊員だ。ともかく、この日は九時になつても雲一つあがつてこない快晴だ。この分ならポーターも歩くだろう。一応九日間の生活の場となつたベース・ハウスを撤収、藤村隊員、デイリーらとしばしの別れを告げて、丸時二十分出発となつた。藤村隊員らは、北面での登高にあたつて緊急には必要でない装備・食糧を携え、一たんポカラに下つたのち、キャラバンを編成してマルシャンディ河沿いに私たちの後を追つてくることになつている。

東の方にくつとのしあがつている長い長い尾根にとりつく。

ポーターは三十数名。とくにえらんで集めた優秀な連中だが、お祭りをひかえているのと、ナムン・バンジャンは雪があるというので、バンジャンの下までしか荷を運ばないということになつている。その代り三日間で飛ばすという。

隊員自身もはちきれような大型ルックをかつき、大へんな山越えだ。「ポーターなみですなあ」とだれかがぼやいてみても、どうにもやむをえない。ポーターは少いのだし、それに一日も早くベース・キャンプを建設しなければならぬという心理的強制がある。シェルパもサーブ(隊員)の荷をみても、みんな大きなルックをかついでいる。旅行中は原則として荷をもたないシェルパにも、こんど場合はのんきなことをいつていられない。

路はカシ類の樹々が生い繁る小暗いじめじめした山路だ。ところどころに牛が数頭、放牧されている。糞が路一ぱいに流れていて、珍しいことではないが汚くてくさい。よけようにもよけられないのがいやだ。

二八〇〇米地帯から、しやくなげが現われてきた。そして三〇五〇米あたりから、ツガの樹らしい針葉樹が、二本、三本といった調子で現われてきた。南面にも針葉樹はないことはないのだ。それにしても数が少いし、三二〇〇米でもう森林限界となつてしまった。これから上の方は、しやくなげとカンバ類の灌木がつづく。

午後四時半、三五〇〇米のキャンプ地についた。この日一二〇〇米登つた勘定だ。このあたりは羊や牛の放牧地らしく、小屋作りの骨組みが数ヶ所にある。一帯ははじめとした湿地帯だ。

一休みしていると、これまで真下のマディ・コーラの谷間から巻きあがつている雲のために全くきかなかつた展望が、雲の上昇とともにひらけはじめ、アンナプルナ第二、第四峰の南面が眼前に現われて来た。今西隊長らが五日間にもわたつて進入路を偵察して登高不能との結論を出したその場所が、あますところなくみられる。ツルテンになつてゐる漏斗状の大障壁に、氷や水が流れおちては、全く手がつかぬ。

藤平隊員が「まず、いのちが二十なくちや、何ともなるまいて」とつぶやく。

第二峰はみえないが、第四峰は残照をあびつつ雪煙をとぼし、来るならこいと私たちにいどみかかつている。ラムジュンが、真正面に頭上におおいかゝり、そのはるか東方にうすく雪をいただいた山々は、いづれも美しいカールを形成し、日本でいえば、槍・穂高連峰をアルプス銀座からながめる光景である。勿論、スケールは段違いだ。夕方五時の気温五度。

十月十一日(日)晴

五時半起床。ようやく陽がさしてきた。七時出発。路は登る一方だ。展望は、何一つさえないものない突抜けのながめだけに、かえつて味気ない。雲などのアクセサリがないと、ギラギラ光るばかりの雪山も、感興をよばない。ポカラ平野、シクリス部落がよくみえる。九時ごろ、しやくなげ帯も終り、岩石帯となつた。放牧のあとが多い。一面のメドウだ。だから路も羊の糞でうずめつくされている。

それにしても、左手に近くみえているラムジュンは七〇〇米にはわずかに足りない山ながら、何と高いことだろう。こちらは一步一步高度をかせいでいつているつもりなのに、相手のラムジュンもだんだん高くなつていくような気がするのだ。ヒマラヤではしばしばそのスケールのあまりな大きさにかえつて高さの観念をそこなうといわれるが、この場合もそれに似た経験なのかも知れない。

それからなだれである。たえず雷のような轟音をあげて、なだれが落ちていく。ドドンというすどい音にふり返ると、ラムジュンのほとんど稜線に近い部分から、大きなわからない雪の大きな塊がぐずれ落ち、沢筋

を一ぱいにうずめつくして落ちていくのだ。ルックからカメラをとり出してパチリとなだれをおさめ、レンズを換えてもう一枚シャッターを切つても、なだれはまだだつづいているといつたありさまだ。おさまつても、もうもうたる雪煙がなかなかしずまらないすさまじさもさることながら、なだれのスケールの偉大さには感じ入つたことである。

十二時、四六〇〇米地点で昼食。勾配の少ない路だが、高度のわれわれに及ぼす影響はまぬかれぬ。呼吸が次第に困難になつて、ピッチが落ちてくる。シェルパやポーターたちは、こんな高度には十分馴れているので、ドンドン飛ばしていく。

道案内の男にいわせると、キャンプ地まではまだまだ遠くて、明るいうちには到底つけないだろうとのことだ。ガスに巻かれて時々路を失いそうになりながら、あられの降る岩石帯をこえ、ついで広いカールの底を歩むうち、暗くなつた。青暗い空に切れるような三日月がさむむとかがつてゐる。

われわれはついに、今西隊長・藤平・舟橋の組と、伊藤・脇坂・立平の組と、それぞれはなれて岩小屋でピバーク(露営)せざるをえなくなつた。懐中電灯だけをたよりに、岩石帯を歩くことは到底できないし、何よりもまして疲労が大きかつた。水は一滴たりともなく、チョコレートの一かけらもなく、持合せの防寒衣とスリッポン・バックで、わずかの暖が感じられるにつれて、食欲はひしひしとおそつてくるが、それでもおかに打上げられた魚のようにあえいでいる私たちの消耗し切つた疲労には、到底打勝つべくもない。

いかにポーターの確保が困難だからといって、私たち自身も一人前の荷をかつくことは無理だつたのではないかと思う一方、これだけの荷をもつて初めての経験である五〇〇〇米以上の峠を越すことは、来るべきはげしい登高へのこよない成果を提供することになるのだ。いつの間にか私たちはうとくしてゐた。

十月十二日(月)快晴

ピバーク地の岩小屋にも陽がさしこんできたころ、迎えにきたシェルパに荷物をもつてもらい、出発した。一時間余で四七七〇米の峠に出る。路はカール状をなす山の中腹をうねりながら細々とびちぢみしている。

はるか下の方にマルシャンドイのうねつてゐるのがみえる。ようやく東側に出たのだ。ピーク二九とヒマルチユリがみえる。二つのピークが同時にカメラのファインダーにおさまらないほど、距離は小さくなつてゐる。

ついで二つ目の峠に出る。ケルンがたくさんつんである。これが第二のバルジャンだそうだ。これを越えるとずつと下の草地帯に、ダイダイ色のテントが二つ・三つ、われわれの到着を待っているのがみえた。

さすがに疲労も忘れたかのような足取りで一氣にかけおり、テントに飛びこんだときは、おひるを過ぎていた。標高は四四〇〇米。

そして、熱いお茶にのどをうるおす間もなく、ひる夜の区別もなく眠りこけた。

ポーターたちはわれわれの寝ている間に、ナムン・バンジャンの下まで荷上げし、たんまり賃金をもらって帰ってしまった。

十月十三日(火) 快晴

七時十分出発。いよいよ今日はナムン・バンジャンを越えるのだ。

メドウを降り切り、谷川をわたると、路はようやくくわしくなりはじめる。北側の真正面に切り立っている岩壁の下の斜面を、ジグザグにくぐつとのぼると、平らな石を積んだ休み場に出る。

ヒマルチュリ、ピーク二九、マナスルの三山が、バランスよくそそり立って偉容を誇示している。

「南面はすごい壁だなあ」

「そうだなあ」

あまり感激のない言葉を交すだけだ。ルックをおろしてサイド・ポケットからカメラを取出すのも一苦勞である。そしてまた岩石でガラガラの路を一步一歩からだをおしあげていつて高度をかせいでいくのも、より大きな苦勞である。

急峻な堆石のうえをあえぎながらのぼっていく。雪が現われ出した。太陽がギラギラと雪をてらし、その反射が眼を強く刺す。もう五〇〇〇米はとづくに越えているにちがいない。一步々は頭痛を伴い、疲労の色を濃くしていく。

昨日シクリスのポーターがあげた荷物が岩陰に集積されてあつた。これらの荷物は明日にでも、隊員、シエルパ、カトマンズ・ポーターの手で、何回でも往復してバンジャンから運びおろすのだ。

シエルパたちはうたをうたいながら、軽い足どりでバンジャンの向うに消えていく。それをみている私たちは、あおむけにひっくり返つてあえいでいる。

これがしかし今後の貴重な体験になるのだ。この積極的な意欲だけが岩と雪の非情な世界を足の下にふんまさせせる。

一步一歩、ただそれだけの行為が集つたにすぎない。目ざすナムン・バンジャンに到達できたのだと思つても、

感慨はちっとも回転しない。

雪のこおりついたガレ場を一直線に下り、キャンプ地に飛びこんだ。このあたりは雪ばかりで水気がない。ラディウス(ガソリン・ストーヴ)が快適なうなりをたてて雪をとかしつつづけている。

ところで、地図によると、ナムン・バンジャンは五七八五米と標示されているが、氣象観測係の藤平隊員の測定によると、この峠は五一四〇米の高度しかもつていないということであつた。また私たちの常識的な観察からみても雪線と比較して五七八〇米はないだろうというのが一致した結論であつた。バロメーターが正しいということである。

十月十四日(水) 晴一時小雪

シエルパはカトマンズ・ポーターをつれて、八時ごろから峠の向うに集積されている荷物をとりに出かけた。隊長と舟橋隊員も荷物をとりに出かけるという敬服すべき馬力だ。

ガルツェンはマルシャンディへポーターをあつめに下った。ネパール人はお祭りなので雇うことはまず不可能だが、チベタン(チベット系ポーター)をあつめて、十六日にのぼってくるという。

キャンプ一帯をとりまいているガスをついて、シエルパの元気な歌声がおりてくる。なかには一日に三回も荷下げに往復したのがあるそうだ。かと思えば、こんどはここまで運びおろされた荷物を少しでも下に運んでおこうと、今西隊長と藤平・舟橋隊員が、シエルパ一人とポーター三人をつれて、下の方約一時間行程のところまで荷をおろす。サブ自ら荷下げをする率先力行には、シエルパも傍観しているわけにはいかない。

五〇〇〇米前後のキャンプ地から、高度順応もろくろくできていないのに荷を負つてはげしく上下するという労作は、ともかく隊員にとっては大へんなことである。

ポーターのなかにも高山病にやられて腰のぬけたようなのが二人いる。とにかく頭痛は最も一般的な症状だ。はき気をもよおすもの、睡いのやら睡くないのやらわからぬが、ねそべつてでもない限り軽いめまいを催す。食欲不振もある。そして疲労がやはり最も大きい。

食糧も不足気味のように、米はないし、調味料も乏しい。肉もなければ砂糖もない。その卓抜した調理でしばわれわれを感じさせているコックのタンドゥも、やりくりは大へんらしい。もつとも食糧を運ぶにしてもそのポーターだけでも二人や三人ではきかない。

雪のへばりついたバンジャンの斜面が三日月にてらされてうそら寒い。

十月十五日(木) 晴

ちつとも抜けきらない疲労。ものうい体痛。食欲もすすまぬ。さあと立上ると後頭部がジンときて、思わず軽いめまいをおぼえる。サーブは今日は三〇キロ近い荷だ。サーブの荷が重くなれば、ポーターの負担はそれだけ助かるし、軽くすればそれだけ苦勞するわけだ。人員に限りある以上、全く仕方ない。

一時間ばかりの下りで、大きなカールの底に達し、堤のような丘をこえると、もうマルシャンディに直接通ずる谷となる。昨日隊長らが荷下げた一部の荷物がつま重ねてある。

十二時三十分、キャンプ地につく。標高四三〇〇米。たった三時間の下りといえはそれまでだが、まだ上の方に残してある荷物をとりに行かねばならないし、やはり全体をおおう生気のない疲労の色は、これ以上の前進はむづかしい。

伊藤ドクターは、こゝで隊員、シェルパ・ポーターにビタミンとチスチンの注射を試みた。数日来、歯ぐきを化膿させて苦しんでいた脇坂隊員も、こゝでドクターのメスの洗礼をうけた。

テントで横になつたきり、何も考えず何もすることができずにいると、三時ごろ下の方から元気なかけ声があがつてきた。ガスのなかから一人、二人、約二十五人の新しいチベタン・ポーターがやつてきたのだ。チベット系らしくフェルトのクツをはき、日本のアツシのような服をまとつてゐる。彼らのはりきつてゐる様子は、疲勞だけの静かなキャンプ地を大いに活気づけた。

ガルツェンは十六日にはあがつてしようと予定していたが、一日早かつたわけだ。
さあ、ポーターが来たとなれば隊員自身も荷物運びする苦勞ははぶかれたわけだ。



八、北面のベース・キャンプへ

十月十六日(金) 晴

九時半出発。一部ポーターが上に残してある荷物を運ぶためのぼつていつたほかは、一路谷を下つていつた。越えてきたバンジャンをふりかえると、雪をうすくつけた岩壁が逆光にはえて美しい。私たちの胸に久しぶりにロマンがよみがえつてきた。

路筋の植物分布は、素人目にもはつきりしていて規則正しい。下るにつれて、高山帯からしゃくなげの灌木帯、ダケカンバ中心の潤葉樹林帯、それに針葉樹林帯と、順序よく移り変つてゐる。このことは南面では全くみられなかつた景観である。虎や熊が出没するという南面のマデイ・コーラあたりのうつそうたるジャングルと比べて、なんとうちがいだらうか。

落葉をふんで下ることが、私たちになんとつかしい思いを呼びおこすことだろう。やわらかい秋の陽ざしが谷一ぱいにふりそそぎ、さしずめ日本の秋山を思わせる快適な気持だ。

私たちがネパールに入つて、旅行をはじめたちょうど一ヶ月前は、焼けつくような暑さだつた。時のうつり変りの早さもさることながら、アンナプルナの絶望的な南面であつたといえ日数を費したことが悔まれると同時に、北側からの登高が一日の遅延も許されないとはいせかせかせかした使命感がむしろ強く支配したことだつた。すでに冬はもうやつてしようとしてゐるのだ。はげしい寒気と、強い風を伴う……。

隊員はいく日ぶりで低地旅行時代のように小型リュックだけという、サーブらしい軽装になつたが、これまでの激務がもたらした疲労の色はやはり抜けていない。

谷川を渡つて台地に出た。チベット造りの石でかこんだ平屋根の家がある近くで、キャンプとなる。二時半。標高二八〇〇米。前面にマナスル、左に向つてチベットとの国境の山々、背面には、いま下つてきたバンジャンの谷。ラムジュンがわずかにのぞいている。近くの山々は美しく紅葉し、山の肩にぽかりと浮んだ雲がアーベントロートに輝くと、間もなく太陽はマナスルの頂上を最後に赤く染め抜いて夜に入つていつた。

十月十七日(土) 晴

今日からはマルシャンディぞいに西北進する。ゾーパという牛とヤクとの雑種(オス)が四頭、首につけた鈴

をカランカランと鳴らしながらやつてきた。われわれの荷物を運ぶやつだが、あまりおとなしそうな動物ではない。これは一代限りの雑種だそう。

八時四十五分出発。壮大な松だの唐檜(とうひ)だのが現われ、木の間がぐれに雪煙をあげるマナスルをうしろに見ながらすすむ。

そばが一ぱいみのついている。大部分はすでに刈りとられてしまつたようだ。田畑もよく整理されているし、道路も両側にちやんと垣根が作られてある。これまで私たちが見聞してきた南側とあまりにはつきりちがつた景觀に接して、むしろおどろきを感じた位である。その一ばん大きな要素は風土のちがいだらう。いわゆるネパリーは万事単調であるに對し、チベツタンは明るくて変化に富んでいる。家の構造がネパリーは土壁でこねあげただけのものであるに對し、チベツタンは石をきれいに積みあげた屋根だ。すべては単調と複雑という、景觀・風土のちがいが、両者の間にこれほどはつきりした風俗と生活様式を作りあげたものに違いないと思われる。

家々には白い旗がはためいている。ラマ教徒たることのしるしだそう。ラマの塔であるチオルテンとかメンダンというのが現われてきた。気持のよいことは、カラマツの葉をふんで歩くことができるということ。日本人にはやはりなつかしいものの一つだ。水がきれいなことも南面ではみられなかつた。しかもつねにクツをぬいで渡る不快を味わねばならなかつたのに、こちらは川幅の大小をとわず橋がかかっている。しかも丸太棒のかけ放しでなく、ククリのようなもので削つた板を渡してある。

タンジャという部落にしても、クーパーという小さな部落でも、そこには明るさがあつた。

真正面に鋭く切り立つた氷の峰が、私たちの前に立ちはだかつていた。ものすごい雪煙をまきあげている。おそらくラムジュンとアンナプルナ二峰につづく稜線の一部なのだらう。

私たちの路にもかなりの風が吹いている。

ポーターは女・子供が多いためか行続力はないがよく歩く。なかに自分の身長より高い荷を負つて歩く少女もいる。

路がマルシャンディと合流したところ、チャーメという部落の手前の路端で、テントをはつた。ポーターもなにかと手伝おうとする。

女がいるというのでぜん元氣になつたグンディ、アン・ニマらが、親切に手をとつて教えている。きけば昨年のいまごろ今西錦司博士が踏査と試登のためこの地方に入つてきたとき、これに従つたものが多いそう。

十月十八日(日)晴

七時二十分出発。出発時刻からみると今日はかなり歩くらしい。きけばシェルパのガルツェン、ダ・ナムギャル、パサン・ダワの三人は、三年前の六月、中部ネパールのヒマラヤに精通するイギリスのティルマンの旅行に、いずれもシェルパとして参加しているということである。さらにガルツェンは昨年の今西(錦)踏査隊にもサーダーとして参加しているということは、今後われわれのために有益な助言を与えてくれるであろうと意を強くした。

道は昨日と同じような風景だ。すばらしい紅葉と、沿道に一ぱいのツゲ、ヒノキ、ヒバ、マツ、カラマツ、イチイなどのみごとな針葉樹にまじつてダケカンバが点在し、さながら自然の大庭園をゆくながめだ。

右手にとつともなく高く広い大岩壁が、ほとんど垂直にそそり立つている。西部劇のロケーションにはもつてこのところだらう。

しばらくして右手に氷河の侵蝕をうけたすばらしい大岩壁が現われてきた。それこそ鋭利なカミソリでヤツとばかり一度に削りとつたかのような鋭い斜面で、一気にマルシャンディにすべりこんでいる。高さ五〇〇米以上、巾は二キロ以上もあるか。

三時三十分キャンプ地につく。ここは石囲いの多い広い放牧地だ。背後に鋭く突立つている二峰からは、さかんに雪煙があがつていた。

ポーターたちは日本人には二度目のつきあいなものかもしれぬが、愛想笑いをしたり食べものをくれようとしたり、ともかくブッキラ棒でない。シェルパが尻をたたくようにして歩かせたネパリー・ポーターに比べると、始末はよいようだ。たばこの吸殻をすばやく拾いあげる点は同じだが、吸殻を直接くれてやると二度ばかり押しいただいてふところにしまいこむ。物を与えて感謝の意を示されるといふのは、ネパールに入つて初めてのことだ。夜かなりおそくまで、シェルパやポーターたちはフアイアをたきながら談笑していた。話がにぎやかなところをみると、ショウチュウみたいなロクシュという酒をのんでいるのだらう。女のポーターは美しい声で民謡らしいものを合唱していた。

ひとりサーブのテントだけが、ひっそりとしている。

十月十九日(月)晴

真白に霜がおりていてかなりさむい。広く明るくひらけた台地をすすむ。九時ピサンという部落を通りすぎ

る。この辺の田畑はネバリーのように段々にはなっていない。そして、せせこましくなく、ゆつたりと広く面積をとつている。ソバの収穫がすんだらしく、そのあとに、牛、羊などを遊ばせている。土地が非常に乾燥しているのも、この地方の特徴で、すごいほこりが舞いあがる。

大きなチョルテンが立っている。メンダンも多い。時々水牛の角のつてある。そしてラマの経文らしいものを一ぱいに刻みこんだ石が、無数にメンダンに積み重ねられている。これらの塔を通過するときは、必ず左側を通ることになっているそうだ。

マルジャンディはかなり細くなってきた。路はたんたんとした快適なハイキング路だがなんとなく足が重いようだ。パンジャン越えはまだたつているのだろうか。

一つの坂をつめて下ると、水成岩か何か水蝕によつて作られたほりの深い山ひだをなしている平地に出た。はるか前方にはアンナプルナ第一峰につづく大障壁らしいのが見え、左手に高く第三峰の連峰がみえる。

路に枯草や馬糞などが石で一定間隔をおいて推肥としてある。

坦々たる道をぐんぐん飛ばす。風が強くてほこりのまき上るのがつらい。二時半ごろ路を左にそれたところの松林のなかで、テントを張つた。

三年前、私たちと同じようにアンナプルナ第四峰の征頂をねらつたティルマンは、やはりこの近くにベース・キャンプをはつたらしい。

私たちはもつと奥地に進入して、ベース・キャンプをはる予定だ。四峰がみえる。ずいぶん高い。現在地点と頂上との標高差三五〇〇米とはいえ、そういつた数字はなんらの具体的な実感を伴わない。雪があるために高くみえるのか、実際に高くてスケールが雄大なのか、それともある種の先入観のためか。

ずいぶん雪煙をあげている。ガルツェンの説明によると、ティルマンに従つたときにくらべて、氷雪がずっと多く、山の形が変つているそうで、とにかく順調には登れるところではないそうだ。

なんのそれしき、かえつてファイトをかきたたせるだけじゃないか。登高ルートは下の方から頂上まで、双眼鏡一つで指示することはできるのだ。

十月二十日(火) 快晴

山の方は少々雪煙をあげているが平地は全くおだやかだ。

「三寒四温というやつがヒマラヤでも通用するらしいぜ」と隊長。これを聞いて藤平観測員は首をかしげている。

る。

八時半出発。三峰と四峰が形成しているカールを目ざし、いわば四峰のふところに入つていくわけだ。

四方八方絶景である。四峰の山塊はいよいよ大きくなりますます高くなつていく。

十一時二十分ついにベース・キャンプについた。四〇三〇米だ。風はあたらず、日向ぼつこには快適の地だ。

水はふんだんに流れ、灌木地帯なので燃料には事欠かない。

ここきて感じたことは、四〇三〇米という高度を全く意識しないということだ。ナムン・パンジャン越えの効果が現われているのだ。この貴重な効果を期待したればこそ、パンジャンを越えたのであるし、その限りにおいて、これは大きな意義をもたらしたといふことができる。

南面から転進をはじめ、十一日目ようやく反対側にベース・キャンプを建設し、近くに氷雪をのぞむことができたのだ。

日当をもらつたポーターは、八名ほど荷上げに居残つたほかは、足取りもかるくベース・キャンプをおりていた。



九、マルジャンディ輸送隊

ナムン・バンジャンを越えて、アンナブルナの北面へ急行する本隊と別れて、私（藤村）は、ディリーをつれて、マディ・コーラの奥のベース・キャンプから、ポカラへの道を辿り始めた。そこから、アンナブルナ連峰の東端を大きく迂回して、マルジャンディの溪谷沿いに、北面のベース・キャンプまでの蜿々たる旅が始まるわけである。

十月十日（土）

ナムン・バンジャン隊を見送つて、十一時二十分ベース・ハウスを出発した。ポカラまで二十二ルピーの請負制にしたためか、今日のシクリス・ポーターは、来た時とは月とスッポンの違い。出発したのが十一時二十分、それから来るときには三日かかったところを、彼等は平気な顔をして五時間四十分で歩き、五時にはシクリスに着いてしまった。

シェルパは全部、そしてラツカルも本隊について行き、私たちのキャラバンにはディリー以外、気心の知れた者が誰一人いない。したがって、料理も土地のポーターにやらせたので、純ネパール風になった。無理して晩食を食べ終ると、口の中がひりひりして、息がでない位。早速ディリーはギーに砂糖をまぜて団子を作り、舌の上のせると、特效薬を持つて来てくれた。

十月十一日（日）

今日も請負制の効果でき面。今までの旅行を通じて一番長く歩いた。道をかえてマディ・コーラに沿つて歩く。がぜんカポックが谷間に現われ出した。そしてマリゴールドが河原に近い草原に群生する。昼食はあいかわらず乾した真赤なトウガラシとシェル（米の粉をフライしたドーナツ）。

サンスーでポストランナーに遇つた。我々にとつて初めての手紙、そして新聞。むさぼるように読む。ところが彼は思いもよらぬ情報をもたらした。アンナブルナ北面のベース・キャンプに目と鼻の先にあるボットとブラガーの二つの部落民たちが戦争を始めたというのだ。ポカラで負傷者を多数見たという。いずれにしても、ポカラの知事に会つて情報を得なければ仕方がない。遠征とは、かくも困難の続出するものか。

十月十二日（月）

昼すぎ、ポカラに着く。竹屋根の粗末な小学校で修業式をやつていた。すぐ知事に会つて事情を話し、荷物の保管と官庭での宿営を頼む。気安く承知してくれた。マナンボットの争の件は今のところ小康を保つているとのこと。やれやれといったところだ。直ちに、此処へ残しておくものと北面へ持つて行くものの整理をする。ディリーはポーター集めに行つたので、言葉の通じないポーター相手の荷物の整理には全く疲れてしまった。

十月十三日（火）

午前、ディリー、ミンをポーター集めに走らせる。昼過ぎになつて二人とも駄目だといつて戻つて来た。十五日からヒンズーの秋祭が始まるから行きたがらないという。午後、知事にお茶を招待されたので、ポーターを何とかしてくれと頼む。今にして思えば、シクリス・ポーターが二日半歩いたのも、祭までに金をためて家へ戻りたい一心あればこそだつたのだ。

十月十四日（水）

ポーターが集まらない。再びディリー、ミンにポーター集めに行かせる。二人ともまゆをしかめ、ジェスチュアたつぷり。そしてきれいに散髪した頭をひからせて、駄目だと戻つてきた。

十月十五日（木）

今日も駄目。ポカラの町へ方々から人々が集つてくる。チベット側からも祭用の山羊、羊が運ばれてくる。午前中、知事に招待されて祭の開幕式に出席した。町中の人、軍隊が集る中で、ドギツイ赤色を体中にぬつた男が現われて、祭壇にある大きなキウリをククリで真二つに切ると同時に、兵隊は旧式な鉄砲をボンと鳴らし、帽子をかむつた連中は敬礼をし、風変りな楽音が式場を流れた。秋祭のために殺される水牛、山羊、鶏、家鴨の霊をなぐさめ、キウリを動物になぞらえて、先ず神に捧げるのだという。知事はしきりに旅の無聊をなぐさめてくれようと、色々気をつかつて、ゲームを一緒にしたり映画に招待してくれたりするが、ポーターのこと、期日のことが気にかゝつて、とてもそれどころではない。

十月十六日（金）

やつと十一時にポカラを出ることができた。ところが、ポーターはシクリス・ポーター以上の怠惰さで、全く

手を焼く。彼等は祭の最中に狩り出された事に不平を鳴らし、チョウタラ樹をうえて日蔭を作つた一里塚のような休憩所があると必ず休む。しかも途中の人が酒をただであたえるので、酔ばらいが、三十五人のポーター中七人もいた。ポカラの町では皆が水牛の肉を分けるのに忙しい。道端には水牛の首がいたるところにころがしてある。その横を放し飼いの生きた水牛が、無神経にちらと横目で同僚のあわれな姿をみて通る。だれもかもが、きれいな着物をきて、マリゴールドを体にかざる。また若葉を帽子と頭の間にはさんでいる。

いくらゆつくり歩いても、行くべき所までは行くのだということを知らしめるために、ミンを一番後に歩かして、デイリーと二人で先行して本日の宿場で待つ。ポーターが最後に着いたのは六時半だった。バザールの真中の商家の軒先で寝たので、村の連中がガヤガヤ集まり非常に不快。「ねむくてたまらないのだ」と、どなつたものだから、連中はこそそ退散していった。

バンヤン樹の梢の間からもれる半月の明るみが、疲れ切つてねはずまった私たちの宿場を照らす。ボンヤリと月を眺めながら、今西隊長の今ごろの苦闘と、予定のおくれたことを考えていると、ねむくなつた。遠くのあちこちから、村人の祭の歌声が聞えて来る。

十月十七日(土)

七時出発する。雲一つないアンナプルナ二峰のすばらしい南面を横ににらみながら、岡を越え、マディ・コーラを渡つて、以後ずっと左岸を歩いていった。途中十数人の村人が集つて、一尺たらずのグリーン・スネークを殺していた。

十月十八日(日)

このごろ、ヤブ医者 of 商売大いにはんじよう。一昨夜は肩まではれた鉛毒。今朝はサールの木から落ちて足の骨を折つた子供。今日の行進中はポーターのマラリヤ……。そして、あいかわらず単調なキャラバンは続く。

十月十九日(月)

ミダン・コーラを越えてマルシャンディを眼下に見下すカブルガウンに宿泊する。昨日の朝早く、ポーター二人逃亡し、今朝はマラリヤの四人を解雇したので、此の辺のポーターと交代する。交代したポーターの方がずつと強い。彼等は代表的な強健なグルン族で、グルカ兵として、太平洋戦争に参加したのもこの連中なのだ。捕虜

になつて、東京、岡山にいたという日本語の片言をしやべれる者もいたのには驚いた。

十月二十日(火)

昼前クティに着く。少し時間は早かつたが、患者のポカラのポーターを解雇して、グルーンの強そうなポーターをやとつた。キャンプ・サイトから月光を浴びたヒマルチュリーが望める。ミンとデイリーは村の連中と共に飲むらしく、時々笑い声が村のパザールの彼方からかすかに聞えて来る。そして私もヒマルチュリーを眺めながら一人静かに飲んだ。

十月二十一日(水)

新しいポーターにかえたので道程が捗つた。封筒のような布をかぶつた土地の連中が、口八丁、手八丁でジェスチュアたつぷりにナムン・バンジャンが如何に困難であるかを説明する。

もう十一日も間近になつた。そして私達は荷物をかついでまだギャラバン旅行を続けているのだ。本隊はベス・キャンブに着いたのだろうか。

今日は一日中、満開のソバの花とヒマルチュリーに目をなぐさめた。

十月二十二日(木)

十時頃、チベットの塩を持つた女三人に出会つた。そして本隊が四日前にベースへ着いたという。まず心安心。とにかく私達は急がねばならぬ。しかし意の如くならぬ口惜しさ。明日はトンジェにつけるかどうか。

途中の部落で大きなコブをぶらさげた女達八人余りが、ミカンを沢山持つて我々の所へやつて来た。ミカンをただでやるからコブの薬をくれという。

「ダバイチャイ(薬はないよ)」

といえ、彼女達を見る目も気の毒な程しよげて、淋しそうな訴えるような顔をした。私達の来ることを伝え聞いて、薬の貰えることを、そしてコブのなくなることを、眠れぬ程待ちがれていたのに違いない。

十月二十三日(金)

六時半出発。マルシャンディに沿つて四時半トンジェに着く。ポーターは今日は非常に速く歩き、クティ、トンジェ間の行程を一日ちぢめることができた。途中、スイスの地質学者ハーゲン博士に出遇つた。マナスルの

西北にあるラルキャ峠を越してきて、彼はこれからマルシャンディに沿いカトマンズへ帰るといふ。お互に健闘を祝して別れた。

十月二十四日(土)

インドの国境を越え歩きはじめてから三十五日、チベット国境近くヒマラヤ山脈の北側に廻つてしまつた。民族、文化、気候、様相が急にかわつて、全くおどろかされる。昨夜おそく、ものものしいチベット人に囲まれて、再びポーターを交代した。ポーター交代のために半日暇をとるなんてことは全くわれわれには許されない。森を歩いていると、ネパールに来て初めて見た馬に、大きな男が一人乗つていて、なつかしうにワケの判らぬあいさつをした。馬につけた大きな鈴が印象的だつた。彼はキャンプを三日前に出発して、家へ帰つて来たのだという。通訳のディリーは残務整理でトンジェをおそく出発して、言葉の通じるものがない。手真似でそれだけたしかめることができた。

ヒマラヤの秋もまた美しい。二三〇〇米位のあたりに美しいカシの林があり、屋なお暗いピセアの梢の間に、真白なマナスルと青空がのぞいていた。

タインジャの少し手前で、ベース・キャンプからカトマンズ行のポスト・ランナーに会つた。隊長からの手紙、舟橋マネージャーからの第一キャンプでの私の行動の指令、藤平の食糧の件など、むさぼるようにして読んだ。彼等はすでに第二キャンプを設けている。そして一時間も早く荷物が着くのを待つてゐるのだ。

十月二十五日(日)

早くベース・キャンプへ着くこと。ただそれだけで頭が一杯で一日を過ごす。途中すばらしい松林を通る。松葉がジュウタンのように敷きつめられていて、所々に真青なゲンティアナが松葉の間から首を出していた。ポーターは普通のように歩いているのだが、サーブの意を解さずにノロノロ歩いているように見えて仕方がない。ポーター三人に特別に給料をやつて、先に早く歩かせ、他の羊のような連中を誘導することにした。

十月二十六日(月)

一日ポーターをなだめたり、すかししたり、叱つたりする。あたりはますますチベット人地帯らしくなつて来た。途中ブラガーの青年八人ばかりに会う。彼等はこれから出かせぎにインドへ行くという。フェルトの長靴と

赤いホームスパンの上衣を着て、松林に足早やに消えて行つた。青空と松のみどりに、ところどころ ROSA、berberis の赤い果実の色が美しかった。今夜はチベット人の石の家にねる。

十月二十七日(火)

昨晚は一晚「ノミ」に悩まされ、殆ど眠れないままに、石を積み上げて作つた粗末な壁のすきまから光がさして来た。朝早く霜を踏んで出る。ポーターも最後だというのがんぼつてくれた。途中前衛峰が真前に現われてきた。早速双眼鏡で探つてみると、広い斜面にくつきりジグザグに踏んだシュプールが見えるではないか。

「やつてるぞ!!」

と思わず叫ぶと、ディリー、ミン、ポーターの親玉が飛んで来て、双眼鏡を奪うようにして皆がワイワイ叫びながらのぞく。そして今まで不平をいつていたポーター達も、美しいモミの林の中を走るようにして登つていった。

モミの林をぬけ、ダケカンバの林もまばらになつた谷沿いの平地にポツンと十二人用のテントが立つていた。どしんと大きな岩の上に尻もちをつく。すぐ近くの三峰からトテツもない大きな雪崩がひつきりなしに落ちてゐる。

マネージャーから私宛の手紙がたくさん置いてあつた。「今日は着くと信じます」と、書いた手紙が三通もあつた。早速第一キャンプへ、到着の旨テントに残つていたポーターに連絡さす。休む間もなく、言葉の通じないポーター相手に、大きな声をはりあげて荷物の整理をする。ディリーは頭痛がすると云つて、到着するとすぐシユラフにもぐりこんでしまつた。

あたりはすでに暗くなり、なんとか整理が終つてリストの整理をしていると、舟橋が第一キャンプから降りてきた。感激の握手。二人は時のたつのを忘れて話に夢中になつた。寝静まつたベース・キャンプには疲れたポーター達のイビキがアチコチに聞え、ときどき雪崩の音が静かな世界をふるわしている。

十、攻撃開始

七〇

十月二十三日(金) 晴一時あられ、西風あり

ベース・キャンプから第一キャンプに全員登るのだ。二十日、こゝに到着以来、遠目にも明らかな橙色のわれわれのテントが、枯木も山のにぎわいみたいに、ダケカンバのなかに点在するなかで、今日はだれその誕生日だとか、今夜は中秋の名月だとか、果物のカンヅメを賞味しながら焚火をかこんで来し方の数々を語りあつたのも二日間、これからテントを全部折りたたんで、四〇三〇米の現在地点から五〇〇〇米の第一キャンプまで約九〇〇米の標高差を登るわけだ。

食糧と装備は二十一、二の二日間にほとんど全部シェルパとポーターが運びあげてしまったのでらくな登りである。

路はおおむね南北に走る三峰の鋭い稜線を右手におおぎながらすすむ。ついで、その稜線が東に張り出してぐつと低くなり、ノコギリのようなギザギザとなつて四峰と二峰につづく山塊につづいていく。路は次第に傾斜をまし、三峰をうしろにして、四峰に向つてすすむ形だ。ずいぶん急傾斜の路で、うしろをふりむくと、ベース・キャンプははるか下に、三峯の氷河の末端も低くなつてきた。

ところが低くもなんともならないのが四峰だ。そして四峰から西に出ている長い稜線の突端に押し出されたような形のスノー・ドーム——私たちはまずこれをおとし入れて四峰にすすむのだが——などは低くなるどころか逆に高くなつていくような錯覚にとらわれる。

山のシンボル、エーデルワイスが至るところに生えている。寒さにまいつてしまったものもあれば、風にきたえられながら可憐にも生きているものもある。

南側からあがつてきた雲が、三・四峰間のキレットのような稜線からどんどんこちら側に流れこんできて、太陽をかくし、風をおこし、あられをたたきつける。

はるか前方(東方)に二峰の頭がみえはじめた。一步一步登るにつれて、二峰の頭の部分、肩の部分が現われ、ついでその全容が現われた。かくてスノー・ドームから四峰、そして二峰をむすぶ雄大な山塊がささぎるものもなく視界におさめることのできる地点についた。そこが第一キャンプなのだ。堆石の多い場所で、乾いた鮮苔類におおわれた土なので、風がふくと砂塵が舞い込む。ここに橙色の登高用のテント四つ、炊事用、ポーター用の

大型テントが張られた。

ここから第四の連峰に対して直角の方向に立つて概観すると、右手に約六八〇〇米のスノー・ドームがちやうどもりのよすぎたアイスクリームみたいな格好で西端に突立っている。そこから左手に向い、東の方向にゆるい傾斜をなしながら、途中小さなピークや雪庇を作りつつ、距離約三〇〇〇米をへだてて、一つのピークが稜線から突出している。そのピークの後方(南方)に築山が右に傾いたような格好の、ところどころ雪がくつついていく大きな岩峰が第四峰である。

この四峰を登るまでの登高ルートを大ざっぱにながめてみると、まず真正面にみえる大きなルンゼ(沢)の基底部にとついでスノー・ドームに向い、右上の方向に登っていく。(つまり稜線に出るまでは四峰と反対の方向に登るわけだ)稜線に出れば、おおむね稜線づたいに雪をかきわけながら、四峰めざしひたむきに突進するわけだ。

第二峰(七九三九米)はさすがにこの山塊の巨峰らしく、一段と高く突立っているが、これを攻撃するとなれば、やはりスノー・ドームからの稜線づたいに接近する以外にルートはなく、しかも二峰までは四峰からなお三千数百米をへだてている。その距離は、私たちの準備している装備、食糧の量からいって、あまりに大きすぎてまず問題にならない。私たちが過日南面から二・四峰の稜線の間にとりつくとした計画はここでは全く通用の余地がないのである。

この第一キャンプは前進根拠地とし、ベース・キャンプは原則として使用しない。
夕方五時半の温度は零下五度であつた。四時半ころまでは四峰と二峰の頭が残照に映えていたが、五時をすぎるとあたりはもうまっくらである。

十月二十四日(土) 晴、西風吹く

朝七時半ごろには第一キャンプにも陽がさす。

八時第二キャンプの建設地を偵察するため、藤平・舟橋・脇坂の三隊員が若干の優秀なシェルパ、ダ・ナムギヤル、ゲンディ、アン・ニマの三人をつれて出発した。ピッケルを手に、ロープだのアイゼンだのをルックに入れたはじめての登高の装備であり服装である。

シェルパたちもようやく働きの場を得たかのように、元気な足どりで岩かけに消えていく。彼らの登つていく姿がみえ出したのは氷河を越えていつた一時間あつた。真正面の雪のついた急斜面を、大きなジグザグをえがいて、六箇の黒い影が二組にわかれて登つていく。雪の付着した岩壁の下をまくようにすすん

で、やがてルンゼに入り込んだ。このルンゼをぐんぐん登り切ったところが台地だ。停滞しているのはフィックス・ロープ（固定綱、荷上げをらくにするためロープの一端を岩に固定して下にたらしおく）をつけているのだろう。

約一時間でルンゼをつめ切り、第二キャンプ予定地とみられる五六〇〇米の台地に出た。昨年（今西）錦踏査隊もやはりこのあたりでテントを張つたのである。キャンプ・サイトを掘りかえすと、食糧が山のようにできた。オニシライス（煮沸して、乾燥した米）、クラッカーから蜂蜜、ジャム、バターに至るまで。ほかにメタ、ローソク、プリムス・ストーブもあつた。藤村輸送隊がまもなく着く筈であるが、砂糖の不足してきた私たちに、よだれのような品々であつた。よくも残しておいてくれた。はるか日本へ感謝の念をおくる。第一キャンプにいた私たちも、その恵みにあずかる。

午後一時二十分下降をはじめ、約二時間半で帰着した。

一九五〇年六月のティルマン隊に従つたガルツェンやダ・ナムギャルやパサン・ダワの話では、三年前にくらべて全体的に雪が多いため、あの当時なんでもなかつたようなところがずいぶん難儀しなければならない悪場になつてゐることだ。

「あす早速テントと食糧をあげてしまひましょう。フィックスをつけたからポーターも動くと思ひます」
全員異議のあるはずがない。「一日も早く、一キロでも多く」これが私たちの行動の原則なのだ。

三時をすぎると四峰と二峰の頭を残してすべて日陰になつてしまふ。ポスト・モンソン期であることを十分に知つてゐる私たちではあるが、それにしても一日々々と日照時間の短くなつてくることはたい。しかも北面だから、日がかかる時刻が早い。従つてルートを開拓するにせよ荷物を運ぶにせよ、午後一時にはもう行動を停止しない限り、もとのテントにもどるのに大変苦勞しなければならぬことになる。もつともその反面、悪天候のために一日中動けなかつたという日は、これまで一日もなかつたというのも、ポスト・モンソンの利点である。それを差引いて考えてみれば、半日仕事でも、連日確実に行動できるということは、あながち不利だとはばかりはいえまい。

ここまではいらいらしながらも予定通りに事を運ぶことができた。問題は一に、今後の天候にある。連日確実に行動できて、いよいよ明日は頂上攻撃だという成功一歩手前するとき、神様とか天とかの入りこむ余地のないほどの悪天候が、風と寒さで私たちの攻撃を頑強にはばんだ場合——考えられることだが、いまそれを考えるべきでない。考えたとして何になるだろうか。

「せめてもう十日早くこゝに來てゐることができたらなあ」

「氣持にゆとりのある登高ができるんだ。ゆとりがあるのとないのと、ずいぶん違うよ」

「それをいつたつて仕方ないさ。南面がだめなことをはじめから判つていたら、だれもこんなにしてまで廻り道をしやしないんだから」

「とにかく四峰はそこにみえてるんだ。登ろうじやないか」

「ずいぶん雪煙があがつていやがるなあ」

「だからもう十日早かつたらというグチも出るつてワケさ」

口々に叫びながら、見上げる目は一せいに主稜線上の予定されたルートを追つていた。



十月二十五日(日)晴

前日開拓したルートに従つて、第二キャンプを建設する日だ。今西隊長はじめ五隊員、シエルパ五人、ポーター四人、合計十四人が出発した。ポーター四人のうち、雪の上まで荷上げた経験のあるものはたった一人というのが、多少気がかりでもあつたが、二〇キロ程度の荷物を、ひたひたにかけた負い縄でかつぎ、ピッケルをつき、山グツをはいて、ドタドタと出かけていつた。はだしが原則の彼らも、山グツにもはきなれて、この分では結構動くのではないかと思われた。

ルンゼの入口で、先頭の三人がしがみこんでいるのは、前日とりつけた一三〇米のフィックス・ロープをもつと確実に固定するため、つけ直しているのだろう。一時十分全員台地についた。四十分後に下降をはじめたのは、第二キャンプの建設を終つたのだから。キャンプは凹地に張られたらしく、第一キャンプからはみえない。テントには、今西隊長、脇坂隊員、シエルパのダ・ナムギャルが居残つたはずだ。うえの登高ルートを切りひらくためだ。

下降にうつた残りのものは、三時前第一キャンプにもどつてきた。一時間そこそこで下つてきたのは、フィックスのおかげだろう。ポーターの顔には、「やつてきましたぜ」といつた調子の得意気なものがみられた。

第二キャンプのあたりはすでに陽がかげり、白一色の味気ない世界だ。いかにも寒そうだ。スノー・ドームから四峰にかけて南面からはり出してきた雲が西風にあおられて、青黒い空に消えていく。

由来ヒマラヤに対して常識的にもつていた一つの考えは、エベレストやマナスルなどほとんどの山にみられるように、まず巨大な氷河の流れがあることだつた。だからまず氷河の末端にベース・キャンプを作り、ゆるい勾配の氷河の上をいく日もかかつてつめてゆき、アイス・フォールなどを突破して、はじめて氷雪の稜線を頂上に向つて登つていくというのが、ヒマラヤ登山の最も一般的な形として考えていたところであつた。

ところが、ここには氷河が発達していない。山が低いから、あるいは山塊が小さいから氷河がないのでなく、山自体が急峻すぎて、氷河の発達する余地がないのだと考えられる。今西博士の言をかりると、氷河が衰退をはじめ、われわれの氷河は次第にその厚みを失つていつた。つまり、全表面からとけていつたのであり、われわ

れの横断した岩層におおわれてのこつている氷河は、いわばとけのこりの氷河である。もういまではほとんど動いていない、化石した氷河である。しかし真偽のほどはまだ判らない。普通ならば氷河をつめきつたところをアイゼンをはき、フィックスをとりつけるというようなことを、こんどは雪にとつた瞬間から採用しなければならぬのだ。雄大なスケールの山で、雄大なスケールの登高方式をとるというのではなく、しよつばながらアルプスの登山の方式をヒマラヤで展開するわけだ。

もつとも、なだれが多いことは他のヒマラヤと同様だ。とくに午後が多く、ほとんど稜線に近いところから、場合によつては二〇〇〇米もの標高差を、轟音とともに雪煙を一ぱいにあげながら、巨大な氷雪の塊りがむくむくと落ちていくのだ。夜中なだれにねむりをさまされることも、一夜に二・三度にとどまらない。こんななだれをまともに受けたら、テントはいくつあつても、いのちはいくつあつても、一たまりもない。

藤村隊の到着がしきりに待たれる。われわれがもつてきた三〇〇キロ余の装備、食料はすでにほとんど第二キャンプまで荷上げてしまつた以上、あと荷上げすべき二〇〇キロ余の装備、食糧をもつた藤村隊員が早くあがつてこなければ登高計画にアナがあくことになる。おそらく収穫祭にひつかかつてポーターの確保に苦労しているのだと思われるが、それにしてももうベース・キャンプについてよいころだ。

「早く、一日も早く」いつものことだが、これが私たちの行動の底に終始こびりついて、めいめいの気持を強く束縛しているのだ。四峰にあがる雪煙をみるにつけても、気持はなんとなくいらだつてくるのである。冬がきてはしまいだ。

もう一つある。ヒマラヤの未経験者ばかりで組織されている少数の遠征隊が、果してどれだけの成果をあげる事ができるかは、ひとり京都大学だけの問題にとどまらない。こんどの遠征隊ほど異常な関心をもつて各方面からみられている隊はないのだ。植物をあつめるとか、土壌を採集するとかのいろんな現実的な宿題はともかく、異常な関心をもたれているこの京大隊の精神的な課題をどのようにして果していくか、めいめいの心理的な負担は大きい。

ただ単にテントをはり、頂上を足下にふんまえるというより、どのようにしてテントをのぼし、どのようにして頂上攻撃をしたかという……。

十月二十六日(月)晴

七時四十分ごろ、シエルパ二人とポーター四人が第二キャンプまで荷上げに出発して、十二時半にはもどつて

きた。しつかりしたルートがついたせいか、往復の時間が非常に早くなった。第二キャンプにいる今西隊長らが、朝八時ごろルートの開拓に出かけた。みごとにピッチでジグザグをえがきつつ、雪の斜面を切りひらいていく。

(隊長手記、第二キャンプにて)

朝早くからテントの近くの標識旗がバタバタするので、天候悪化かと心配したが案じたほどのことはなさそう。三峰からもうもうと雪煙があがっているだけだ。第二キャンプは高度五六〇〇米で、昨夕五時半の温度は零下十二度だった。午後二時をすぎるともう陽があたりなくなり、気温は下る一方だ。

今日は脇坂隊長とダ・ナムギャルが交互に先頭に立ち、五九〇〇米までラッセルした。雪の状態は全部ザラメだ。もう少し凍っていた方が、アイゼンがきいて歩きやすいのだが、ほとんどずつと膝までもぐつた。朝方少し頭痛がしたが、鎮痛剤をのんだら三十分くらいでよくなった。このまゝ五九〇〇米まで登つてもなんとも感じない。ラッセルしている途中で発見したことが、五七四〇米地点にキャンプ地として適当な場所がある。ティルマンのキャンプ・サイトである。現在の第二キャンプをこの地点まで引上げる構想についていろいろ考えたあげく、やはり現在の第二キャンプを一四〇米高い地点に移すということは、今後の登高に利するところが大きいとの結論に達した。もし現在地点のまま登高をつづけていくと、途中でキャンプが一つ余分に必要になる事態がないとも限らぬ。明日は第二キャンプを五七四〇米地点まで引上げることとする。

砂糖がなくなつたという。第一キャンプの食事は一切現地食でまかなうこととしており、買出し専用のポーターが山を下りては部落まで買出しにくわけだが、チベット側では砂糖というものを使わないらしい。お茶とはいつてもヤクの乳だかなんだかを入れただけの味もそつけないものだ。第二キャンプの連中はうまいものを食っているだろうなどと、ついあさましいひがみも出ようというもの。

十月二十七日(火) 晴、西風あり

八時伊藤・藤平両隊員が、グンデイ、アン・ニマ、ポーター二人をつれ、テント一つをふくむ荷物をもつて出発する。

一方現在の第二キャンプをさらに上方にあげるため、隊長らのパーティもめいめい荷物を負つて行動を開始し

た。あとからあがつてくるポーターたちのために、要所要所に赤い標識旗がたてられてある。隊長らのパーティは、新しい第二キャンプ地まで二回往復する。

かくて、十二時すぎ五七四〇米の斜面の出張りのところに、オレンジ色のテントが二つ張られた。第一キャンプからもこのテントはよくみえる。

伊藤ドクターはポーターたちをつれ三時前第一キャンプにもどつてきた。あまり期待をかけていなかったポーターを六人も荷上げに使用できるので、大助かりだ。彼らが一回上のキャンプに往復すれば、おおむね一〇〇キロの荷物は運ばれてしまう勘定だ。それに雪の路にもなれてきたか、往復の時間も短くなり、隊員かシェルパが付添つてやらねばならぬということも必要でなくなつてきた。

五時ごろ、下からポーターが一人あがつてきた。待ちあぐんでいる藤村隊がベース・キャンプについたところだ。いまか、いまかと待機していた舟橋隊員は、それとばかり懐中電灯一本をたよりに、すでにうす暗くなつた路を一さんにくだつていつた。さあこれでようやく登高は軌道にのるのだ。藤村隊員もようやく登高の一員に加わることができるわけだし、高所キャンプに上げるべき装備、食糧もようやくそろつたわけだ。これだけのことで第一キャンプはなんとなく活況を呈してきたようだ。

第二キャンプには今西隊長と藤平、脇坂両隊員、それにシェルパのダ・ナムギャル、グンデイ、アン・ニマの六人がつめており、今後第三キャンプへのルートをひらくわけだ。

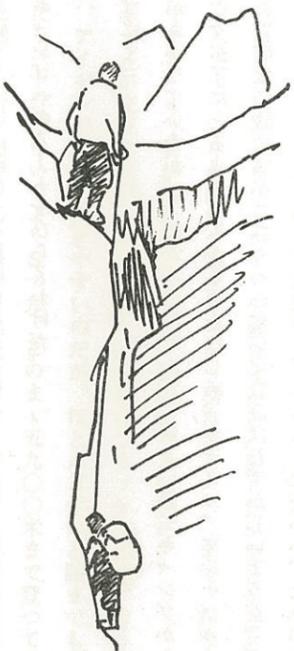
(隊長手記、第二キャンプにて)

今日も第二、第三峰に雪煙があがつていたが、十時ごろにはやんだ。新しい第二キャンプからのながめは実にすばらしい。チベット国境の山々が手にとるようにみえるのははじめ、マナスル、アンナプルナ第二、第四、第三峰が間近にみえる。第二峰の岩壁は急峻で雪がこびりついていて登高はむずかしいようだ。

昨日から夕方になると突風が出てテントをゆさぶる。天候がくずれるのではないか、これがなにもにもまして心配のタネだ。藤平、伊藤は多少疲れ気味のような。脇坂は好調である。

そして第二キャンプからおりてきた伊藤ドクターの話によると今西隊長が一ばん張切つているとのことだ。夜にかけて三峰になだれが統廃していた。西風がかなり強く吹き、第一キャンプのテントをパタパタ打ち鳴ら

し、張り綱がヒューヒューうなっていた。この状態が雪のなかでつづいて妙な動物の啼声らしい音がきこえれば、それ「雪男」の訪問となるわけだが、この山にはどうやらそういうえたいの知れない雪男はいそうにもないらしい。



十二、氷壁にルートを拓く

十月二十八日（水）晴、西風あり

今日は三峰だけでなく、稜線という稜線にはほとんど全線にわたって雪煙がさかんに吹きまくっていた。おそらくここへきてはじめての現象だ。これは果して一時的なものか。

それとも近いうちよいよ冬がやつてくるのか。気象状態に若干でもこれまでと異つた現象にあうたびに、私たちの神経は敏感にとんがるのである。

朝早くベース・キャンプからあがつてきたポーターが、内地からの手紙と新聞をもつてきた。日本をはなれてはじめて接する便りであり新聞である。

午後、舟橋・藤村両隊員があがつてきた。食糧も装備もあがつてきた。さあこれでようやく本格的となる。明日一日で第二キャンプへの荷上げは終えてしまおう。そうすれば、あとは着実にテントを上へのぼしていくだけでいい。

それにしても、思えば日本を出発以来たつた七人の小人数の隊でありながら、全隊員が一堂にそろうという機会は今ままでわずか数日しかなく、常に一部のもが別れて行動しなければならないという無理な旅行をつづけていたが、終点にきてようやく一しよになることができたわけだ。もともとこの隊は当初から無理な行動を約束づけられているのかもしれない。

この日、ダワ・トンダップがポーター二人をつれて第二キャンプまで荷上げを行い、伊藤ドクターとパサン・ダワが第一キャンプからあがつて第二キャンプに入った。そして今西隊長、藤平隊員、ダ・ナムギャルの三人が、六〇五〇米の地点にある氷壁に挑んだ。この氷壁の突破がおそらくこんごの登高を通じての最大の難所である。

（隊長手記、第二キャンプにて）

朝早くからマナスルに雪煙があがつている。このごろは雪煙ほど気になるものはない。

第二キャンプを出て氷壁の下までロープをつけずに登る。この登高ルートは急峻ではあるがサラメ雪におおわれた丸い尾根筋で、ちようど内地の後立山の遠見尾根を急にしたような斜面で、これが六〇五〇米のアイス・ウ

オールから上はテラス(棚状)となり、さらに帽子状になった台地があつて、スノー・ドームまでつづいているわけだ。

さて問題はこのアイス・ウォールの突破だが、非常に急で、むしろオーバーハング気味だ。高さは約三〇米はある。この壁の右側は氷のアワの上に雪が付着して登れそうだが、やわらかくてかえつて危険だ。しかも下の方がごつと切れて、谷底へ落ちていく。結局このけぞるようになってはおおいでもまだ先のみえないアイス・ウォールを直接に登るほかはない。これはテラテラに凍っている着氷で、ところどころ雪がくつついてい

る。まず今西がアイス・ウォールにとつついた。とりあえず確保用にアイス・ピトン(氷に打込む長い釘状のもの)を一本打込む。ステップをつぎつぎ切つていつて五米ばかり登り、ついで右の氷の柱にピトン代りに捨てなわを巻きつける。かくて一時間余のアイス・カッティングのち、ダ・ナムギヤルと交代する。

ナムギヤルは今西の切つたステップをさらに大きくしつつ、五米上方の小さなテラスに登り、ピトンを連続して七本打込み、ロープを固定して降る。

このアイス・ウォールは、ちょうど太陽の裏側にあたるので、日当りがわるく、一日のうちせいぜい二時間ぐらしか日があたらないという場所だ。だからずいぶん寒い。アイス・ウォールに取付いているものを確保しているのは大へんな仕事だ。終始ガタガタふるえながら確保していなければならぬ。

今日は一五米程度のアイス・カッティングでロープの固定を中止、第二キャンプにもどつた。三時間半に及ぶ苦闘であつた。

それにしてもダ・ナムギヤルはなかなか優秀なクライマーである。単なる高所用人夫としてのシェルパにとどまらない。早く降りると呼んでもなかなかよく頑張つている。まずシェルパ中の第一人者であろう。

一時半ごろ第二キャンプへ下る準備をしていると四峰の北斜面からものすごく大きなだれがおきた。みるみるうちにひろがつて真白い雪煙がぐんぐんのびてあがつてくる。第二キャンプの上にまでひろがつてきたすばらしく大きなだれだつた。

今夜は昨日より風が強い。

十月二十九日(木) 晴

八時舟橋隊員がシェルパのダワ・トンダツプと七人のポーターをつれて第一キャンプを出発した。今日から今

年のスイスのダウラギリ隊に加わつて雪の上を荷上げたという強そうなポーターが一枚加わつた。昨日ベース・キャンプからあがつた荷物のうち、登高に必要なものは今日一度でほとんど全部を第二キャンプにあげてしまふのだ。ポーターが予想以上に動くので、荷上げも順調に運んでいく。

同時刻ごろ、第二キャンプもまず三名が行動を始めた。今日こそはどうあつても氷壁を突破しようとの意気込みらしい。第一キャンプから双眼鏡でみている限りではこまかくはわからないが、六〇〇〇米台での悪戦苦闘、おそらく内地の山ならば手をつけないだろうと思われる難所を、ヒマラヤで呼吸困難と闘いながらの大労作だ。そしてさしものアイス・ウォールはついに乗り切られた。

(隊長手記、第三キャンプにて)

まずアイス・ウォールへナムギヤルが挑戦する。前日の続きで左の方へトラバースするようすすむが、オーバーハングになつていたのでステップを切つたとどうにもならない。二時間後藤平が交代してさらにピトンを数本打つたがからだ放り出されてしまつてどうにもならない。十二時半、今西が交代してアイス・ウォールに取付く。ちよどこまで荷上げにきた伊藤が手伝つてくれ、今西の確保をしてくれる。

なかなか手強い。何くそとがんばる。もしこの氷壁が突破できなければ、どうなるだろう。前進できない。そうしなければ私たちの計画はおじやんではないか。いつてみればこの氷壁こそ私たちの登高の成否を左右するカギにぎつているとことさえてできるのだ。

まずオーバーハング気味の氷壁を切り落して頭上にピトンを打とうとするが、なかなか入らない。別の場所によくやく打ち込んだ。これに力を得て伊藤のジッヘル(確保)と呼吸を合せ、もう一本打込む。からだを空中に放り出しての労作だ。一本のピトンを打つにも二回くらいは休んで呼吸を整えてからでないと力が入らない。つづいて足場を次第に上へあげていく。連続四本のピトンを打込み足場をあげステップを切り……かくてようやく安全な場所に出た。なんとという壮快さだ。内地の三〇〇〇米級の山でもかなりの労作なのに、舞台は六〇〇〇米のヒマラヤだ。ここでこんなにはげしいアイス・テクニクを展開しようとは思ひもよらなかつた。

われながらよくやることができた。十数年ぶりの氷雪技術だが腕はまだ衰えていない。しかもこのときの伊藤のジッヘルとの呼吸がピッタリと合い、

「ザイルをのばせ」

「引張れ」の呼吸が実に気持ちよく、想い出されてくる。私にとっては一生一代のヒマラヤでのアイス・テクニ

ツクだ。

さあこれで最大の難関は突破した。

いよいよ明日から第三キャンプの建設だ。勇氣百倍とはこのこと。あと一週間で、輝やかなしい栄光が、私たちのうえにそがれるかどうかが決まされる。全隊員好調である。



十三、主稜線に第四キャンプ

十月三十日(金) 晴

八時すぎ藤村隊員とサーダーのガルツェンが四人のポーターをつれて第一キャンプを出発した。ガルツェンはここにくるまでの転進旅行中、体操をやりそこなつて足をねんざし、ずつとびつこをひいてここまであがつてきて、今日までみんなの行動をあおいではヒニクの噴をかこつていたが、矢も楯もたまらぬといった恰好で、ついに動き出したものだ。藤村隊員は転進旅行中、ナムン・バンジャンを越していないので、まだ高度順化ができていないが、みんなにおくればならぬと頭痛をおして出かけていった。

同時刻ごろ、第二キャンプからまず二人が、ややおくれて八人が、それぞれ荷物をもつて雪の斜面を登りはじめた。氷壁を乗り切つて第三キャンプを建設しようというものだ。

(隊長手記、第二キャンプにて)

八時十五分第二キャンプ出発。十時半氷壁のとつつきに到着。二十八、九の両日にわたつて氷壁にとりつけた固定ロープは、なお危険性があるので、さらに上段にピッケルでザイルをとくにガッチリと固定する。その間に荷物を負つた隊員、シエルバ、ポーターたちが氷壁の下にやつてきた。重い荷物を負つたままでザイルをたよりに氷壁をよじのぼることは、からだがか空中にほり出される危険があるので、荷物をザイルで吊上げることにする。約二〇〇キロの吊上げは一時間半で完了した。十二時ごろ氷壁を全員乗り切り、氷壁上の台地に第三キャンプを建設した。高度六一四〇米だ。ここに今西、舟橋、脇坂とダ・ナムギャル、パサン・ダワの五人が滞在し、他のものは第二キャンプに下る。

夕刻から突風がテントをたたきはじめ。第二キャンプよりはげしい。この分では稜線を吹きまくる風はずいぶん強そうだ。覚悟の前だといえ、ヒューヒューともものすごい風が終夜吹きまくつた。おそらく二〇―三〇米の突風だつたと思われる。

十月三十一日(土) 晴

めずらしくおだやかな日だが、稜線には時たま雪煙がまきあがる。

二十九日「ゴクローサン」と元気な声をかけてベース・キャンプからあがつてきた通訳兼連絡係のデイリーが、高度に馴れないせいか再びベース・キャンプに下つていった。第二キャンプへあがりたいと意気込んでいた従者のミン・バハドゥールも残り惜しをうに下つていった。

さて今日の焦点は第三キャンプに滞在している五人の動きにある。たしか第四キャンプの建設地の偵察とルートの開拓をする予定だがとみてみると、四人がスノー・ドームの下の台地に向つて急斜面を登つてゐる。

(以下隊長手記、第三キャンプにて)

舟橋、脇坂とダ・ナムギャル、パサン・ダワが九時、第四キャンプへのルート開拓に出発。今西は休養。尾根筋は風当りが強く、かなりの労働だ。アイス・ドームの下の台地から真すぐにスノー・ドームの丸い台地に出るから第四峰の方向に向つて稜線をすすんでいくわけだ。第四キャンプはできるだけ稜線をすすんだところ六七〇〇―六八〇〇米地点に建設したい。

藤平、伊藤とシェルパ三人、ポーター四人が第二キャンプから荷上げしてきた。ポーター四人は下り、あとは第三キャンプに滞在だ。

頭痛がしたが鎮痛剤(セデス)をのむとすぐなおる。今後の日程を組んでみる。

十一月一、二の二日で第四キャンプ建設。三日第五キャンプ建設。四日アタック。数日前に組んだ予定と変りない。隊員はみな好調なのでアタック・メンバーの選定がむずかしくなりそうだ。とにかく天候さえよければ、とくに風さえそんなにひどくなければ登頂成功の見込みだ。成否のカギは風にあるといつてよい。

(以下、舟橋隊員手記、第三キャンプ)

第三キャンプの最初の夜は西風がものすごく吹きまくり、吹きあげられた雪片がひつきりなしにテントのウォール(側壁)に刺すようにつきあたり、しかも風がバタバタとテントに当たるたびに、なかに凍りついた呼吸のかたまりが落ちてきて、過ぎし日内地の雪山で終夜まんじりともせずテントにしがみついていたことが想い出された。

しかし朝日があがると同時にさしもの風もだんだんと弱まり、美しくはれあがつた青空が、なにごともしなかつたかのように、いつものようにひろがりはじめた。

今日は私と脇坂、それにダ・ナムギャル、パサン・ダワとの四人が軽装で第四キャンプまでの路づけをやつてきた。高度計は六六〇〇米を示していた。そこはスノー・ドームと第四峰につづく広々とした雪の鞍部で脇坂はマチャ・プチャリが雲海をつきぬけてそびえていたといつていた。私はいささか疲れが出て、展望をたのしむほどの元気はなかつた。

今日の行動は第三キャンプ出発九・〇〇、第四キャンプ予定地二二・〇〇―二二・三〇、第三キャンプ帰着一・四五。

第三キャンプからは急峻な稜線を避けつつ左手にからみ気味に登つていくアイス・フォールがあり、うまい具合に帽子状になつた台地に出ることができた。そこから上はスノー・ドームの最終の段まで左手にまき気味に広広とした鞍部の雪面に出る。スノー・ドームの下の稜線はさすがに急峻だったが、アイゼンをきかして登つていくと、シェルパがうしろで懸命にステップを切つていたので、それから上は一〇〇くらいステップを切つて登つた。

雪はわりに固く締つていて、アイゼンがよく利く。鞍部はスカブラ(波状に固まつた雪)のようなものでおおわれていた。

アンナプルナ第四峰は鞍部からすすんでいつてグウツと持上つた、コブの多い岩峰の雪稜をたどるわけだが、なんだかすぐそこに突立つているようで「行つちやおうか」などと脇坂と話合つたことであつた。

それでもスノー・ドームから第四峰までは約三二〇〇米の距離があることであり、シェルパにいわすと第六キャンプまでは張らねばなるまいとのことだ。

今日の登りには相当の強風が吹いて、からだがすき通るような気持だったが、下りは平静だつた。スノー・ドームの段のところに、くだり用に約四〇米の固定ザイルをつけた。雪を丸く棒状に掘つてアイス・ピトンを打込み、これにザイルをまわして下にたらし、最後にダ・ナムギャルがオシッコをひつけて固定ザイルをより確実なものにした。

あすはいよいよ第四キャンプを建設する。おそらく今日の予定地よりも高いところに設けられよう。

そしてそこに今西隊長、藤平、脇坂のサーブ三人とガルツェン、ダ・ナムギャル、アン・ニマ、グンディのシェルパ四人、計七人の大世帯が滞在し、伊藤と私とシェルパ二名がサポーターとし、二日に第五キャンプをできるだけ高所に建設、いよいよ三日二名ないし三名が頂上アタックするという段取りだ。ただただ天候の悪化しないのを祈るのみ。

(舟橋隊員手記、第三キャンプにて)

快晴無風で青空がとけこむようにひろがっている。

伊藤と二人で第三キャンプで休んでいる。マナスルからカンカブ(ティルマンの登ろうとした山)そしてチョルー(昨秋今西錦司氏の登った山)の峰々、そのまたうしろに名も知れない白い山々が波をうつつづいていて。

隊長以下三人のサーブと六人のシェルパは、昨日私たちがつけた第四キャンプへのルートを、頂上攻撃の装備と、いづくせない夢と抱負の数々を一ぱいつめたルックをかついで登っていった。

あのナムン・バンジャン越えの苦しかつた思い出は今も生々しくよみがえってくるのだが、そのおかげでわれわれはシェルパにも負けずに六〇〇〇米以上の高さで重い荷をかつぎ深い雪の中を路づけし、悪い場所でピッケルをふるつてこられたのだと思えば、今はかえつてなつかしい思い出となつている。

隊員の食欲も旺盛そのもので、尾西米(アルファ米)の威力のすばらしさもさることながら、おこげなどは隊長以下のこそつて賞味するところだ。われわれはいろんな意味で困苦欠乏を強いられてきたためか、ついぞぜいたくなことは口にしていないが、それでもテントが高所に建設され、悪場がきりひらかれた日の夕食のあとなどに、食糧係がコソソリ果物のカンヅメをあげさせると、心からのカン声をあげる。

昨夜最後の作戦会議をひらいたところ、隊長が予定していたよりアタックの日が一日早くなつた。第五キャンプを七人でできるだけ高い稜線上に建設、おそらく二人が頂上に立つこととなる。ささやかなごちそうをたべ、いろんな注射をして薬をのみ、早くからシュラフ・ザックにもぐり込んだ。

そしてテントのなかでいろいろ考えた。隊長のすぐれたリーダーシップと隊員各自のメンバースhipとが最高度に発揮されつつ、確実にチャンスをつかんで時間を空費しなかつたことが、われわれを第四キャンプの建設までもつてきた最大の原因だ。シェルパもサーダー以下全員が第三キャンプまであがつてきて、頼もしい力を発揮している。

藤村のようにキャラバンを組んで下廻りの旅をしてきた隊員もいるかと思えば、脇坂のように実に九日間も一日の休みなく氷雪の上を動いている隊員もいる。計画というものが定規ではかつたようにピシリと立てることはなかなかむずかしいにもかかわらず、やはりこの遠征隊はそれ自体として一つの有機体をなして流れている。各個人についていえば、貧乏くじを引いたものもあるうし逆にヒマラヤの舞台上に縦横に活躍できる幸運児もあるう。しかしそれでいいのではないか。今西遠征隊の動きが高みへ高みへすすんでいつて、宿願の第四峰の頂上に

それが直結すればそれですべてではないか。こうして手記を書いていること自体、その動きの一つの流れをなしている、やはり一種のおどろきを感じざるを得ない。

酸素吸入器は第三キャンプまで荷上げたが第四キャンプへあげることが割愛した。頂上攻撃は結局酸素吸入器をもたずに行うわけだ。こんどのように一瞬間も冬の到来が念頭から離れることができない私たちとしては、折角ここまで酸素をあげながらも、結局は重量の点から涙をのんで荷上げを中止せざるをえなかつたわけだ。酸素をあげるとしたら、吸入器と酸素ボンベで六〇キロになる。「やめよう」との隊長の一言が決定的となつた。

(藤平隊員手記、第四キャンプにて)

第四キャンプを建設した。いよいよ大詰にきた。あす第五キャンプを稜線にあげる。隊員二名とシェルパ一名くらいが頂上をめざすのではないか。

あと一週間も余裕があれば全員登頂も決して不可能なことではない。ポスト・モンストンのしかも十一月に入つてから比較的良好な天候がつづいていることは、私たちの予想だにしかかつた幸運だ。

いよいよあと二日だ。第四キャンプから上へはルートはよいとシェルパがいつていたがまさにその通りだ。考えて見ると、第一キャンプから第三キャンプまでのルートが非常にわるい。第一から第二までの約七〇〇米の間のルンゼの登り、一三〇米の固定ロープをとりつけたというだけでもその悪場たるものがわかるうし、第二から第三までの四〇〇米の登りの途中にある高さ三〇米の氷壁の乗り切りなどは難関中の難関だつたが、第三キャンプから上は技術的な困難はないようだ。

問題はただ風をいかにして排除していくか、そして体力がどこまでつづくか、平凡な結論かもしれないが、人間と自然との闘いが最高度のはげしきで展開されるということだ。

十四、第五キャンプ建設なる

十一月二日(月)晴、強風

(隊長手記、第五キャンプにて)

七〇〇〇米に近い第四キャンプの夜は明けた。隊員は大分疲れているようだ。出発準備がおそい。脇坂がぐずぐずしているので、

「早くせんか」

「そんなに早くできませんよ」

と、こんな会話を交しながら、やつとのことで、尾西米のおかゆをすすつて、いよいよ最後のキャンプたる第五キャンプへ向う。今西、藤平の二人とシェルパ三名だ。第四キャンプから第五キャンプへのルートは、アンナプルナ山系の主稜をゆくもので、あらゆる気象条件を直接身に受けなければならぬ。目ざす第四峰はここからはほんとうに手近にみえる。二、三時間もあれば行けそうだ。ところがこいつが曲者で、ヒマラヤではよく経験する錯覚というやつらしい。

遠くから見た感じでは、第四キャンプから頂上までは退屈なダラダラ坂でつづいているようだったが、実際にきてみると、なかなかどうして、頂上までに五つばかりの突起があつて、そのいずれもが急峻である。

うしろをふり向くとマチャ・プチャリ、アンナプルナ十一峰、三峰がそれぞれ見なれた形でそり立っている。第三峰から南に出ている尾根を境にして、一峰と三峰の氷河がもくもくとわき立っている。三峰の氷河の末端には氷河湖が二つ、青くすんでいる。おそらく凍つていることだろう。ここからみる三峰、一峰は全く手のつけようもないひどい山だ。「ヒマラヤは遠方からみれば大概は登れそうにみえるが、近づいてみると、なかなか容易なものではない」ともらしたヒマラヤのベテラン、ティルマンの言葉はなかなかうがつている。

第一の突起にとりかかった。実に急峻な氷雪の突起で、ステップ・カッティングをしながら一歩一歩登つて行かなければならなかつた。斜面はポスト・モンスーンのおかげで割合よくしまつていたが、雪がスカブラ(波形状)になつていて、時々クツがポコンポコンと入り込む。

この尾根に至るところにクレバスが大きな口をあけている。ちらとのぞいてみた限りでは、気味悪いばかりの蒼氷となつていて、一体底があるのやらないのやら、はかり知れない位だ。思わずゾツとするがルートはうまく

とれるもので、クレバスをさけながらすすむことができる。第一の突起は左巻きに登る。風がかなり強く吹き出してきた。

みなだいぶへばつてきたようだ。

第二の突起をすぎたところから風はますます強くなつてきた。

第二峰も間近にみえるが、すごい岩峰になつていて、左のリップチよりわずかに雪がへばりついている。その登高は容易ではないようだ。しかも南面からとりつくことはまず絶望的だし、四峰からの尾根筋では二マイルの距離があるため、尾根筋にいくつかのキャンプを必要とする。まず第二峰にとりつくまでの、スノー・ドームからの四マイルにわたる七〇〇〇米を越した、だらだらした行進は容易なものではない。

第三の突起を越してから第五キャンプを建設したのだが、時間もせまつたのと、風が強さをます一方なので第二と第三の突起の間に第五キャンプを建設した。三人用の橙色のテント一張りだ。ここでシェルパのアン・ニマとグンディの二人を第四キャンプに帰し、あすの頂上攻撃を期して、今西、藤平、ダ・ナムギャルが第五キャンプにとどまつた。

夕食に尾西米に肉を煮込んだのを食つたが、半分しか食えない。しかし七一〇〇米もの高度でこの程度のものでも食えるということは大したことじゃないかと考える。

食後明日の頂上攻撃にそなえてマギー・スープとティーをテルモス(魔法びん)に準備する。六時に出発しようというわけで早々に寝に就くもいよいよ明日こそ京都大学二十数年来の宿願の頂上攻撃だと思つとさすがに興奮し、冷静をつとめればつとめるほど、精神的な重圧がのしかかつて、かえつて寝つかれない。風がバタバタとテントをゆさぶる。

十一月三日(火)烈風

(隊長手記、第五キャンプにて)

朝早く目がさめる。風は相変らず物すごく強くほえていて。テントは今にも破れそうにバタバタあおられる。頭が少し痛むので鎮痛剤をのむとすぐなおる。私は不思議なくらいに高度の影響を感じない。

今日こそはと半ば緊張し、半ば楽しみにしていた文化の日の頂上攻撃は、どうやらむずかしいようだ。ひしひしと確実な足取りで十月末からおしよせていた冬は、とうとうやつてきたのだ。寒さは覚悟のうえとはいえ、昨日までとはまるで違つた風の怒り狂いはほとんど名状し難い。頂上攻撃に出発すべきかすべからざるか、迷

つている余地はない。

われわれの登高と冬の到来と、まるで追いかけてしまっているありさまだったが、冬の方がわれわれより一日早くアンナプルナについてしまったのか。あるいはもつと早くからやってきていたのかも知れない。ここ数日来の雪煙のまき方といい、雪の流れといい、冬の到来を知らせるかのような現象はみられないでもなかつた。われわれ遠征隊のためにカル Катタから特別に受けている気象通報でも、たしかに予報はしていたことだったが、とにかく冬は頂上攻撃の日を期して本格的におとすれたとでもいいたいところだ。

こうした事態をわれわれはずつと前から予知し、ベース・キャンプ建設の日から、ラッシュ・タクティク（突撃戦法）により、隊員の休養も交代で一日か二日しか与えず、困難なうちに予定通りの登高をすすめ、ようやくここまでやってきたのだ。とくに若い隊員の脇坂には十月二十五日第一キャンプを出発以来、一日の休養をすら与えられなかつたのは残念であり、私の責任だと思ふ。彼はいま第四キャンプにがんばって、われわれのサポートに当たってくれている。有難いことだ。

さて第五キャンプではダ・ナムギヤルがなかなか積極的に動いている。しかも今日この烈風のなかをキャンプをもつと高所へあげようと提案する。「もつてのほかだ」私は言下にいい切つたが、私自身はもつと頂上に近づきたい。これがいつわりない本心なのだが、かといつてどれだけのことがこの別世界のような荒天のなかでできることか。

風にバタバタゆさぶられながら、三日はテントのなかですぎていく。夜に入つて風は一段と強暴さを増し、時時猛烈な四〇—五〇米の突風が、テントを何ともいいようない音でどや、しつけては、われわれを思わずドキッとさせる。

テントの風上の一角について小さな穴があく。まさに破壊的な風だ。藤平は修理に懸命である。今日もまた明日への望みをかけて、マギー・スूपとティーを準備して、ともかく寝についた。

十五、嵐の中

十一月四日（水）晴

（隊長手記、第五キャンプにて）

轟音を伴う突風にパツと目がさめる。

「おや、もう朝かな」

不思議なことだ。テントの風下の一角がパツと明るいのだ。ああ、テントが破れている。風に吹き破られていて今や破局の運命にあるではないか。

すぐにダ・ナムギヤルをたたき起す。彼はいまわれわれ三人が一体どんな事態に追いつめられているのかわからないのか。それとも彼はすっかりあきらめているのか、私の言葉に反応を示さないのか。

左隣りに寝ている藤平を起す。

「テントが破れてるぞ!!」

彼も又「ううん」と目をこすつている。なんというのんきさだ。無神経な二人だ。われわれのたつた一つの世界たるテントがなくなつていくのではないか。

最悪事態がとうとうやってきたのだ。

一たい何時だ。一時半。

「ああ……」これが悲劇というのか。

「おい藤平、準備しろ、クツをはけ、出発だ!!」

突風がほえることに、テントは風下側から、一片、一片、ビリリ、ビリリとさけていく。昔の連隊旗が端から破れていくのと同じ調子に、われわれのテントがやられていく。

三人それぞれ必要なものをルックにつめこみ、風上にそれを防風壁のように並べてふんばる。時間がなかなかたたない。ダ・ナムギヤルの手は凍傷にやられてきたらしい。藤平のももをたたいている。藤平はダ・ナムギヤルの手を口に入れて温めてやつている。こんなことをいつまでもやつていられない。しかしやつていなかつたらどうなるだろう。藤平も私のももをたたき。私も藤平も時々たたき。私も足の様子が少しおかしいようだ。

だんだんなくなつていくわれわれのテントの支柱を一そのことはずしてしまおうかとも考えたが、そんなこと

をしてゴッソリ吹飛ばされてしまつてはたいへんだ。心配ではすすこともできない。風速はまず五〇米、最大風速六〇米にはなつてのことだろう。立とうと思つてもなかなか立てない。

長い長い夜もようやく白んできたと思われるころには、テントはほとんど破れてしまつていた。支柱に若干雑巾のようにつつついていただけだ。

北斗七星がきらきらまたたいている。これまで探しても見当らなかつた星がこんなときに発見できる。

さすがの風も日の出とともに幾分は弱まつたらしいが、それでもまだ立ち上れない。しかし夜はともかく明けただ。

一時半から、テントの片隅をおさえつけたまま、ひたすら風速の衰えることのみ期待しながら、七時、八時、九時、長い時間がゆつくり過ぎていった。

そして十時ごろ、ようやく立つて歩けるようになった。立てる、歩ける、さあ下降だ。それ以外にわれわれには何ができるといふのか。

三人はロープを結び合う。ダ・ナムギャルがトップ、藤平がミドル、私はラスト。三人ともふらふらの千鳥足だ。スカブラになつた雪面を突風がおそうたびに、ぐつと腰をおとして、これに対抗できる姿勢をとつて立止る。突風がすぎると歩き出す。およそ何回くらいだろう。突風、停止。突風、停止。そしてスカブラに時々足をつつこみながら、下降は遅々としてはかどらない。急峻なところはそれぞれ神経を使うので案外スリップしないが、ゆるいところでは、藤平が数回スリップする。私もザラメ雪に足をとられてスリップした。

いよいよ第四キャンプへの最後の急斜面にかかる。こいつにはずいぶんてこずり、一人ずつ慎重に確保しながら降つていくが、肩に十五キロの重荷がこたえて、容易なことではない。その間にワーツと突風がやつてくる。一歩一歩、一体どこまで降るのだと思うから、第四キャンプが眼前に現われた。

破れていないテントがみえた。藤平はテントをみて安心したためか、足下があやしくなつてきた。そしてようやく、全くようやく、第四キャンプについた。そこには脇坂とアン・ニマががんばつていた。

実に、登りよりも下降の方が一時間も余計にかかるという困難な下降だつた。

私は藤平と脇坂を第四キャンプに残し、ダ・ナムギャル、アン・ニマをつれて第三キャンプに降ることにした。私の足下もふらふら気味で確かでない。ダ・ナムギャル、アン・ニマ、私の順にロープを結び合い、歩きにくくなつたスノー・ドームの右斜面をトラバース（横断）する。足下がふらふらで、時々バツタリ倒れる。固定ロープを取付けてあるところをそれによつてズルズルおろる。

もうすず暗くなつてきた。大きな口をあけているクレバスもよくみえないくらいになつていく。ようやくアイス・キャップ（帽子状になつた氷）の上に来たらしいが道らしいの赤旗も発見困難となり、アイス・キャップを右の方へ巻く。トップのダ・ナムギャルもすつかり参つたのか極めて慎重だ。もう第三キャンプがみえるはずだ。呼んでみたら、応答があつた。懐中電灯がみえる。やれやれとホツとする途端に、私は雪面に大きく尻もちをついたまま動けなくなつた。そして最後の馬力をふるつて尻もちをついたまま、いざりそのものの恰好で下つていった。

なつかしい舟橋の声が聞える。シェルパも三人迎えにきてくれた。舟橋の肩よりかかつて、あたたかいテントにもぐり込む。伊藤ドクターも私たちを待つていてくれた。ダ・ナムギャルも数日來の奮闘にすつかり疲れ果ててしまい、第三キャンプについたときはくずれないように横になつてしまつた。彼の両手指は八本すつかり凍傷にやられ、そのうち一本はかなりの重傷である。彼の活躍ぶりはすばらしいものだつた。アイス・ウォールの克服をはじめとする、連日第一線に立つての積極的な行動ぶり、大きなアルバイトのときは必ず彼の姿がそこにあつた。

舟橋は当然頂上をアタックすべき隊員だつたのだが、隊のため各キャンプを往復して、荷上げなどに犬馬の労をとり、第三キャンプでがんばつてくれた。この第三キャンプは前進ベース・キャンプとなつていたものだが、だからこそ第五キャンプの建設も予定通りできたのであり、われわれの下降が無事に終ることもできたのだ。シェルパの作つてくれた夕食はお粗末なものだが実においしかった。尾西米に第一キャンプからあげてくれた羊の肉だ。肉も上等のところばかりで、コックのタンドゥの思いやりがしのばれた。

明日は舟橋がシェルパをつれて第四キャンプの藤平と脇坂を迎えにいくという。舟橋の活躍は実に献身的だ。われわれのチーム・ワークは、風であるうが雪であるうがいささかもくずれない。

風がやんで雪が降つていく。明日の第四キャンプへの登りは大へんだらう。そして第四キャンプの二人を救出するのは、頂上アタックよりも困難なアルバイトだらう。

十六、友情に支えられて

十一月五日(木)晴

いつたにどれだけの雪がふつたのか、雪の斜面にくりつけられたような第二キャンプでは知る由もないが、はるか下にみえる第一キャンプのあたりも雪で真白だ。事はすべて終つたことを象徴するかのようにアンナブルナ連峰が静かに突立っている。太陽がやわらかに輝いている平和な朝の一瞬なのだが、上はいつたにどうなのだろう。何事もなくやはりいまの静けさにひたつているのだろうか。それとも何か——そのことだけを時計の振り子のように考えながら、私(立平)はタバコもなく食事もない第二キャンプで、ひつくり返つていた。午後一時ごろ、何やらかけ声をかけて、第三キャンプから伊藤ドクターが、ダ・ナムギャル、アン・ニマをつれて降りてきた。真黒のサングラスをかけた真黒の三人の顔はだれがだれかわからない。伊藤ドクターが、

「ナムギャルの指の凍傷が、だいぶひどいので、早く第一キャンプにおいて治療せねばならんだ」と言う。

「それでアタックはどうだつた？」

「一晩中風にふかれてテントが、ずたずたになつてしまつたんだ」

ナムギャルの凍傷はそのときのものである。ようやく風の出てきたなかを三人は、黙々とロープで結びあつておりていつた。

第二キャンプのたつた一人の相棒であるポーターがしきりに頭痛を訴えている。このポーターは今年のマナスル隊にも加わつて六〇〇〇米あたりまで荷上げしたという優秀な男なのだが、こんどはどうも勝手が違つてか、「アンナブルナ、ノーグッド」をしきりにくり返しては第一キャンプにおいてたがつている。午後からまた強くなつた風が夜に入つてテントをゆすぶり通して眠られない。

(舟橋隊員手記、第三キャンプにて)

前夜の雪に新しく粧われた山に谷に、やわらかな朝の光が溢れている。静かな風のない朝。あゝ、こんな朝もあるのか。見上げる第四峰の稜線にもまぶしいばかりの光が、白々と、うすら寒い雪の上に散乱している。

昨日の、そして一昨日のあの吼えたける風と氷雪の狂乱の相の片リンすらうかがえないおだやかな雪の朝景色なのだ。

ダ・ナムギャルが発発の仕度をととのえて出てくると、

「サーブ」といいながら眼の前に手の指を突き出した。みると黒ずんだ指が、強いシモヤケのようにふくれ上り一面に水泡がでている。ハッとする思いで伊藤ドクターを呼ぶとチラリとながめて、

「昨夜、病人はいないか、ときいた時、何故だまつていたか」

と、いつて不機嫌な様子だつたが、早速注射筒をとり出して水泡の内容を吸い出し、応急処置を施していた。そのような情景をあとに私は三人のシエルパをつれて第三キャンプを出発した。第四キャンプにまだ残つたままの二人の友のことを案じながら、なにかしら不安なかげのさす重い心をいだいて……。

深い新雪にもぐりながら、あるいは風にみがかれた硬い雪面のうえを昨夜隊長たちがくたつてきたルートをとどりながら、私は次第に大きなかたまりとなつて心の中にひろがつてくる不安と懸命に闘つていた。

今朝出発のときに隊長から第三キャンプに留つておれ、シエルパだけを第四にあげたらどうだ、といわれたときのことを想い出す。しかしシエルパたちはルートがわからなくて不安なのか、それともダ・ナムギャルの凍傷をみておそれを抱いたのか、あるいは彼らのこれまでの数々の体験が本能的に感じた直感だつたのか、サーブがわれわれと一緒にみかけてみなければ、よいもわるいも分らぬではないか、といつて彼らだけでは出かけようとしなかつたのだ。

静穏そのものだつたこのヒマラヤの秋空が、たつた一日でガラリとその様相を変えて、われわれを完全な敗北の淵に追込んだとしたら、われわれは何かこれ以上の犠牲を強いられるのだろうか。

あまりにも静かなそして平和な光のおどつているこの世界が、清らかに白くそして輝しいが故に、私の心の不安は、いやましに高く大きくなつていくばかりであつた。

彼らの代りに自分自身が第四キャンプに非情な表情で横たわつているとしたら、一たい……とそう考えていた矢先、再び上から元気でおりてくるだろうと、タカをくくつてのんびりと第三キャンプを出てきたことが急に悔まれてくる。しかし、とにかく行かねばならない。

第三キャンプからしばらくしてぶつかる氷河のなかほどで、ラッセルをシエルパに交代させる。スノー・ドームのアイス・キャップを丹念に足場を刻みなおしながら、一歩々々登つていく三人のシエルパの影が逆光に浮び出て、トップに立つグンディのまわりには、飛び散る雪片が光のカサさえ作つている。

固定ロープをとりつけてある壁を登り切ると、第四キャンプの鞍部へたどる広い風成雪の原に出る。ちようど眼の前に太陽がある感じで、三枚重ねの色眼鏡も用をなさず、ただ眩惑を感じるばかりの反射の強さだ。雪面を

じつとながめていると、クラクラしてきて倒れそうになる。

前を歩いていたダウ・トンダップが「サーブ、ノーテント」といつて立止る。何だ？ 何をいうのか、と思つて見渡すが、なにもみえない。かまわず先にすすませる。しばらくして第四キャンプのあるところとおぼしきあたりに、テントの姿らしいものがみえ出すが、反射光が強くて見定めることができず、声をかけてみても返事が無い。

シェルパたちは、なぜかテントに近よろうとしない。三〇歩くらいの距離をおいて大声で「藤平！ 脇坂！」と二人の名を呼ぶ。一瞬の間があつた。そして、応答があつた。やつと聞きとれる程の微かな返事だ。「サーブ、オーライ」といいながら、シェルパもあとからついてくる。

テントの一つは雪につぶされ、二人のねているテントは、南側がほとんど雪に埋つていた。藤平がテントからはい出してくる。食糧は十分あるはずなのに、コンデンスミルクのほかは、なにも食っていないという。左の耳と右手指の凍傷がひどいだけで、まあなんとか歩けそうだともいう。時刻はすでに午後一時なのに、彼の時計は止つて、まだ十時ごろのつもりでいらした。

一方脇坂は疲労と高山病にやられて、食欲が全くなくなり、完全に肉体の自由を失つていた。立てないのだという。動くということができなくなつてゐるのだ。寝たままに居る彼を、テントのそとに出すために、やむなくテントのウォール（側壁）を切り破らねばならなかつた。

三人のシェルパを指図して、空気マットと寝袋と私物の装備とを、もつてきたリュックサックにつめさせ、私とグンディが脇坂を空身にして助け、あと二人のシェルパが藤平を助け、この二人がどんな思いで、風と寒さと疲労と高山病に闘いつづけたであろうこの第四キャンプに別れを告げた。午後二時だつた。

テントの三角形のシルエットが逆光に黒々と浮び、こちら側の反面は切りさかれたウォールから、内張りの白羽二重の布地が、色眼鏡を透してながめることができる。

第三キャンプに近いアイス・フォールのうえに薄墨色のたそがれがはいよつてきた。アンナプルナ第四峰の南西面、第二峰の南面が落ちていく夕陽を浴びつつバラ色にもえている。そして疲れ果てて、いま起された子供か、それともバカのように雪の上に腰をおろしているわれわれの眼前に、はるか東西に連なるマナスルから、ムクチナートの峠にかけての無数の峰々の背後に、突然紫色の極色が輝き出た。紫紅色の舞扇を、一杯にひろげたようにひかつてゐる。やがて、それは夕暮の橙色に変わり、そして、われわれの足下にも、はいよつてきていた夜の闇のなかに沈んでいつた。

第四キャンプから鞍部の雪原を、グンディと二人で脇坂を両側から支えながら、幾度三人一しよにころんだことであつたろう。固定ロープの支点のところまでいつたら、吊下げておろそうと考えながら、私はただ彼の気力と体力が、果してあと何時間つづくことだろうかを案じ、そんなに長くはない下降の苦業に堪えてくれることをのみ願つた。

藤平は二人のシェルパの間にロープではさまれて、ヒョッコリ、ヒョッコリ酔払いのような足取りながらなんとか自分の力で歩いて下りてくる。私は長い深い友の間にしか通じない直感で、彼のことはもう心配しないことにきめた。

固定ロープの支点で、私はまず三〇米と四〇米の二本のロープをつなぎ、一方の端を脇坂の体にしつかりと結びつけた。陽のかげつてゐるこの長い斜面を、なんとか凍傷にやられずに下り切つてくれと、手袋を与え、手足の指の注意を促す。何をいつても「ハイ」だ。

「すべてをこちらに委せてくれ、ただ、しかし君の感覚だけはひとにはわからないのだから」と、いうとただ「大丈夫です」と答えるばかりだ。

一本のひもを崖から吊下げて、上方の端で一人の男が、片方の端にくくりつけられた男を徐々に吊りおろしていく。もう一人の男が、吊下げられた男の足を自分のマフラーでしばつて、方向づけと補助をする。そういつた動作を、われわれは何度くり返したことであろう。手加減が間違つて、頭が下になつたことも三度ほどあつた。

ジグザグに登つたところも、氷河のクレパスのうえもまつすぐに最大傾斜線に並行して降つた。傾斜の急なところは自然に落ちていくが、そうでないところは「手で這え」と命じておろさせる。このような

苦業が三時間つづいた。

藤平は相変わらず、ヒョッコリ、ヒョッコリと二人のシェルパにはさまれてジグザクの路をおりてくる。

おろすものとおろされるものと。その間には天と地の相違があるだろう。死ぬほどの苦しみとよくいわれるが、その苦しみなら、まだまだだろう。死んでしまつた方がよいという感情、そして、それ以上の苦しみをいま現実に忍ばねばならないのだ。

やがて見え出してきた第三キャンプを下にみながら、「われわれは助かつた」という一つの共感につながれながら、暮色のなかに瞬間くりひろげられた壮重な色彩のパノラマにただなんということなく見入つていた。「さあもう一息」第三キャンプでは、隊長がひとりわれわれの帰りを待つていて下さつた。

その夜、山は再び荒れ出した。しかしわれわれはもう第三キャンプに下つてゐるのだ。無事に……。なんと

うよろこびだ。心の中から、まるでそれこそ音をたてるようにポコポコとわいてくるこの楽しさは、どうしたと
いうものだろう。

きつきテントについたとき、四つんばいになってゲロを吐いていたグンディもいまは「サーブ、ティー」とい
つて香ばしい紅茶をサービスしてくれている。そとはげしい風がうなつている。



十七、戦いは終りぬ

十一月六日(金) 晴

午前中ずつと風、時々テントを吹き飛ばすのではないかと思われるような突風、第二キャンプの風にも、もう
なれつこになつてしまつたが、お茶以外に口に入れるものがないのがさびしい。考えごとも、書きごとも風に邪
魔されるし無念無想もならず、ただ第三キャンプの連中はどうしているだろうか、時々案ずるだけだ。

一時ごろだつたか、藤村隊員が二人のポーターを連れて第二キャンプにあがつてきた。雪がふつてからあまり
往来のなかつたこととて、かなり難儀しながらあがつてきたようだ。

「これから第三キャンプへいつて荷下げをするつもりだ」

「もうぼつぼつサーブたちが上からおりてくるころと思う」とかなんとか話しあつていると、上の方からかけ
声をする。深雪のなかを、めいめいが大きなルックを背負つての下降だ。全部で七人いる。苦しそうな下降だ。

(舟橋隊員手記、第二キャンプにて)

第三キャンプは朝からひどい風だつた。テントが今にも破れそうな、烈しさだ。

外にでると風に向つてまともに立つてはおれず、下山の仕度をするときさえもむずかしかつた。それでも九時
すぎには、風向が少しづつ変わり、力も弱まり始めた。シェルパたちのテントが広がつたので、そこに寝かしてお
いた脇坂も前日よりよほど元氣になつていて、

「降りるぞ」と呼びかけると、元氣な声で、

「どこまで」と聞き返してきた。

出発前、藤平はパサン・ダワにたすけられながら、オシッコをした。終ると、私の方を向いてニヤッと笑つ
た。十時、出発である。

アイス・ウォールまで隊長にラストをしてもらい、藤平、脇坂、私の四人でロープを結んだ。

テントは重くて到底もてないが、隊長と私、それにシェルパ三人で砂糖など若干の食糧と空気マット、寝袋と私
物の装備は全部おろすことになつた。サーブは三〇キロぐらい、シェルパは三十五キロ、それ以上もあつたらう。

サブルックを負つた藤平は脇坂をうしろから確保して、アドバイスしながら降つていく。アイス・ウォールの

上の固定ロープの支点までは、脇坂に肩をかしながら歩いていった。そこから下は藤平が確保して脇坂に一步一歩ステップを教えながら降りる。時折突風が雪面から氷片を吹き飛ばし、それをわれわれに叩きつけた。

脇坂は、完全にバランスを失っており、妙なところにクランポンを引つけてはハッとさせる。一時は完全にロープにぶら下つた。もつとも藤平の確保と固定ロープがきいて、からだはグラリと傾いただけだったが……。

アイス・ウォールの下には、なお数日分の食糧が下から補給されていた。チョコレートとカステラなど若干を羽毛服のふところに押込んで、藤平が降りてくるのを待った。凍傷で手の不自由な彼がみごとなバランスでおりにきて、二人で脇坂を二〇米ほど下の陽のあたる場所までおろした。

ここは左側にうすい雪庇ができているせまい雪稜で、右は四峰下の氷河にそぎ落ちている。わずか一〇〇米近い高度差で、こうも風力が違うものか。第三キャンプの風当りとまるで違っている。

隊長が下り、パサン・ダワが下ると、次にわれわれのルックサックがロープで吊り下つてきた。あとをシェルパにまかせて、再び重いルックを肩にロープを結んで、一步一步慎重に危険な歩みを下へ下へとつづけていった。

途中で藤平がチョコレート・バーをポケットから取出してニヤリと笑う。こちらも負けずに、ふところからカステラの大きな缶を二つ出してみせると、びつくりして「すげえな」という。ようやく第二キャンプが見えてきた。一時半ごろだ。

斜面の上部に一行の姿が見えてから前まで下りてくるのに随分かかった。サングラスをはずしても、一見してだれがだれなのやら分らぬくらい顔付が変わっている。どうにも手の出しようもない烈風のなかで、悪戦苦闘をつづけた末、いまやつとの思いで「逃げて」きたのだといった表情である。私（立平）はお茶か、スープをのませようとしたがラジウスがうまく働かない。

疲れ果てて、立っていることさえ困難な面持の脇坂隊員は第二キャンプでとまるという。舟橋隊員と藤村隊員も付添いの恰好でとまることになった。

第一キャンプまで下つてしまうのは隊長と藤平隊員で、それに立平もロープを結んでおりはじめた。

第一キャンプについたところは、あたりが真暗になつてしまつていたが、たき火をかこんだ夕食は久しぶりに心温まるものがあつた。隊長らは実に十三日目だ。藤平隊員は、

「クツでふんでも絶対にすべらない土の上というのは、いいもんですなあ」と、しみじみ述懐している。第一キャンプもずい分寒くなつた。岩かげには雪が残っている。

伊藤ドクターは、両手指を凍傷にやられたダ・ナムギヤルの治療にいそがしい。左耳と右手指をやられた藤平隊員も早速治療をうけている。ダ・ナムギヤルの凍傷はかなりひどいらしく、場合によつては、一本くらい切断しなければならぬ事態になるかも知れぬとのことらしいが、ドクター独特の微温湯療法で極力防ぐつもりだという。第一キャンプのテントはもうバタバタゆすられない。「ああ、いいテントだ」と隊長が無量の思いをこめて、ちよつと感慨をもらす。

十一月七日（土）晴

朝、上層雲がうつすらと、ヒマラヤの上空にひろがっていた。ここでは初めてみる現象だ。天候悪化のきざしか。とにかく稜線上の雪煙は相変らずものすごい。

ドクターは今日も藤平隊員とダ・ナムギヤルの治療に大わらわだ。シェルパが隊長たちのルックにつまんでいるいろんな装備をとり出して、ほしている。オーバー・シューズなんかには雪片が一ぱいへばりついている。

午後二時ごろ舟橋、藤村、脇坂の三隊員が第二キャンプからおりてきた。脇坂隊員の疲労はずいぶんひどいらしい。テントの前に立つたかと思うと、折れるように寝袋のなかに入つてしまった。

ともかくも、これで全隊員が無事第一キャンプにあつまつたわけだ。全隊員がもれなく三つのテントにはいる。「不思議なみたいだよ」舟橋隊員がつぶやく。

夕食はまだ残り少いたき火をかこんでの晩さんだ。尾西米が出る。やわらかい羊肉が出る。そして食後の果物のカンヅメに、一同カン声をあげて舌つづみを打った。

あとはたきを突込みながらの懐古談となるが、だれもあまり多くを話さない。やがて、それぞれテントにもぐりこんだ。

なだれが相変らず夜の闇をつんざいて轟く。

十一月八日（日）晴

久しぶりで、全員休養の日だ。第一キャンプの前にマットをひろげ、その上にねこころんで稜線を見上げる。第五キャンプのあたりはひどい雪煙だ。それから第四、第三キャンプ、そして思い出のアイス・ウォール。その下に赤い旗が立っているのが、ほのかにみとめられる。われわれの立てた赤い標識旗。このヒマラヤの上で、旗よ——いつまでも烈風にはためいてくれ。そして、われわれの心の中にも——。

十一月九日(月)晴

いよいよ下山だ。前日は下の部落にまでおりていつて、集めてきたポーターが早々と第一キャンプにあらがってきた。ダ・ナムギャルの手指の凍傷も一時は心配されたものの、伊藤ドクターの治療の甲斐あつて、指を切断しなければならぬところまではいかなくて済みそうだという。藤平隊員の耳と右手指の凍傷も経過はよいし、隊長の軽度の足指の凍傷も歩行に差支えるほどのものではない。

二十日間近くも、われわれの生活の本拠であつた五〇〇〇米の第一キャンプにくだる。ここはすでに、前日下の部落からあらがつて来たポーターによつて、跡方もなく下におろされ、たき火の跡がうすら寒く残つていただけだ。

第四峰をふりかえつてみるが、稜線は相変らず雪煙がすごい。

三・四峰の流れをあつめるサブジュイ・コーラに沿い、みごとな松林の間を一目散にくだる。谷がひらけて、マルシャンディ河に合流する近くの、きれいな池のほとりでキャンプを張る。例のフェルトのクツをはいたチベット系のポーターが五十人近くたむろしている。デイリーもベース・キャンプで悩まされた赤痢がなおつて元気な姿でわれわれを迎えてくれた。

十一月十日(火)晴

再びキャラバンがはじまる。

ポカラ到着は二十一日という予定だ。

ポーターたちは朝もまだまつくらな五時頃から、がやがやさわきまわつている。

朝食をくついていると、胡弓のような楽器をもつた一団がやつてきて、歌と踊りをはじめた。抜目なくたんまり、ボクシス(チップ)をもらつつもりでやつているのだが、こちらは食事中で、むしろうるさく感じて知らぬ顔をきめこんでいると、いつの間にか引込んでしまった。

九時半の出発。風はほとんどなくホコリもまきあがらず、あたたかだつた。

うしろをふりむいて、これがほんとの見納めになるアンナプルナ第四峰に手をふり、ツエをふつて、心からの

別れをつげた。全くただ感無量だ。足を軽い凍傷にやられ、ツエをついて歩く今西隊長、耳の凍傷で頭にほうたいた姿の藤平、完全疲労から、かろうじてひとり歩きできるようになつた脇坂、ひどい咳と胸痛になやまされていく立平の各隊員。こんな調子で果してこれからの十日間ほどの旅行がスムーズにつづけられるだろうかと案じられるが、ともかく歩かねばならない。舟橋隊員と伊藤ドクターは比較的元気そうで、いつも先頭を切つて歩いているが、重苦しい浮かぬ顔つきは、他の者と変らない。言葉かずも少く、足もとだけをみて歩いている。四峰はもう前山にかくれてしまつてみえないが、三峰の稜線からあらがっている雪煙は雲ではないかと思えるほどのものすごくさだ。下界の無風状態にくらべ、ヒマラヤの風の強さをよく知らせてくれるようだつた。

シネ・カメラマンに早変りした伊藤ドクターが、最後のカットにするのだ、といつて監督よろしくアクションをつけている。

「はいつ、そこで立ち止つて、アンナプルナを見上げる仕草をする——カット」

一人で張切つているが、一同しぶく動いているばかりだ。

やがてラマ教の塔、チオルテン、メンダンが現われピサン部落の通過だ。平屋根のうえには薪と乾草がおどろくほどうず高くつまれてある。日蔭の路には雪がうつつすらと残り、沿道の草木はすべて枯れ果てて、このあたりにも冬がせまつていることを思わせる。

キャンプ地についたら患者が大ぜい集つている。なかには馬でわれわれを追つてきた患者もある。伊藤ドクターは早速診療箱を前にデイリーの通訳で聴診器片手に大活躍だ。診療が終つた患者は一人々々両手を合せて謝意を示している。そしてお礼にあとから卵をもつてくるという。

「純真な連中だ。久しぶりで医者らしい気分になつたね」とはドクターの卵につられた？ 卒直な感想だ。

山火事がもうもうと煙をあげている。この時季には方々で山火事がおきていつまでももえているそうだ。夜空に真赤の焰が浮んで一点景をなした。京都つ子の藤村隊員が

「まさに大文字ですな」

と悦に入つている。

ポーターだろうか、民謡風の歌の合唱が流れてくる。チベタンは音楽や歌や踊りが好きだと見えてよく歌い踊る。女のポーターなんかは荷物をかついで歩きながら歌つている。

単調だが夜の静かな気分マッチした抒情味のあるメロディーだ。

十一月十一日(水)晴

ポーターたちは、女と子供が半分いるのに、なかなかよく歩く。

二時半ごろチャーメ部落をすぎてまもなくキャンプを張った。テントをはつたら天下の街道がすっかりふさがれてしまったが、みんな平気で、だれも文句もいわない。

ここまでおりてくるとずいぶんあたたく、これまで夕方になると着ていた羽毛服もいらなくらいだ。

今夜は一つ慰労会をやるうというわけで、ロクシユという日本の焼酎に似た地酒を買い込み、ファイアをかこんで盛んな踊り大会を展開した。

一通りロクシユがまわり、ポーターたちが大きな輪を作つて一踊り前座をつとめたあと、サーブたちのダンスが始つた。シェルバやチベタンがステップを踏んで踊りの向うを張つて、こちらは全員でデカンショを始めた。全く踊りとはお世辞にもいえない代物だったが、その荒つぽさが、彼らを喜ばすには十分だった。

サーブもシェルバも、そしてポーターたちまでもが、一つに溶けあつて楽しんで歌い笑つた一夜であつた。

ここでわれわれと終始行動をともにし、積極的に働いてくれた七人のシェルバの経歴を紹介しておこう。

○ガルトゥエン(四〇才) シェルバの長たるサーダーである。古くは一九三五・三八年のイギリス隊のエベレスト遠征をはじめとして、ガルワル地方(四七年)カンチェンジュンガ周辺を歩き戦後はエベレスト南部のソラコンブ、アンナプルナヘティルマン隊に従い(五〇年)五一年にはガルワルのチャウカンバ(フランス隊)昨年の今西(鷲)踏査隊、今年の日本のマナスル隊にそれぞれサーダーとして参加している。来春はアメリカ隊のマカルーか、日本のマナスル隊にいくだろうといわれている。

低地旅行のさいのポーターの取扱いにはすぐれた腕前をみせ、困難な輸送をスムーズに運んでサーダーの貫録を示した。

○タンドゥ(五〇才) サードの次席格にあたる。コックとしてイギリス隊仕込みのすばらしい腕をふるつた。昨年ガルワルとチヨオユウに行き、今年エベレストとずつとイギリス隊に従っている。

○ダ・ナムギャル(三四才) ガルトゥエンの弟。温厚だが低地でも登高においても常に非常に積極的に働いた。技術的にもきわめて優秀だ。

五〇年ティルマンのアンナプルナ、五一年のフランスのナンダ・デヴィに参加。エベレストへは昨年二回スイス隊、今春イギリス隊に従つて八三四〇米まで登っている。

○アン・ニマ(二三才) エベレストに昨年二回、今年一回と、若いだけに経歴は浅いが、八五〇〇米まで登つて

おり、若手組の一人としてコマメに動きまわつた。

○ダワ・トンダップ(四八才) エベレストへはスイス隊に二回、イギリス隊に三回、計五回も参加している。さらに戦前のアメリカ隊のK₂へ二回、ナンガバルバットへ二回、五〇年のフランス隊のアンナプルナ第一峰とヒマラヤ・ジャイアントのほとんど全部に足跡を残し、一九三〇年代からのヒマラヤ登山史を一身に背負っているヒマラヤのベテランである。このほかカンチェンジュンガ周辺、トルズルなど数えあげればキリがないという。こんどは第一線にはたたず、もつぱらサポートの役目に甘んじていた。常に温顔に微笑をたたえているオヤジである。

○パサン・ダワ(三〇才) 今年のエベレストにサウス・コル(七九二〇米)まで登っている。ティルマンのアンナプルナにはガルトゥエン、ダ・ナムギャルとともに参加、昨年はタンドゥとガルワルのガンゴトリ(イギリス隊)に行つている。こんどはダワ・トンダップと同じようにサポートをつめた。

○グンディ(二九才) 昨年のスイス隊のエベレストに従い、カイラスにも行つた。今年のマナスル隊では七五〇〇米まで登つた。

十一月十二日(木)晴

あたい日がつづくのは何よりだ。

「秋が深まってきた感じだね」と舟橋隊員がつぶやけば「だんだんあたたかくなつてきたなあ」と藤平隊員が応ずる。一日一日とくだつていくにつれて、一枚ぬぎ二枚ぬぎして藤村隊員なんかは半ズボン姿だ。ポーターもフェルトのクツをぬいで革グツにはきかえている。それも面倒になると裸足だ。

われわれが越えてきたナムン・バンジャンからのくだりとの出合いの地点に出た。マナスル、ピーク29、ヒマラルチュリのトリオが実に美しく見える。松の木が景観をさらに引立てている。マナスルの雪煙も物凄い。

バカルチャップ部落を通過する。ここまできると家の構造がネパール風とチベット風のチャンボンになつてくる。おそらく、このあたりが、いわば民族学的な境界なのだろう。

対岸にトンジュ部落をみて、なおもゴツゴツ路をくだつたところのとうもろこし畑でキャンプ。夜、焚火をかこみながら、今回の遠征をかえりみる座談会をひらいた。

十九、再びポカラへ

十一月十三日(金)晴

「十三日の金曜日だから気をつける」なんていつているうちに、マルシャンディが急にせまくなり、路はとたんに悪くなつてそのうち絶壁にかかつた危かしい栈道となる。登り降りの多いいな路がつづく。

ヤシ類やバナナの樹が現われてきた。ツエをついた今西隊長、脇坂隊員は足の裏がずいぶん痛むらしい歩き方だが、まだ当分の間は痛みがとれない凍傷らしい。

ひどい凍傷にやられたダ・ナムギヤルは昨日までの右手の吊りほうたいもと、左手指のほうたいもとつてい。次第に快方に向つていらしい。最近毎夜の夕食後の彼の凍傷の治療のため写真現像用の大皿に温湯を運ぶのがポーターの日課になつてい。伊藤ドクターもこの治療には懸命だ。

だんだん往來が多くなつてくる。

この日はマルシャンディの河つぶちの岩かげの砂地でキャンプだ。何日ぶりかで川で顔や手足を洗う。エメラルドにこつている水だが、これがわれわれの飲料水だ。

一日七時間半ぐらいの歩きのだが、かなり疲れが出てくる。この路は藤村隊員が苦勞しながらあがつてきたところだ。あとまだひどい路はあるのかいなどときりにきいてい。

十一月十四日(土)晴

朝八時半の気温は十五度。今日も下着を一枚ぬぐ。ポーターもだんだん軽装になつていく。

くだるにつれて、あたりの風景もすっかりネパールらしくなつてきた。山の頂上近くまで耕されている段々の田畑、赤壁の家にバナナの樹。ちようど、いま収穫時で稲束をむしろにたたきつけては穂を落している。きわめて原始的な農法だ。

峡谷をぬけると、あとは路もよくなる。菩提樹が現われてきた。日向よりも日蔭の休憩所の方がよくなつてきた。

マルシャンディがゆるやかによんどんでいるところの河原でキャンプ。

月初めに、ベース・キャンプから手紙をもたせてポカラに走らせたポストラナー(郵便飛脚)がもどつてきた。

ところが待ちあぐんでいる内地からの手紙一通ももつていない。カトマンズとポカラの間で何か手違いがあつたのだから。

十一月十五日(日)晴

七時出発。出発の時刻が日を追つて早くなつていく。

一時間ばかりの登り路を終えると、田んぼのあぜを伝う単調な路だ。

こんなにくだつてしまつていいのかしら、と思うほどぐんぐんくだつていつて、三時クティという部落につく。

この地方唯一のバザール(市場)だ。わりにととのつた商店が十数軒並び、一応の生活品は売つていようだ。反物を売つている衣料品店が一ばん多い。

子供たちがタコあげをたのしんでいる。ちやんとネパリー帽をかぶり、ズボンをはいてととのつた服装だ。バザールでは、それだけ裕福なのだろう。

田んぼのなかでテントをはつていると、大人も子供も、まつくらになるまで、テントの近くに坐つたままじつと動かずにながめている。

患者がおしかけて伊藤ドクターを悩ませているのは、いつもの通りだ。

十一月十六日(月)晴

クティの外れから後をふりむくと、ピーク29、マナスルがものすごく高くみえるのにおどろく。雪煙は相変らずさかんにまいてい。

路はどうとうマルシャンディからはなれて水量の少い支流の河原に入つた。

藤村隊員の植物採集、脇坂隊員のチョウチョウの収集がはじまる。

一六〇〇米の峠に出ると家が数軒、マナスルトリオをバックに平和な一幅の絵をなしている。菜の花畑があつて、いまだき花が咲いて、なんだろうといふかるが、年に二回咲くのかも知れぬ。

かなり急峻な尾根筋からくだりにかかり、足も多少ガクガクして来たころ、ナルマという部落のはずれでキャンプ。こんどはヒエ畑だ。テント地も連日なかなかヴァラエティに富んでいるのが面白い。

十一月十七日(火)晴

朝アンナプルナ、ラムジュン、ナムン・パンジャンの連の峰々が文字どおりのあかね色に映えて、われわれの眼をたのしませたが、出発の七時ごろにはもう雲にかくれようとしていた。

尾根筋の急坂を一時間くだつて川に出る。渡渉数回で広くひらけた谷の河原をゆく平坦な路となる。

このあたりからクツをぶらさげた正装姿の部落民が急ぎ足でくだつていく。男・女・子供、ずいぶんの入道だ。こんな山の中のどこにこんなにも多くの人が住んでいるのかと思われるくらいだ。きけば、つぎの部落で年に一回のお祭りがあるのだそうだ。

みかんをかついでくるのによくすれ違ふ。ポカラ方面から、はるばる行商にやつてくるらしいが、一ルピー(約五〇円)で百箇以上もあるというのだからおどろく。日本のものとはほとんど味が変わらず、おいしい。

アンナプルナの南面から流れているマディコーラを渡り、さらに別の小さな谷をつめてゆき、再び山路にさしかかつてまもなく田んぼのなかでキャンプ。

明日はうまく行けばポカラ着だという。ポーターが好調だから、夕方にはつけるかも知れぬと、ガルツェン。六コース(約二〇キロ)あるという。

十一月十八日(水)晴

おひるごろ山路をおりきると、もうポカラ平原だ。登り降りはないが、ポカラまではまだずいぶんありそう。ポカラ出身のポーターが「まだかなりあるが今日中に着かなければダメですぞ」といつてハリキッテ飛ばして行く。

田んぼ路をトポトポ歩いてみると、いつの間にかカトマンズに通ずる街道に出ている。さすがに往来がはげしい。路はそのくせ余りよくない。

歩くのもいい加減いやになり膝の関節がガクガクしてきたころ、やつとポカラの石だたみの道にさしかかった。ポカラ州知事の官邸の庭でキャンプを張る。

十一月十九日(木)晴

アンナプルナの南面がよく見える。「あんなにすごいところを登るつもりで南面に入ったんだからなあ」とたれかがもらす。

四峰は前面のピークにかくされてみえないが、スノー・ドームからの主稜がおどろくほどの急傾斜で四峰につ

づいている。北面でみたのと南面から見ると主稜の傾斜度だけでもころも違うものか。

そしてあんなにも高い急峻なところに登つていつたこと、そして、いまあそこから降りてきて、あたたかい平和なポカラにいるということが、遠い夢の国の出来事のように思われてならない。

散髪と洗たくと装備類の日干、それに休養と遠征はじまつていらいのんびりした一日だ。

十一月二十日(金)晴

太陽の光といい、緑の芝生にはられてあるオレンジ色のわれわれのテントといい、そしてわれわれの気持といい、それらが一しよくたになつて、まことにのどかなふんいきをかもし出している。

朝、八日以来ポーターとしてわれわれと一しよに歩いてきたチベタン七・八人が手をふりながら帰つていった。

遠征が終つたとなると、われわれも早く帰りたい。とりあえず早くカルカッタに出ることだ。ポカラ飛行場には、毎日飛行機が発着しているわけではないので、いつまでもムダめしをくわされてはたまらんと心配したが、二十四日には飛ぶとのことだ。

十一月二十一日(土)晴

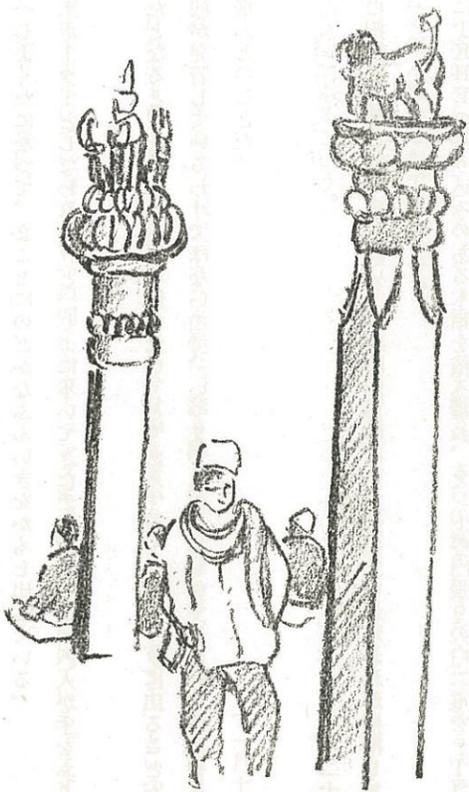
午前中知事の招待で近郊の湖へ清遊に行く。四時からはポカラの名士をわれわれが招待してティーパーティーをひらいた。

キャンプ地にJ.K.H.E.のすり込みのある木箱を積み重ね、テントの内張りの白二重をテーブルクロス代りにして、魔法びんには草花をさし込んだ調度に、登山食料の残りものではあるがビスケット、カステラ、ヨーカンのみかんのカンヅメそれにたばこのピースといった豪華なものだ。知事、軍隊の指揮官、印度航空会社員などといったところ七人が集つてきた。酸素吸入器、ポーターブルラジオ、携帯食糧といったものが珍らしがられ、とくに尾西米には関心をもつたようだった。

夜はシェルパの申し出で、ロクシユをのみながらお別れパーティーだ。グンディ、アン・ニマらの若いところが、酔いとともに歌う踊る怪気炎をあげるのさわぎだった。

この日ポストラランナーがカトマンズから到着した。われわれと行違つてクティまでいつて、引返してきたそうだ。日本を出て二回目に受取る通信だ。九月の水害の話が出るくらいのおくれである。日本の活字に飢えている

隊員たちは、一ヶ月前の新聞をひっぱりだこで読みふけている。国体や野球やボクシングなど、ずいぶん古い話がここではニュースとして話題のタネになっていた。



二十、首都カトマンズを訪問

十一月二十三日(月)晴

ポカラの知事官邸の底にはられたテントでの生活も五日目、荷物の整理も終えたし、われわれのチャーターした飛行機もあす飛んでくるというので、午後約一時間行程の南方の飛行場にテントをうつした。

この飛行場は、ふだんは村人が耕作に通う大通りであり、牛の放牧場であつて、一本の吹流しと草薺のカメラボコ型の小さな事務所があるだけの、いかにもこのあたりの平和なふんい気に適したところである。

夕映えのアンナプルナ連峰がたとえようもなく美しく望まれた。

この日、われわれと終始苦業をともにしてきた七人のシェルパに、それぞれサティフィケーション(証明書)が配られた。彼らのアンナプルナ遠征での業績を証明したもので、たとえば「ダ・ナムギャルはヒマラヤン・クラブに所属するシェルパであつて、アンナプルナの遠征にあつては、遠征隊が到達できた最高の地点まで荷上げするとともに、そこに建てられた最終キャンプで二晩をすごした。とくにアイス・ウォールの突破にさいして示したその卓抜した技術は積極性と堅実性ととも高く評価さるべきものである」といった内容のものだ。

彼のほかにコックのタンドゥもそのまじめさと料理の腕前を「高く評価」された。薄つぺらな紙だが、彼らにとっては一ばん大事な書類で、めいめいが胴巻の奥深く入念にしまつている。これは彼らがつけているヒマラヤン・クラブ発行のノートに書き直され、同クラブの確認を受けることになつている。履歴書の一ページをかざるわけだ。

十一月二十四日(火)晴

昨日、今日と雲一つない上天気でアンナプルナがよく見える、そして真正面のどつしりとひろがった四峰、二峰ラムジュン、ナムン・バンジャンのあたりが苦しかつたこと、楽しかつたことのいろんな思い出をかきたてる。あの峠を越えて、あの稜線を登つていつたのだと手をふりあげるようにして、指す方向のその場所にいた瞬間があつたのかと思ひ出をたぐつてみるにつけても、いまこうしてあたたかな緑の芝生にあまりにも無事な、そして平和な姿でいるわれわれにとつては、あのあたりを動きまわつた一ヶ月半がもはや遠い夢の国の出来事のようにしかうつつてこない。

ポカラ盆地の風景自体が夢のように美しいせいかもしれない。アンナプルナにいよいよ別れをつけようとするわれわれの感傷であるのかも知れない。

バイロア組とともに、カルクッタまで同行させてくれという知事夫妻も朝早くからやつて来て飛行機を待つている。正午にはくるといふ飛行機が一時以上もおくられてカトマンズからやつて来た。そして内地からの三回目の便りも一しよにやつて来た。

藤平、舟橋、藤村、脇坂ら四隊員は二十一箇の荷物をたずさえてバイロアに飛び、ノータンワを経て汽車でカルクッタに直行する予定だ。

ノータンワまで同行するシェルパたちは、下界におりたらなみの人間さとてもいいたそうなきな服装をしてはしゃいでいる。年ひとつも飛行機にのるのはうれしらしい。

この飛行機がバイロアからもどってくるまで待たされるカトマンズ組の今西隊長にガルトツェンが別れの挨拶をしている。そして伊藤ドクターには「ダ・ナムギャルの凍傷の治療には、大へんよい薬を使つてもらつたおかげで見違えるほどよくなつて非常にうれしい」とつたない英語ながらも情のこもつたあいさつだ。当のダ・ナムギャルも両手を合せて感謝している。

着陸して十五分もたつたぬうちに出発だ。ドアがしまると同時にプロペラが回り出して実に無雑作に飛んでいつてしまった。一時間半ほどの待合せの間に、たつたいま運ばれてきた新聞をひるげていると、現地人がアンナプルナの掲載写真をのぞきこんでは「マチャプチャリがどうのこうの」「ジャパンの何がどうの」とうるさい限りだ。

そうこうするうちに引返して来た飛行機に今西隊長、伊藤、立平隊員とデイリーがのりこむ。乗つたと思つたら例の無雑作な離陸だ。

機上から見たアンナプルナ二峰と四峰のアイスフォールがあまりに長く広いにおどろき、そしてどの尾根をつめていつても大障壁にぶつかり、結局は南面からの登高ルートはないことを再確認して別れを告げたことであつた。

飛行機はネパール・ヒマラヤを左にのぞみながら東に飛ぶ。山あいには点在する赤壁の部落や段々畑のユニークな美しさもさることながら、まるでわれわれのためにとつておかれたかのような雲一つない快晴にめぐまれたこの日、眼前に展開するヒマラヤの壮大なパノラマはまたとない豪勢なはなむけであつた。

アンナプルナ山群、マナスル、ピーク29、ヒマルチュリの山群、ついでガネッシュ・ヒマール、ランタン・

ヒマール、そしておそらくはゴザインタン山群、ゴッリサンカール山群と思われる無数のピークがちようど鐘乳洞を無限大に大きくしたように突立っている。そしてそれらの一つ一つがゆつくりと眼前をすぎてゆく。なんだか観兵式をやつているようないい気分だが、底知れぬ力に満ちあふれた偉容に圧倒されてしまう。エベレストはみえないかと思ふが、デイリーの話ではこのあたりからはみえないのだそうだ。

飛行機はジャンゲルの上にさしかかつた。それこそアリの入込む余地もない程のものすごい密生ぶりである。これが有名なタライのジャンゲルらしい。世界一の狩猟地といわれ、原始そのものの姿をもつこの地帯の動植物は、その道の学者にとつてあこがれのまゝであるといわれる。

シムラ飛行場で給油着陸ののち、東西に走るけわしい山脈を三つばかり越えようとカトマンズだ。ポカラからちようど一時間の飛行である。

飛行場には遠征隊の通信連絡を世話してくれた皇太子秘書のダルシャン、日本留学から帰つたばかりのハリハール・ラナ、ネパールに留学中のたつた一人の邦人金子重太君ら大ぜいの出迎えをうけ、今西隊長は水仙とバラの花束を贈られた。

宿舎はその名もヒマラヤ・ホテルとつばなもののだが、中味はお粗末で、日本ならまず三流どころだろう。われわれのふところは、これ以上のホテルを許されないからである。

十一月二十五日(水)晴

ダルシャンがやつて来て「今日はまあお寺見物でもしてくれ」という。われわれは見物のためにカトマンズに来ているのではなく、こんどの遠征にあつてネパール政府から与えられたいろんな便宜に対して関係者に謝意を表すためにきているのだから、のんびりかまえてはられないのだが仕方がない。お寺の多いことで有名な町でもみようと、ぶらりと出かけて見た。なる程至るところお寺だらけである。お寺だけがあつてお坊さんはいない。修理も掃除もしないらしく一様に荒れている。建ちつばなしである。ラマ教の寺院も、かなり目につく。塔の基部に、大きな「目」がかいてある。中世そのものの雰囲気だ。

アンナプルナと称するお寺(お堂といふのかもしれない)が町の四つ辻の一隅に建つていた。

十一月二十六日(木)晴

この日もお寺見物、カトマンズの南のパターンという古い町に行く。ここもお寺だらけで、仏教のさかんなの

が特色だ。

町の人々の三分の二は仏教徒だといわれる。古代インドの有名なアソカ王がこの地方を巡礼したさい建てたという塔がある。

十一月二十七日(金) 晴

われわれは登山服装のまゝでここに来ている。これでは要人を訪問するのに具合が悪かろうとダルシヤンのもってきたネパール服を着ることにした。日本の農民がよくはいてはいるタッキというももひき様のズボン、料理店のコックがつけている前掛みたいな下着にダブルの背広を着込み、ネパール帽にネパールグツといういでたちでダルシヤン、ディリーらが「全然ネパリーだよ。アハハ」とひやかす。

アマリタナンダ僧正を郊外のアナンダ・クティの僧院に訪問する。国王へのおみやげとして持参した盆栽を、われわれがカルカッタで引渡したお坊さんで、国王はあの盆栽がものすごく気に入って、もつと日本の盆栽がほしいという御意向だということ、諸君の遠征の模様は数回ラジオで聞いたということなどの話。

ディリーから昼食を招待される。飯を盛つた大皿のまわりにおかずの小皿がぐるりと並んでみごとながめだ。料理はすべてカレー粉で味つけされ、平げてしまうと必ずお代りをもつてくる。右手ですくつて食べるのがネパール食の本式のマナーなのだがそれだけは勘弁してもらおう。

それにしてもわれわれの予定は一向にはかどらない。アレンジをたのんであるダルシヤンを促しても「総理は本日政務多端で……」気を長くもつ外はない。

十一月二十八日(土) 晴

ネパールは土曜日が休日である。ダルシヤンは皇太子と狩猟にいったという。こんな調子ではいつになつたらカトマンズ訪問の目的が達せられるかわからないので、ディリーにアレンジを依頼した。

カレッジの地理学の教授だという紳士がやつて来て、われわれの歩いた地域及び登つた山の気象状態や動植物の分布状態をくわしく聞いていつた。近く「ネパール」と題して出版するそうだ。

この町の富豪で親日家のシャハ氏に夕食を招かれたさい、家族のものから求められるままに安曇節(あずまぶし)をうたつてやると、お返しにエベレスト征服の英雄テンジンをたたえる歌というやつを合唱してくれた。

「シェルパのテンジンがヒマラヤの一ばん高い峰に登つた」という意味の文句をくり返すのだが、なかなか勇

壮なメロディだ。レコードにも吹込まれて、いまヒット盤になつていそう。

ディリーがわれわれの訪問予定先を全部アレンジしてきてくれた。

あすは一日中あいさつまわりだ。

十一月二十九日(日) 晴

まず外務次官のマンドゥール氏を訪ねる。「道路の整備、水力発電の開発がこの国にとつて緊急の課題だが、この事業をすすめるにあつては日本人技師の援助がほしい」とか「吉田首相の人気はどうか」「アメリカとの間はうまくいつているのか」などと尋ねられる。

ついでコイラ首相を訪問した。「日本がすでに完全に戦前に復帰し、アジアの先頭に立っているのはよろこばしい。日本民族とネパール人は同じなのだから今後とも提携を緊密に保つてゆきたい」「再び遠征にくるときは、できるだけだけの援助をするつもりだ」と鄭重な言葉である。相手が一国の宰相なので流石に、通訳の伊藤ドクターも少し固くなつている。

次はインド大使を訪れる。アイゼンハウアーそっくりの人だ。

たまたま大使のところへ集つていたインドの軍人が、代る代る遠征の話に興味深そうにききにくる。軍医にとつつかまつた伊藤ドクターは「マルシヤンディ河流域に昨秋流行した悪疫は腸チブスだったのか、発疹チブスだったのか」についてさかんに議論している。

われわれのネパール・スタイルはどこへいつても「そっくりですね」とひやかされた。

十一月三十日(日) 曇

われわれのカトマンズ訪問の目的は終つたわけではないが、今西隊長と立平は当地をはなれることにした。すでにカルカッタに先着している舟橋隊員らと早く帰国準備をすすめる必要があるためだ。伊藤ドクターはあと二日居残り、皇太子殿下の訪問をすませ、地質学者として国連から委嘱されてヒマラヤの地質を調べに来ているイスのハーゲン博士にも会つて話をきく予定だ。

カトマンズ空港を飛立ち、幾重ものけわしい山脈をすれすれに越し、タライジャングルをすぎてインド領に入り、パトナ空港に立寄つたのち、ちょうど三時間でカルカッタ郊外のダムダム飛行場に到着した。舟橋、藤平両隊員に迎えられて、ミネルヴァ・ホテルに入った。

十二月九日

夏服をきて歩いていても、ちよつと汗ばむような十二月のカルカタである。ときどき扇風機がまわつていてというのに、一方ではにぎやかなクリスマスセールだ。われわれにはトンチンカンな感じである。

伊藤ドクターは皇太子との会見、ハーゲン博士訪問などの用事をすつかり終えて二日われわれに合流した。

総領事館をはじめ、在留邦人の方々にあいさつ廻り。今西隊長の両ほおと藤平隊員の耳の黒ずんだ凍傷が苦悶のあとを如実に物語つていて、だれもがしみじみと「ずいぶん苦労されましたね」とねぎらってくれる。

ホテルでは毎晩、登高の思い出話に花が咲き、そこから発展して活潑な議論になる。アイス・ウォール突破のこと、強かつた風のこと、そしてヒマラヤというものをどの程度理解できたろうかということ、はては日本の山岳界もエベレスト遠征隊を出すべきだ、いやまだまだダメだ、などと夜のふけるのも忘れた熱中ぶりだ。

伊藤ドクターは在留邦人の家へ往診をたのまれて、毎晩のように出かけていく。そのお札にと、持込まれたブック・エンド・ホワイトの大ピンを留守の間に一同で頂戴に及ぶ。帰つてきて空のピンを眺めたドクターは大腐りだ。

さて、もう一日も早く帰国するだけだが、飛行機の座席の予約が簡単にとれそうもない。六日発のBOAC機はどうとうダメだった。

帰国は三日のびたが、その間に藤平隊員は气象台を何回も往復しては資料を交換し貴重な話をきいているし、舟橋マネージャーと渉外係の伊藤ドクターとは、関係者へのお礼状、メモ整理などと、延びただけの時間を少しも空費することなく、いよいよ出発の日を迎えた。

藤村、脇坂両隊員は船で十日出帆する。この船には六百余キロの遠征装備が積んである。

今西隊長ら五名はこの両隊員を船まで見送り、十一日午前六時、ダムダム飛行場からSAS機にのり、一路故国への帰途についた。



座談会

アンナプルナ遠征を顧みて

アンナプルナの遠征を終えた今西隊は、いま霜枯れの秋深いマルジャンディ河沿いの街道筋を一路下山旅行中である。そしてみちみち、まだ登高の疲労から完全に抜けきつていない体を柔い陽ざしに一ぱいにさらけ出し、枯草をまくらに一とき寝そべっていると、想いは自然登高のあのはげしい「闘い」に、そして話題は「闘い」の想い出、反省、批判に移っていく。

十一月のあの六〇〇メートルから七〇〇メートル台の高さで、風と寒気と氷雪に武装されたアンナプルナ第四峰にピッケルとアイゼンとロープでもつて闘い抜いた幾日間は、今もなお心のスクリーンにその一こま一こまがあざやかにクローズアップされてくるのだ。

司会 もうアンナプルナがどこにあるのやら、ちよつとわからぬくらいに遠くはなれてしまい、低くさがつてしまつたが、まだわれわれのからだのどこかに登高のしこりが残っているように感じられる。逆にいえば、われわれはいささかも悔いるところのない力一ぱいの登高をやつたということなのだ。

登頂の宿願が達せられなかつたことはなんといつても残念なことだが、そのギリギリまでつづけられた登高のなかから、われわれはそれを補つて余りある数々の貴重なものを得たと思う。

その意味で今夜は、登高はどんな模様であつたか、われわれは何を得たかななどの話から打明話など、そのほか低地旅行中の話など、二ヵ月近くにとつた遠征をふりかえつてもらい、今後のより大きな飛躍への布石となるよう、たき火のもえつきるまで縦横に話つていただきたいと思う。

ではまずアンナプルナ第四峰はどんな山だという印象をもつたか、その特徴などについて隊長から――。

今西 ヒマラヤは登高可能な山と不可能の山とはつきり区別されると思う。手がつけれそうもないと思う山は実際全くダメだ。第四峰も北面から登れるが、南面からは絶対に登れない。

舟橋 ひとりでなら、なんとか登れそうだと思う山はあつても、一つのパーティとしてヒマラヤ登高方式で登れるという山は少ない。ポーターを使用できないからであつて、ポーターの使えないような山だつたらいくら隊員ががんばつてもなんにもならない。

今西 そういう点からいつて四峰の南面も、ぼくが登高不可能と断定した大障壁をかりに登れたとし、雪線までゆけたとしても、それから上の方のルートは北面よりもずいぶんむづかしいね。結局南面からの登高はどの角

度からみても絶対ダメだ。そういう山だよ。

舟橋 それに稜線への取付きがものすごくわるい。だいたい南面から登るといふのは無理な話だ。

藤平 無理というより無暴だよ。もつともわれわれが南面をのぞいてみたからこうもいえるわけだが、いのちがいくつあつても足りやしない。

藤村 だいたい南面は三〇〇メートルから四〇〇メートルまで垂直だ。ぼくらのベース・ハウスをおいたところが二三〇〇メートル、これ以上の地点にベースをあげようと思つても到底あげられない。ところが北面は三五〇〇メートルまで部落がある。それから上の方は田畑、牧場と四〇〇メートル以上までひろがつているんだね。こんどのぼくらのベース・キャンプが四〇〇メートル、前進根拠地の第一キャンプが四九〇メートルだつたが、この高さを南面のベース・ハウスの高さと比べると大変なちがいだ。

脇坂 とにかく北面からみた四峰は写真でもみている山だが、はじめてこの眼で仰いだときはすごい尾根だと思つた。実際に登つてみて、フランス隊のエルツォグのように、六〇〇メートル台でアルプス登山のテクニクを最高度に活用しなければならなかつたのは予想外のことだつた。

舟橋 ポクポク歩いていけば登つてゆけると思つていたのに、そうではなかつたということなだろう。いきなり、想像していなかつた登り方をしなければならなかつたわけだ。

藤平 ヒマラヤ登山というものの考え方を改めなければならんよ。高所キャンプへ装備、食糧を輸送しているだけで、次第に高度がかせげる、それがヒマラヤの登高方式なんだというの考えねばならん。カンチェンジュ

ンガやアンナプルナ第一峰などでは決してゆうゆうとした登高はやつていない。

舟橋 まあ氷河のないヒマラヤといつたらおどろくだろう。四峰の氷河などチャチなもので、ないのおんな

じだ。いきなりから岩登りだからな。

藤平 取つづくところは、日本によくある岩場に雪がかぶつているところを三時間ばかりで登るんだと思えば間違いない。

舟橋 四峰の印象としては稜線の様子が写真でみてきたのとは全く違つた急峻なものだということだな。

司会 登高にあたって一番留意しなければならなかった要素といえやはり風にあつたか。

舟橋 そう。ウエスターン・ディスターバンスの一言につきるね。

伊藤 ウエスターン・ディスターバンスすなわち冬だからね。われわれは始終冬に追い廻されていたわけだ。

舟橋 こんどの計画を初めからしまいまで支配していたのは、一に冬の到来に追い廻されているということだ。すごい西風が吹く、雪が降るかも知れぬ、寒さはそれに伴って、ぐんぐんきびしくなるだろう。そうなたらもう全く手がつけられないという……。

藤平 偏西風の脅威というものを知っているつもりでいても、実際この身にぶつかってみてすごいと思つたな。

頭で感ずるところからだで感ずるところと全然ちがうね。

司会 ほかに登高を左右した要素はなかつたか。

藤平 隊員の数がもう少し必要だつたのではなからうか。

今西 あの山ではこの程度さ。ただわれわれの登高中に藤村がキャラバン旅行をやつとつたから人数が足らんように感じた面はあつたかも知れない。隊員はあれ以上何人いたつて同じことだ。

◇登高は十月中？

司会 すると結局、偏西風に心身共に悩まされたということになるが、その点から推していくとアタックの時期は一般的にいって十月中だということになるか。もつとも、こんどの場合はどんなに無理しても十月中にアタックにもつていくことはできなかったが……。

藤平 十月五日からなかごろまでの間にアタックするのがポスト・モンスーン期の登高の常識だ。

今西 そうだ。そうだ。だけど十月一ぱいならなんとかやれるよ。おそれるに足らずだ。

藤平 こんども十月中にアタック出来たら登頂は成功したと思う。

舟橋 ぼくもそう思うな。

脇坂 もう一日早かつたらやれたね。十一月二日にアタックしていたら――。

今西 一日早かつたらということは実は何の意味もない。一日早かつて成功していても単なる僥倖にすぎない。

舟橋 一日早かつたところで、頂上はものすごい様子だつたかも知れないからな。一日の差をどうこういふべき問題じゃないわけだ。

藤平 そう。大きっぱいについて十月中ならやれる。われわれの登高が十一月にかかつたことが問題なのだ。

伊藤 むしろなせ十一月になつてしまつたかということだ。そこに悲劇があるんじゃないか。ベース・キャンプを十月二十三日に出発して十一月二日に第五キャンプの建設だ。これ以上に登高を能率的に運ぶことは出来ない。だいたい十一月の登高なんていう例はヒマラヤ登山史上珍らしいことだよ。

◇登高は順調だつた

司会 ところで二十四日からはじめられた登高は、予定通りにすすめられたと思うがどうだつたか。

舟橋 順調にいつたね。ただ第二キャンプ建設から第三キャンプの建設までは一ぱん日数がかかつて五日に第二キャンプ、二十七日にそれを一四〇メートル上にあげた。それから氷壁の突破に二日間かかつて第三キャンプを設けたのは三十日だ。結局五日間かかつているが、その翌三十一日には第四キャンプへの路つけをやつているから行動としては申し分のないスピードだつたといえる。しかも第三キャンプを建設しようとするまでの間に、藤村隊の下廻りの荷物が到着しているというわけで、登高は順調だつたということがいえる。ただベース・キャンプでわれわれはまる一日休養した。

今西 あれは必要最少限の休養だつた。ベース・キャンプについたのが二十日、第一キャンプにあがつたのが二十三日だから決しておそくない。

舟橋 第一キャンプから第二キャンプ建設まで二日かかつている。

今西 第二キャンプを五六〇メートルから五七四〇メートルまで上にあげたから、その分を含めると第二キャンプの整備まで四日かかつている。このなかの一日が惜しいと思う。

舟橋 それもそうだが、あの場合いくら早く高所キャンプを建設していつても、藤村隊が着くべきときに着かない限り、なんとも処置なしの態だつた。

今西 第二キャンプを上にあげたのは氷壁までの距離が近くなるということと、上方にさらに三カ所のキャンプを建設しなければならぬことというのが理由になつていふ。一四〇メートルあげたその差は大きかつた。その後の登高がずいぶんスピードアップされた。

舟橋 第二キャンプを上にあげようという隊長の判断は適切だつたな。

今西 もつと上げたかつたが遠慮した方だ。しかし結局あの場所よかつた。

舟橋 第一キャンプと第二キャンプの間の固定ロープがうまくしまつて、荷上げのポーターの往復の時間が一日一日短縮されていったことも第二キャンプを上げた理由の一つだ。

◇藤村隊の到着と登高

舟橋 もちろん結果からみてのことだが、高所ルートの開拓と藤村隊の到着とがびつたりうまくいって大助かりだった。

藤平 今日こそはと思つて連日待つてもなかなか来ない。登高に間に合うように来なきゃならんしたら、今日しかないぞといつていたその日ついたんだ。一日おくれたらもう間にあわなかつただろう。

舟橋 藤村隊の到着までに装備・食糧の荷は第一キャンプから第二キャンプにほとんどあがつてしまつた。さあこのあとになにをあげようかと思案しているちようどその時に、藤村があつて来たわけだ。その間の呼吸が実にうまくいって、ベース・キャンプから第一・第二キャンプまでの動脈がとたんにいきいきと脈を打ち始めた恰好なんだ。それから第三・第四キャンプがググッとびていった。

脇坂 藤村君のもつて来た荷は翌日から毎日どん／＼あがつてきていたね。

舟橋 だからこそ第三キャンプは二日間であがつてしまつたし、あがつたときは、もう一つ先の第四キャンプへの路づけができていたわけだ。

藤平 実際大したスピードだつたよ。

◇登高中の心境の変化

司会 登高は予想よりむずかしかつたか。

藤平 想像していたよりむずかしかつたな。しかし第一キャンプで仰いでみた感じと実際に登つてみた結果とを比べるとそうでもなかつた。第一キャンプでみた時はずいぶんと急峻で悪場が多くて、ルートが長いという感じだつた。

舟橋 ベース・キャンプや第一キャンプから双眼鏡でながめたときの印象では、ひどいところだということだつたが、実際にとつて見るとだんだん登り易くなつてきた。登っているうちに気持が變つてくるのだな。

今西 そうもいえるが、気持ちよなくてファイトの盛り上りだよ。

◇難関アイス・ウォールの突破

司会 一ばんの難関とみられるアイス・ウォール（氷壁）の突破について。

今西 あそこはほとんど陽が当たらないのでピッケルをふるうにしても大変なアルバイトだ。朝八時ごろから照り始めて十時にはもうかげり始める。第二キャンプからあがつて来て、ウォールにとりつくのが九時半ごろだから、ずつと日陰での仕事ということになる。温度をはかつてみたら十時で零下八度だつた。

藤平 第一目の二十八日は風に吹かれているから体感温度はもつと下つているはずだ。

舟橋 ウォールの下にいと足がチンチンしてきたよ。ともかくあそこの突破は一つのキーポイントであつたな。

今西 アイス・ウォールはオーバーハングになつていたので、カッティングして登れるようにしたんだ。だから二日間もかかるわけだ。

舟橋 よほどうまくカッティングしないと、からだか宙に放り出されるんだからむずかしいやね。だいたいウォールの取付きは隊長がひらき、トラバースのところはシェルパのダ・ナムギャル、フィックス・ロープをとりつけたのもナムギャルがあつた。彼はずいぶん積極的に活躍したね。

今西 私がやつている間、下で伊藤に確保してもらつたが呼吸が実にピッタリ合つて非常にやりやすかつた。

藤平 ぼくはナムギャルを確保したが、だいいち言葉が通じないから呼吸が合わん。もともと安全第一主義のシェルパの動き方と、最新の技術を生かそうとするわれわれの動き方とは違つているんだよ。苦労したな。シェルパたちのアイス・テクニクはカッティングオンリーだ。いわゆるバケツをほつていく安全第一の行き方で、常に下りのことを考え、輸送のことを頭に入れてピッケルを使つているようだな。

舟橋 ウォールは結局荷物をついだままで登ることは出来なかつた。ロープで吊上げるのが一番安全だつた。吊上げのときの隊長の「ヨイトマケ」の音頭はうまかつたな。堂に入つてた。おかげです／＼と荷はあがつてしまつた。

今西 あのウォールがね、切り開いてから二目目にパシッといやな音がしたんだ。こりや大変だというわけで古いフィックスの支点の上にさらにピッケルをビレイに打込んだ。

舟橋 その話を聞いたときはがけ全体がくずれような気がしたね。

司会 アイス・ウォールから上の方はどうだったか。

脇坂 ウォールの上に第三キャンプをはったわけだが、そこを出て左の方へ巻いて登るところは大したことはなかった。氷河がかかっていたけれどもクレバスは小さいし、シェルパも「いい氷河だ」といつていたように問題なく登れた。

舟橋 あまり簡単に登れたのでこれでいいのかと思つたくらいだ。あそこへ出るまでが一苦勞だと思つていたアイス・キャンプへスポッと出てしまつたんだから――。

脇坂 風は強かつたね。

舟橋 考えてみれば風が強まつたのは実にあの時からだつたな。あの時はまいつたな。両手を横にひろげるとトツと前に追いやられて行くんだから。あの日は疲れた。動く気がしなかつたもの。

今西 そりや君は第一キャンプから第四キャンプまでトントンとあがつていつたからだよ。疲れの出るのは当然だ。

舟橋 藤平だつて一日おいて第二キャンプから第五キャンプまでエスカレーターのように登つていつてるのにな。

藤平 だから僕もずいぶん疲れてネをあげている。

今西 考えてみるとみな適当な日をつかんでそれぞれ一日か二日休養をとつている。ただ脇坂だけはとうとうその日がなかつたな。すまん。すまん。

藤平 実際一日か二日休養をとらなきゃ動けたものでないよ。

◇不気味なクレバス

司会 それからあの登高はどうだったか。

舟橋 スノー・ドームにとつづく傾斜はものすごく急だ。脇坂があそこで吊下げられてさかさになつたのも無理はない。

脇坂 固定ロープをとりつけた支点のところから広い雪の鞍部までずつとスカブラ（波状雪）になつていたが、固いところや、柔いところがあつて歩きにくかつた。

今西 上は全面的に氷じやないかと予想していたが、雪は案外やわらかだつたね。

舟橋 予想していたような氷に行くわずにすんだということだ。しかしよくステップを切らされたね。けれどステップはやたらに切るものじやないよ。つかれるばかりだ。

藤平 四峰につづくメイン・リッジ（主稜）は予想よりむずかしかつた。右を巻き左を巻いていくといつた調子にはトントンとゆかなかつたものね。

それにしても尾根筋の大きなクレバスにはおどろいたな。十メートルから二十メートルもの長さのやつが二メートルくらいの口をあけて不気味な蒼水をのぞかせているんだから。幸いこのクレバスはうまく避けて通ることができたけれども、時々こわいもの見たさでね。

◇支柱をおさえていた為の凍傷

司会 第五キャンプの二日二晩の闘いでダ・ナムギャルが両手指を凍傷にやられたわけだが、どんな手袋をはめていたのか。

藤平 軍手に毛の二本指の手袋だ。毛糸の五本指をもつていたのにどうしてか使わなかつた。それに軍手が小さかつたようだな。そういう手袋をはめて例の風に吹き破られつつあるテントの右の支柱を懸命におさえつづけていた。そのために凍傷にかかつたようだ。彼とぼくと交代でおさえていたのだが、ぼくも右手指をやられた。

今西 ぼくは五本指、三本指、二本指の三枚の手袋をはめて左の支柱をおさえていた。凍傷には全然大丈夫だつた。

◇第五キャンプのテントと風

藤平 テントごとわれわれが吹き飛ばされてはたまらないというので支柱をおさえていたんだ。

今西 テントが破れはじめた午前一時半（四日）から午前十時までの間、三人とも何とかして歩こうと時々立上つてみようとするのだが、とても立てない。テントの風上の方の半分以上破れたテントのすみっこに三人ならんで風の静まるのをずつと待つていたわけだ。

藤平 チャックがゆるかったので風のためにはずれてしまつて、バタバタするたびにパシツとほおをなぐられたこともしばしばだつた。それにしてもテントの布地が風にあんなにあつさり吹きちぎられるものだとは思わなかつたなあ。なんにも残らないんだから。残つたのはシートだけだ。

司会 支柱は倒れなかつたのか。

藤平 支柱はフィックス・ロープを渡してピッケルで固くとめてあつたから倒れるはずがなかつたが、あまり強くしぼりすぎたため、かえつて破れやすかつたのかもしれない。

今西 あんなにひどいなかでも、時々うつらうつらしたね。

藤平 隊長にゆり起されたとき、とつさに何ごとがおきたかよく判らなかつた。

今西 しかし七一〇メートルの高さにもわりあい元気でいられるものだね。空気のうすいことがあまり感じられない。ちよつとだるく感じても動き出すとなんでもなくなる。安眠もできる。藤平にしる、ダ・ナムギヤルにしる起されるまではテントが破れていてもグーグー眠っているくらいなもの。

司会 三日の日はどうしてすごしたか。

今西 一日中、風でバタバタするテントのなかで寝ていただけだ。今日一日待つて、あしたの様子をみようというわけだね。

◇テントがもし破れなかつたら？

司会 第五キャンプのテントは大きすぎたということはなかつたのか。

今西 三人用を張つたのだが大きすぎたかも知れない。失敗だつたと思う。二人用テントを二つ張つて、三人用は第四キャンプにおいた方がよかつた。

舟橋 二人用テントだと破れてはいなかつたな。

今西 しかしね。もし特二人用のテントを使つていて、それが破れなかつたらどうしたろうかと考えるのだが、三人ともずつとがんばつていたかもしれない。

舟橋 サーダーのガルツェンが四日第四キャンプからひとりおりに来て、テントが破れたからみんなおりに来るだろうといい残してトットと下へおりにいったが、なんのことだろうと初めはいぶかつたものだ。

今西 さつきも触れた事だが、第五キャンプをもつと上の方にあげたかつたのだが、実際に上にあげていたらわ

れわれ三人はどうなつていたかわからないなあ。

司会 高所では思考力とか判断力がおかしくなるときいていたが……。

今西 七〇〇メートル台になると思考力が若干減るような気がするね。いろいろやつてみたいこと、調べたいことがあるんだが面倒くさいというのか、やる気がしないというか、あとになつて「しまった！」と思うんだ。

脇坂 これは一つの夢物語なんだが、第四キャンプで風に倒されたテントのなかで寝ていると、ガルツェンがこちらへ来いというのでシェルパのいる二人用のテントにいった。そこにはシェルパが四人もうずくまつていて、ぼくが入つただけで息がつまりそうな有様だつたが、ぼくは非常に疲れていたのでシェルパをおしつけて寝込んでしまつたらしい。そして夢を見た。ぼく一人で四峰に向つてすごい快調で進んでいくのだ。どんどん登つていつて、遂に頂上に立つて有頂天になつていとサーダーにゆり起された。「ここはどこだ」と、まだ夢うつつのなかで聞くと「第四だ」という返事だ。やつぱり登つたのか。という気持と、一体ほんとなのかという気持と、ごつちやになつて「第四峰」と「第四キャンプ」とがどうしても区別できない。思考力の減退の一例と思う。

舟橋 夢ならばぼくも昨日だつたか、まだ第三キャンプでひとりでがんばつているんだな。目がさめて見ると静かなんだ。それからテントのそとへ出てみて雪がないんでハッとわれに返つた始末だ。どうもいけねえな。

◇雪男の足跡があつた？

司会 ほかに各キャンプでのこぼれ話など。

舟橋 食糧はすいぶんあまつていたようだつたな。食えないものが多かつたと云うのがその理由の一つらしいが――。

今西 第五キャンプに居る間は風のことさえ除いたら、むしろ気がらくだつたな。その分だけ第四キャンプや第三キャンプでサポートしている隊員に負担がかかつたというわけだが――。

第五キャンプから第四キャンプまでおりに来たとき、脇坂がここには食糧がないというので、それじやここにどまつても仕様がなないというので、ぼくだけ第三キャンプまでくまつてしまつたが、実はテントの外にたくさん蓄積されてあつたんだな。

脇坂 ぼく自身疲れていて、あまりなんにも食つていなかつたのでテントの外に食糧がおいてあることを全く知

らなかつた。だらしな話だけだ……。

舟橋 テント地としては第三キャンプの場所は一ばん危なかつた。上からチャリーンと鋭い金属性の音をたてて、一かかえほどもあるような雪片がテントまで落ちてくるんだ。へたするとテントがつぶされるといふわけだ。あれ以来気持悪かつたよ。口には出していわなかつたが——。

脇坂 第三キャンプから第四キャンプへ行くときにね。グンディが真剣な顔付でイエティ(雪男)の足跡があるというんだ。よくみると丸くなつてくぼんだ形をしたのが十メートルばかりつづいている。「おい、おい、ほんとかい」てなわけでギョッとしかけたところへサダーが「ノイエティ」といつてくれたのでホッとしたが、よくみると風のために自然にできたくぼみらしいんだ。

藤村 第二キャンプで風にバタバタあおられながら寝ていると、突風がきてまくれて果物のカンヅメの入った箱がドカンとテントまで吹落されてきた。畜生め、一つ喰つてやれと思つたがカン切りがない。バカバカしかつたなあ。それからずつと風に吹きまわられてるうちに眠つてしまつた。

◇高度順化はすでにできていた

司会 いわゆるアクリマティゼーション(高度順化)はヒマラヤ登山の重要な要素の一つとして、やかましくいわれているが、この点はどうかだつたか。

舟橋 南側から北側にまわるときめ、めいめいが重い荷を負つて五一四〇メートルのナムン・パンジャンを越えたということが高度順化に非常に役立つているね。

伊藤 アクリマティゼーションは、医学的にみても、まだはつきり定義づけられていない非常にむずかしい問題なので結論的なことはいえないが、ともかく高度の影響をうけて下のキャンプに一時休養のため下らなければならぬということが一度もなかつたのは、やはりナムン・パンジャン越えのおかげでアクリマティゼーションができたためらしい。

今西 第一キャンプから第五キャンプまでがあつても高山病に悩んだことが一度もなかつた。

舟橋 アクリマティゼーションも兼ねてやれるじやないかと、窮余の一策としてナムン・パンジャンを越えた目的は完全に達せられたといえる。しかもそれ以外に、あれだけの苦しみをのりこえて越してきたのだというフアイトの盛り上がりがよかつた。

伊藤 実際アクリマティゼーションはむずかしい問題なのだが、これだけは医学的にみても間違いないな。五〇〇メートルの第一キャンプではみんながピンシヤンしていた。ということは客観的にみても、アクリマティゼーションはすでにできていたのだということがはつきり判るのだ。

◇南は湿潤・北は乾燥

司会 ポスト・モンスーン期のアンナプルナ又はヒマラヤの気象について観察の結果をお話し願いたい。

今西 まず南面についてだが、南側に入つている間、午前十時になるともう全山雲におおわれてしまつて全く処置なしといった状態が毎日つづいた。

伊藤 あの雲にはまいったな。とにかく九時をすぎると、マディ・コーラのガスがぐんぐん上昇してきて、だいたいな偵察ができなくなつてしまふのだから——。

藤平 われわれが南面を偵察したのは十月はじめてしよう。あの時期はまだモンスーンが明けていなかった。

今西 いや、そんなことはない。山の上からでも、第四キャンプから南面をみたときはポカラ方面は一面の雲海だつた。ともかく南面と北面では気象状態にかなりの違いがある。モンスーンにかかわりなくね。要するにアンナプルナの南面は特殊な気象圏をなしているのではないかと思う。

舟橋 山のふもとの土地自体の乾燥度が違つている。南面は湿度が多いんだよ。あのうつそうたるジャングルや、エゲツない山ひるがうようよしていることがその証拠だよ。

今西 それはたしかにいえるな。なにしろインド平原の果てに八〇〇〇メートルのアンナプルナ連峰が突立つているのだから、南からの湿潤な風は一切アンナプルナでさえぎられるわけだ。

伊藤 そういう地理的条件に特殊なものがあるわけなんだな。

今西 とにかく南面は雲の多いところだ。アツという間もないな。

舟橋 なにしる南より北がいいよ。日照時間が短かつたつて北がはるかによい。

◇北側は気象上の盲点

司会 それじゃ北側はどのようによかつたのか。

舟橋 第二キャンプから上にあがるとよく観察出来るのだが、マルシャンディ河の上空に毎日雲海がかかっていたが、その雲は一定の地点から上流の方には張出して来ないんだ。つまりアンナプルナの北側までは雲があがってこない。水蒸気があがってこないということなんだが、毎日ながめていておもしろい現象だと思つたよ。

今西 ところがその雲海だね。二日の夜、(頂上攻撃予定の前日)ぐんぐんマルシャンディ沿いにあがってきて、アンナプルナまではり出してきたからね。あれははじめての現象だつた。翌日は例の風だつた。

藤平 この点はよく検討してみたいと思つている。興味のあるテーマだ。

今西 私は思うのだが、ヒマラヤの気象は河によつて区分されるのではないか。

大きな河にとりまかれていた山群はそれぞれ独自の気象圏をもっているよ。

藤平 それはいえるんじゃないかと思う。モンズンだつて河に沿つてやつてくる。しかも河によつて、やつてくる時期がちがつている。マルシャンディもそうだが、ただこの河はトンジェという部落を境にして下流は南に流れているが上流は西から東に流れているから、モンズンがこの河にそつて下流からあがつてくる場合は、トンジェからマルシャンディをはずれて支流に入つてしまふんだね。西の方へはまがつていかぬわけだ。だからアンナプルナの北側にはモンズンはやつてこないということになる。いわば北面は気象上の盲点みたいなところなんだよ。

舟橋 卓説だね。そういえば北側の街道筋の黄塵万丈といったホコリにはいささかまいった。ものすごく乾燥しているんだな。

今西 それから三峰と四峰とのキレットみたいなどころから南面の雲がどんどん流れこんできていたね。最初は量も少しいし気にならなかつたが、あとにはずいぶん流れてきて、そのために第一キャンプが上がるようになった。

伊藤 いろんな面白い現象をみて、ヒマラヤの気象の一端がうかがえたようだつた。

脇坂 ウェスターン・ディスターバンスもこのはだで直接経験したしね。

舟橋 四日の夕方、全山ガスにまかれていた雪がふつてきた時はギクツとしたな。つもり方が早かつた。

◇装備はなかなかよかつた

司会 装備類の使用の結果はどうであつたか。

藤平 全般的に成功だつたといつてよいのではないか。

今西 いろんな資料や経験に基いて勉強し、改良を加えた結果は概ね良好であつたといえる。

脇坂 登高用装備の布やロープ類はすべて東洋レーヨンのアミラン(ナイロン)を材料にして作つたが、軽くて強くて非常によかつた。とくにロープは使いやすかつた。

藤平 羽毛服、羽毛ズボンやオーバーシューズもよかつた。

脇坂 スリーピング・バッグ(寝袋)はとくにスペースを大きくとり、重量を犠牲にして羽毛をとくに大量につめこみ、全装備を着込んだままでくぐり込めるように作つたのだが、寒さは全く感ぜず極めて良好だつた。エアーマットもスペースを大きくとり、二重になつている点よかつたね。二重にしたのはイギリス隊の例になつたのだ。

◇二人用テントは実用的でない

司会 テントはどうだつたか。

脇坂 布地は重量を少くするため、少々薄くしすぎたきらいがある。それからアタック用に特二人用のテントを用意しておいたが小さすぎて実用的でなかつた。

舟橋 小さくて窮屈だし、それに炊事が出来ない。小さいからといつても、三人用テントとは僅か三キロしか違わぬ。

脇坂 こんどのテントは木綿糸でぬいつけてあるのだが、これは非常に弱い。木綿糸でナイロンをぬうことによつて、ナイロンの組織がこわされてしまうからだ。やはりナイロンはナイロン糸でぬうべきだつた。

今西 高所用テントは縫目を二重にすべきだね。

脇坂 三人用テントは実によかつた。スペースが理想的で、広すぎず狭すぎず実にピッタリだつた。

藤平 ビニール防水は極力うすくしたんだが、入口のチャックをしめると全然感しなかつたね。昨秋のエベレストのスイス隊はテントのなかを風が突抜けるといつた感じだつたらしいが、そういうことは全くなかつた。ビニール防水はわれわれの独自の着想なんだが、もう少し厚くしたつてよかつたね。

◇はきやすかつたクツ

司会 登高用のクツの調子はどうだったか。

脇坂 クツは革と革との間にウサギの皮を縫いこんだものと、羊の毛皮とカモシカの毛皮を入れたものと二種類を作ったのだが……。

今西 高所では毛皮のクツ（カモシカの毛皮の入ったもの）の方がよかつたと思う。

藤平 あのクツは爪先の部分をひろげてあつたし、上の方に若干をつけていたのは、はきやすくてよかつたな。

爪先がしめつけられるような感じがなかつたし、足指を動かして凍傷を防ぐうえからいつても、これはなかなかよい着想だった。

今西 そのクツに羽毛のオーバーシューズを第三キャンプから使つたが調子はよかつたね。

藤平 それに軽かつたのもよかつた。

二キロだ。

◇手袋にはひもを

司会 手袋とクツ下はどうだったか。

脇坂 オーバー手袋は大きすぎて仕様なかつた。途中で抜けたたりしてね。

藤平 ピッケルをしっかりと握れなかつた。

舟橋 手袋にはひもをつけて首から下げておくべきだな。風に飛ばされたり落ちたりしたら一ぺんに凍傷だ。シエルパは必ずつけていたよ。

司会 手袋が凍るようなことはなかつたか。

藤平 第五キャンプでもちつとも凍らなかつた。

今西 クツ下は三種類あつたが、大・中・小とサイズをかえて作つてあつたのはよかつた。厚さも変えてあつた。

さきのマナスル隊がクツ下で苦勞したというにがい経験にかんがみて、工夫したのがうまくいったわけだ。

◇好評だった尾西米（オニシマイ）

司会 食糧はどうだったろう。いろいろ批判もあるようだが……。

藤村 食糧計画の原則は、登山食糧は軽量主義の建前から第二キャンプまでは現地食でまかなうこととし、第三キャンプ以上はノー・クッキング制（調理しないでそのまま食べる）で重量は顧慮しないというにあつた。

ところがナムン・バンジャンを越えるために、食糧をずいぶん思い切つて削減しなければならなかつた。つらい思いをして嗜好品はほとんど削つてしまつた。

だいたい食糧計画をたてようとしても、登高計画や輸送計画が變つたりしてそのたびに大へんな苦勞をした。結局もつていつたのは第三キャンプ以上のノー・クッキングのものだけだつた。

そういう事情なので、食の面ではかなり窮屈な思いをしのももらわねばならなかつた。

舟橋 主食では尾西米（註2）がうまくつたな。

藤村 主食は尾西米・ビスケット・クラッカーだが、尾西米は非常に調子よく、シンが入るなどの高所の影響をうけることが全くなかつた。

舟橋 現地米はよほど念を入れていたらしいが、やはりシンが入つた。

◇「食べられる」登山食糧を

藤村 そこで大事なことは結論めくけれども、一口にヒマラヤ登山食糧というが、われわれは日本人に適した登山食糧を設計し、実現していくべきだということだ。

伊藤 事実マナスル隊の経験と合せると、もうそろそろそういった食糧が出来てもいいころじゃないかな。

藤村 一般的に食糧は燃料の重量・調理の時間などのロスが伴うのは当然だが、ヒマラヤでは何よりもまず食べることが出来る食糧というのが先決でなければならぬと思う。食欲をそそらない、食べる気がしないような食糧はどんなに簡便なものであつてもゼロにひとしい。燃料をくつても時間がかかつても食べるものを、というのを考えてヒマラヤ登山食糧を実現すべきだ。

藤平 非常に大事なことだな。これまでの食糧という、できるだけロスを少くしよう、その方が合理的だといふんで無理な設計をしたりして、かえつて非合理的な食糧を作つてしまつていたんだ。

舟橋 燃料はお茶をわかすだけに使うという考え方は修正すべきだ。

今西 食べるものを多量に、しかもできるだけヴァラエティをつけて食わすべきだな。

藤村 肉類はすべてノー・クッキングの建前でヴァラエティをつけて、いろんなカンヅメを作つてみたんだが、

カンの匂いが鼻について食べにくかった。

肉類は今後すべて、ボイルした現地肉をテントと一しよに高所にあげるといつたシステムをとる方がよいと思う。

舟橋 こんども事実第三キャンプまで羊の現地肉があがつているから。

◇果物がほしかつた

司会 嗜好品とか飲みものなんかはどうだったか。

舟橋 飲みものは一応あらゆるものをもつていった方がいい。

藤村 果物のカンヅメは重い上に、水ばかり多くて山の食糧としては水を運ぶのと同じようだというわけで、これまでもつていくことは許されないことであつたのだが、ヒマラヤではああいり重いのでも、みながあつて、という点からいって、必要欠くべからざる食糧の一つだと思ふ。

今西 第五キャンプでも果物がほしかつた。

藤村 カンヅメという三十年来の包装の形式はなんとかならんのかと思つていたが、最近出はじめた特殊樹脂の包装は若干こんど使つてみたところではなかなかよかつた。

◇高所でもかなり食える

今西 第四・第五キャンプでも、やはり下と同じように尾西米に肉のカンヅメをまぜたものが出たが平常の半量食えた。藤平もそうだった。つけ物がほしいと思つたなあ。

舟橋 半量といえば、内地でなら普通量ですよ。

伊藤 肉が食えないというのは、高所での肝臓機能の沈衰と若干関係があるのでなからうか。

◇輸送も苦勞した

司会 輸送の仕事は低地旅行でも登高でも、一ばん大事な仕事であるわりに地味だが、どうであつたか。

脇坂 第三キャンプの下までポーターを七人も荷上げに使うことが出来たのは大助かりだった。

舟橋 荷上げがスムーズにすすんだのは彼等の活躍のおかげだった。

司会 南面から北側に廻ろうという時の輸送は大変だったと思うが……。

舟橋 あの時はポーターの集まりが予定通りいく場合、わるい場合、中間の場合と、三種類のこまかい輸送計画をたてざるを得なかつた。結果的には予定通りのポーターが集つたので万事都合よくいつたわけだ。

ところが、こんどはナムン・バンジャンの下には雪があるからこれ以上すすめないとこねだした。そうなつては計画が狂つてくるので日当をふやしてバンジャンの直下のところまで荷を運ばせたわけだ。

今西 それで非常に助かつた。とにかく輸送には苦勞したね。船荷がおくられて二隊に分れて出発したり、収穫時のお祭りでもポーターが集まらなかつたり、藤村がキャラバンを編成したりなど、ずいぶん苦勞させられた。

舟橋 あのナムン・バンジャンを越えてみんなヘトヘトに疲れていた時、下から一日早くチベタン・ポーターが元気なかけ声をかけながらあがつて来た時はうれしかつた。いろんな食糧をもつてね。「コケッコ」をきいた時は腹にグツときたよ。

今西 トラベル全般としてはいろんな支障があつたが、ディリーやガルツェンの努力で無事輸送が出来た。とにかくこんどは終始ゴタ／＼していた。とくにナムン・バンジャン越えの苦勞は非常なものだった。

舟橋 藤村がポカラでお祭りのために、三日間足留めをくらつてヤキモキしながら、シエルパひとりもないのに三十六人のポーターをつれてよくわれわれを追つてきた。ちよつとやそつとではできない芸当だよ。普通のトラベルとは違う。

藤村 実際ポカラでの三日間はいらいらした。歩いているときもものすごくノロノロ感じて、ポーターをどなり散らしたことさえあつた。

◇酸素は必要ない

司会 酸素吸入器について何か――。

伊藤 七五〇メートル級のヒマラヤなら酸素は要らぬと思う。

今西 大体の見当では四峰の山なら酸素吸入器は不必要、八〇〇〇メートル級のヒマラヤとなると必要だという想定だ。医療用ということも含めて。

伊藤 吸入器は川崎明石工場で作ったものだが、第二キャンプでテストしてみたところでは性能は充分發揮していた。しかし第三キャンプまで荷上げして、六時間分の酸素を用意していたのだが、それから上へはあげなかつたわけだ。

しかしこの吸入器も相当重要な部分で改良すべき余地のあることを認めているので、今後大きい山をやるパ―ティには改善したものをまたせてやりたい。

舟橋 しかしあれを負うと、ほかの荷を負う余地がなくなるな。

◇みな健康であつた

司会 隊員の健康はどうだつたか。

伊藤 お互い平常から一しよに山へ登つていた連中ばかりなので、隊のドクターとしても隊員の健康は予めよく知つていたのは幸いだつた。おかげで薬品などもムダ使いせずに済んだ。

大抵の遠征隊なら、一人位は病氣をしてベース・キャンプに寝ていることがあるものだが、こんどは大きな病氣をして、隊の行動に支障を来すという者が一人もなかつたことは、隊としては上々の部類に属することと思う。各自が旅行中節制して健康には留意していた。

今西 大ていものは持病に悩まされるものだが、事前に防いで自重してやつていたね。

舟橋 隊自体としては忙しかつたが、一日々々を分けてとりあげてみると、めいめいはそんなに無理してないんじゃないか。

第二キャンプでみなと話し合つたときも、お互い無理せず休みたい時は休もうじやないかということだつたし、それぞれ適当な時をつかんで休養している。

藤村 ディーリーがベース・キャンプから第一キャンプにあがつてきたら、すごい下痢にやられてね。またベース・キャンプにおりたが、どうも赤痢らしいんだ。ドクターは高所キャンプに上つているし、登高が最後の段階にきているときでもあつて、どうしてよいか迷つたが、結局ぼくが独断でベース・キャンプにおりてみた。幸い経過はよくて、三・四日でなおつたが……。

今西 高所では下痢をするよく聞かされてきたんだが、そんなことは全くなかつたね。

伊藤 こんどは高所食糧と考へ合せて、パンビタミンとかポポン・エスなどの総合ビタミン剤を多量に使用した。

結果はよくて、このためかビタミン欠乏の症状はなかつた。

今西 鎮痛剤(セデス・ソポリン)はよくきいたね。だいたい、ぼくのんだ葉はみんなきいた。

◇度胸があつたポーター

司会 話題をかえて登高中のポーターのこと、シェルパのことを話してもらおう。

舟橋 七人のポーターはよくあがつたね。予想以上に高所にあがつてくれて大助かりだつた。

今西 あのアイス・ウォールを乗り越えた強いのが二人いた。

藤平 アイゼンをはいたこともないのがビッケルももたずに、ツエ一本でアイス・ウォールの下までいつたからね。第二キャンプまでは毎日、何人かが常に荷上げしていたのはよかつた。はじめはサブかシェルパがついてやつたものだが、しまいには彼等だけでロープをもつて往復していた。アイゼンも結構うまくはけるようになっていたよ。

舟橋 とにかく彼等には度胸があつたよ。りつばな度胸だつた。

藤平 しよつちゆうポーターをやつていると度胸もついてくるんだらう。

◇情熱を示したシェルパ

司会 それではシェルパについて。

伊藤 ヒマラヤン・クラブのヘンダーソン女史が自慢しているだけあつて、こんどのエベレスト・チームはなかなかよかつた。

舟橋 もりもりと底力をみせはじめたのは、ナムン・バンジャン越えの時からだつたな。

藤平 バンジャン直下にある荷を歌をうたいながら一日三回も往復して運んだものもいた。

伊藤 とにかく主従関係とか金銭関係をはなれて、仕事に情熱を示していたように思えるね。

今西 終始クライマーとして積極的に堅実に動いたのはダ・ナムギャルだつた。

彼は優秀なシェルパだよ。ほかの若いシェルパも彼には一目おいてるようだな。

舟橋 こんどのシェルパの中心となつたのはダ・ナムギャル、グンデイ、アン・ニマの若い三人で、ダワ・ト

ンダップとパサン・ダワのベテランはサポートにまわっていたようだな。このシステムはうまくいったようだ。

今西 サードのガルツェンは低地旅行中に足をねんぎして、しばらく第一キャンプで日向ぼっこしていたが、あとにはトコトコと第四キャンプまで登っていったな。

舟橋 こんどはサーブ・アンド・シェルパ・パーティといつてもよいくらいの登高だった。シェルパにずいぶんやつてもらったところもあった。

藤平 われわれはヒマラヤにはじめてのヤング・パーティだし、向うはエベレストを何回もやつているベテラン・パーティだ。

よくやつてくれたな。

舟橋 ただ彼等はサーブが動こうという意志を示さぬ限りは動かないな、当然のことなんだが……。

伊藤 それを逆にいうと、サーブも非常によく動いたという結論になる。

藤村 コックのタンドゥもすばらしいシェルパだね。毎日双眼鏡で上をみていて、今日はサーブが何人降りてくるからといって特別料理を作る。時々すばらしいものをこさえて、われわれのよるこぶ姿を遠くからみていて、会心の笑みをもたらすところなんかほおえましかつたね。

脇坂 日本人の甘いところなのか、こちらが若いせいなのか、シェルパと一しよに動いているとどうしても情が移るね。外国のサーブはシェルパには山の名前も教えてやらぬらしいが、われ／＼は片言と手まねでいるんな雑談もしたな。

伊藤 顔が似てるから自然そうなるんだよ。肌の色も同じだし。服装が同じだったらどつちがどつちだかわからないよ。

◇ヒマラヤが少しわかった

司会 アンナプルナに再び挑戦するか、それともどこかほかの山をやるとしたら、どんなところをえらぶべきか。

今西 ぼくとしては、もう一度四峰をやつてみたい。せつかく手がけてあそこまでわかつているのだから、七一

〇〇メートルから七五〇〇メートルまでの間を解決してみたい。

舟橋 ぼくはもつと大きな山をやるべきだと思ふ。

伊藤 とにかくもう一度、われわれの手でヒマラヤへ入らねばならぬということははっきりいえる。

藤平 こんどの遠征ではヒマラヤというものが、ほんのすこしわかつたような気がするという段階だからな。いまはそれだけのことしかいえないんじゃないか。

◇むだなものがあつた

司会 こんどの遠征を通じて隊として得た教訓をお話し願いたい。

舟橋 食糧・装備を通じて、われわれの考え方にはまだムダがあつた。そのムダをはぶく余地があることを発見したということだな。

藤平 ヒマラヤにはじめてだから、どうしてもそうなつたんだが、この次からはほんとに軽量主義の遠征ができると思ふ。

◇荒天がつづいたらどうなつたか？

藤村 第五キャンプがあと二日か三日風に吹き荒されていたらどうなつていたらうか。救援にも行けなかつたのではないかということを考えてみると、われわれのやつた登高方式に反省すべき点があるのではないか。というのは、われわれの観念ではエベレスト登高方式がヒマラヤ登山のオーソドックスな方式だった。ところがアンナプルナ第一峰をやつたエルツォーグが、はじめてヒマラヤに入つてあの強引極まる登り方をして、降りるときはああいう破局にあつている。なぜあんな登り方をしたかというと、ヒマラヤにはじめての彼はヒマラヤのおそろしさを知らなかつたからだ。

われわれの場合を考えてみると、知らず知らずのうちにそういうエルツォーグ方式に似た登高をやつていたのでないか、そのように思われる。というのはぼくらもヒマラヤを知らなかつたからでないか。

舟橋 こんどのわれわれの登高はエルツォーグ的な方式と、オーソドックスな方式との中間をいつていると、いへばいえないかと思う。これはわれわれをとりまいていた客観情勢からいつて、やむをえないことだった。そこでぼくが一ばん心配したのは第五キャンプの退路が断たれないかということ、補給をつづけられるだろうかということだったが、これはやれると信じていた。あのときはまだ一週間は補給できる余裕があつ

たし、どんどん補給をつづけるつもりでいた。

もつとも下降の仕方は、若干エルツォーグ的でないでもなかつたが、あんなにでたらめではなかつた。

今西 こんど風のために引き下つてきたぼくの眼からすると、エルツォーグがヒマラヤの怒りにあつて下降するとき、果してどんな状態のなかに彼自身おかれていたかがよくわかるような気がする。

藤平 みんなまだ第一キャンプにいるとき、いろいろ登高のことを話し合ったが、あの子のぼくの感じは非常なあせりがみえていたということだつた。「とにかくやつちやうか」「行きやなんとかなる」といつたふうの、なにか僥倖をあてにするようなことを誰かがいつたときは実はヒヤッとしたよ。そんな登り方をして一体あとをどうするんだと、ぼくは直感的に退路のことを考えたよ。

伊藤 エルツォーグのことがいわれているが、全員を無事に収容しているし、登高方式も彼の方式に似たところがあるようにも思われない。

藤平 登高方式とよくいわれているが、なにも固定したものがあるわけでない。山によつて方式もちがつてくる。

舟橋 藤村の提起した疑問は大いに議論の対象とすべき、だいたい点なのだが、これはむずかしい根本問題で早急に結論はでない。

今西 第五キャンプで、もし風に吹かれずに、頂上までいったとしたら果してどうだつたか、もつとひどい目にあつていたのではないか、退路を断たれはしなかつたかと思う。

舟橋 第三キャンプから第四キャンプまではどんなにしても行けるが、それからは無理したらだめだ。しかし退路を断たれたような場合、果して安全に救出できたかどうかは疑問だなあ。

◇再挙はできなかつた

司会 再挙は考えたか。

舟橋 それは考えたし、風がやんで静かになつた日、第三キャンプで議論もしたが、結論はでなかつた。もつとも再挙をはかるうということになつても、実際問題としてできなかつただろう。

藤平 たとえ風が吹かなくてもやれなかつたよ。凍傷や疲労やでフルに動ける隊員がいなし、サポートする余力もなかつたのだから……。

今西 再挙ということは考えられなかつた。

◇ヒマラヤを知らなかつた

舟橋 われわれはヒマラヤを知らないが故に、いろんな気のつかない危険をおかしていたといえるな。幸いに好天のおかげでその危険が直接ふりかかることはなかつたからよいようなもの、なすべきことはオーソドックスにちやんとやつておくべきだ。

例えば標識の旗なんかそうさ。雪が降つてガスが巻くと、もうルートがわからなくなる。天候が悪かつたら旗が立っていないなかつたばかりにどんな危険な事態がおこるかわからない。面倒くさがつてしなかつたこともあるし、知らなくてやらなかつたこともある。こんどは結局好天に甘えすぎたということがいえるのだが、ヒマラヤを知らなかつたということが一ばん大きい。漠然としてはいるが、これが最大の教訓だろう。

舟橋 それから山に水河がなかつたというのは大きなロスだつたな。水河の上を歩きたかつたよ。

伊藤 ロンブクとか、バルトロとかいつた水河をね。水河がないということで特殊な山だつたといえる。

藤平 型通りの山でなかつたということだ。

◇ヒマラヤ入門の場所だつた

司会 それではポツポツ結論に入りたい。

こんどの遠征全般を通じて各自どんな感想をもつていられるか。

脇坂 ヒマラヤで果して自分はどれだけ歩き、どこまで登れるか、高所でどんなものが食べられるかということがよくわかつた。

舟橋 一回ぐらいではヒマラヤは全然わからんよ。

藤村 ぼくは輸送隊となつて下を廻つてきたのだが、いろんな面でいい勉強ができた。山自体も手がつけられぬというひどい山でなく、かといつて岩溝とかアイス・ウォールなどの悪場もあつて、ヒマラヤには初めてのわれわれにとつては絶好のヒマラヤ入門の場所だつたと思う。

◇たのしかつた遠征

伊藤 山そのものはつらかったが、もともと内地の山を長らく一しよにやつていた連中ばかりの気心の知れ合った隊であつたわけで、予想以上に楽しい遠征だつた。一色にまとまつたチームであつたればこそ、この楽しさがあつたのだろう。

舟橋 あわただしい旅だつたが、伊藤ドクターのいうようにやはりたのしかつたことにつぎ。なかでも気持がよかつたことは計画全体としては無理な、きつい登高をやつてはいるようだが、隊員は割合いらくに動いていたように思える。それでいて計画全体は上の方へ上の方へと動いてはいたからな。

ぼくはこれは隊長のリーダーシップによるものと思つてゐる。実際われわれは隊長にひきずられていたといえる。

藤平 隊のことについてはみなが語つたとおりで同感だ。自分としてはともかく力一ぱいやつたと思う。頂上に立つたとか、どうかは別として非常に満足している。思い残すことはないといつた心境だな。こんど再びヒマラヤに入るときがあるとするれば、そのときはある程度やれる自信がついたと思う。低地旅行もまた楽しかつた。

今西 これまでしやべつたことと多少重複するかもしれないが、こんどの遠征をふり返つてみると、計画のスタートからいそがしかつた。内地にいたときから、追い廻されている感じにとりつかれていたことが一ばんの頭痛のタネだつた。そしてカルカタにきてみると船の荷物がなかなか着かない。仕方なくそこから再び二隊に分れ、追われ追われてアンナプルナにやつてきたというありさまだつた。ウカウカしていると冬がやつてくるということ、これに追われ通しだつたことは、あらゆる場合に物ごとの運びをむずかしくさせ、あわてさせ、気持をいらだたせた。

ぼくが一ばん楽しかつたのは南面のベースハウスに全隊員がそろつたときだつた。この時はじめてみんなで一しよに山に入るんだという気持がでてきた。その時の気持がピタリ合つてナムン・バンジャンを越えることもできたのだ。バンジャンの越え方はいま考えると強引きまわるもので、隊の強力なチームワークがなかつたら越えられなかつたのではないかと思う。

藤平 実際アンナプルナよりナムン・バンジャンの方がつらかつたな。

脇坂 歩いているうちにいつの間にか夜になつていて、足がグラグラして月が二つにみえたからな。

今西 ナムン・バンジャンを越え、くたくたになつた疲れをベース・キャンプまでの旅行中におおして、アンナプルナに取組んだときは、これなら自分の力でなんとかやれると思つた。はじめの間、第四キャンプまでは、ヒマラヤとしてのアンナプルナはむしろ物足りなさをすら感じたほどだつた。氷河がなかつたせいか、それと

も好天つづきのためだつたかはわからないが……。

第五キャンプで風にやられて、はじめてヒマラヤというものの実態の一部を知らされたようだつた。もし第五キャンプが風にやられなかつたら、頂上へ向つて出発して、途中でどんなことになつていたかもしれない。場合によってはエルツォグと同じような経過をたどるという事態を招いていたかも知れなかつた。

それはともかく、われわれが一たび風にやられてテントを吹き破られ、引下つたことは、なにもものにも代えられぬ、いろんな示唆をふくんでいると思う。第五キャンプで好天だつたことよりも風が吹いたということの方が、ヒマラヤに対する考え方をまとめるのに役立つたと思うし、こんごの計画をたてるうえにも非常に有効だと確信する。これが一ばんの収穫だつたと思う。多少やせがまんめくかもしれないが、いつわらないぼくの実感として、登頂に成功したというよりも、成功しなかつた方がむしろはるかに大きな経験をつんだと断言できる。

舟橋 経験の量からいえば風というやつから得た教訓は大きかつたな。

今西 要するにわれわれは未知のヒマラヤに入つて、しかもアンナプルナ南面はノックアウトをくらい、時期としては既にポスト・モンスーンも十一月に入つていたというときに、なおしつこいまでに北面でアンナプルナにくだつたわけだが、ウエスターン・ディスターバンスという奴に出くわして撃退されたわけだ。

われわれの登頂方式はさつきも議論されたようにラッシュ・タクティクだつたとはいへ、登頂を予定していたときの隊員の配置は第五キャンプに私と藤平にシェルパ一名、第四キャンプに脇坂とシェルパ三名、第三には伊藤・舟橋にシェルパ二名、第二に藤村、立平となつていて、万全を期していたのだつた。

藤村 ぼくが下廻りで急いでいたとき、スイスのハーゲン博士に出会つたが、その時彼は「十一月に山に登るなんて一体何をすつもりだ」といぶかつていたくらいだ。十一月のヒマラヤ登山というのはきいたことがないものね。

今西 伊藤・藤平・舟橋の三トリオに、若い藤村・脇坂と元氣者ぞろいだつたわれわれの隊は、非常に困難だつた登高も実に順調にすすむことが出来、チームワークのいいところを遺憾なく發揮した。そしてイギリス、ドイツ、フランスなどの隊におとらない成果をあげ得たことは私としては実にうれしかつた。不成功だつたとはいへ、実に後あじのいい遠征だつたと思う。

ヒマラヤも八〇〇〇メートルまでの山ならば、われわれのような少数人数でも充分こなせる自信がついた。もしチャンスがあればもう一度アンナプルナに行つてみたい。

ともかく日本人としてはヒマラヤには経験が少いことでもあるので、いわゆるジアイアントをいきなりからねらうよりも、むしろ登り得る可能性のある山を着実に一歩々々漸進的に登つていくべきではなからうか。これが私の総括的な結論だ。

司会 それではこれで座談会を閉じたいと思う。われわれの脳裡からは永久に消えることのないであろうこんどの遠征をふりかえつて、出るべき意見はほとんど出つくしたと思う。
いつの間にかたき火も燃えつくしてしまつた。ではどうも長時間ありがとう。
(以上)

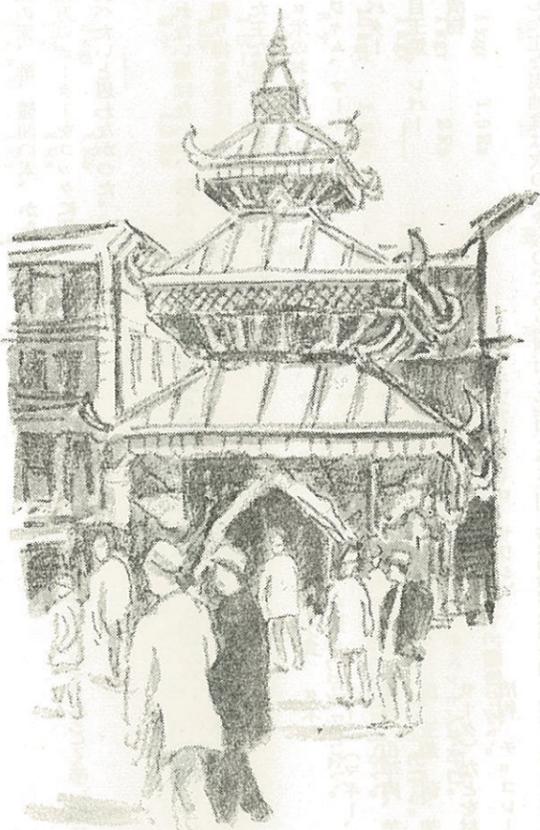
註1 ウェスターン・ディスタージョンス (Western Disturbance)

毎年十月なごころから冬季にかけてヒマラヤに吹く強烈な偏西風のことをいう。

この風が存在が確認されたのは比較的近年のことと、本来ならば北緯三十度あたりまでさがつていくべき性質のものが、ヒマラヤ山系にひつかかつているのだとされている。アジアの気象の背骨をなしているともいう。ポスト・モンスーン期のヒマラヤ登山中には、しばしばこの風に悩まされる。昨秋エベレストにいでんだスイス隊はこの風をまともに受けたため敗退したといわれる。これが吹きはじめるとヒマラヤは長い冬におおわれるわけだ。

註2 尾西米(アルプア一米)

昔の兵糧食である干飯のようなもので、これを第二次世界大戦のさい、合理的に作られるようにしたものがアルプア一米である。アルプア一米は澱粉化した米なので、水か湯を加えるだけで食べられる状態の御飯になる。一度煮沸してあるから、高山でもシンがでない。



附 録

食糧に就いて

低地旅行用食糧

中部ネパールでは、我々日本人としては殆んど現地食糧でまかなう事が出来る。時期、場所によつて一概に云えないが(第一
次マナスル隊は蔬菜がなくて困つたと聞く)我々が通つて来た中部ネパールの遠征には、今後次の如きものを準備するだけで十
分であると考へられた。

- 1 バター、チーズ、ジャム、マーマレード、ロティ(大麦粉をねつて油でいためたもの)に此等のドレッシングをつけて食べる。
- 2 ラード

現地の油のギーは、不良のものしか手に入らないところがあり、しかも高価である。

3 砂糖

- 4 紅茶 カルカッタにてリプトンが安く手に入る。

5 粉ミルク

- 6 漬物(木芽煮、福神漬、薑、のり、うに、小魚づくだに)

7 嗜好品(チョコレート、ようかん、煙草其の他)

- 8 調味料(味の素、酢、醬油の素、からし、七味、トマトケチャップ、スープの素)

輸送隊は地方のポーターをコックに使つたが、すべての食事にカレー粉と唐辛子を入れて、すごく辛い同じ味の物ばかりを作
る。味噌は食べたいと思わなかつた。

9 a 米

現地米でやれない事はないが、隊員の米だけはある程度a米の方がよいだろう。普通の米より三割軽く、ナムバンジャン越
えの如き事が起り得る事は考へねばならぬ。

我々が使つた主な献立は次の如きものである。

朝食	a米のおかゆ、ロティ	昼食	ロティ、クラッカー	夕食	a米
	ジャム、マーマレード		ジャム、マーマレード		スープ(マギー、リプトン)
	バター		バター、チーズ		鶏肉、山羊肉、羊肉、燕、大根、胡
	目玉焼、レバー		鶏肉、にぬき		瓜、玉葱、胡、苦瓜、辛菜(シライク
漬物			バナナ、パイナップル、柑橘類(スズ		サーク)などを材料にした料理
			ドラ、ネプア、ピシロ、サワシ)		漬物、チョコレート其の他の嗜好品

我々が購入した主な現地食は次の如きものである。南面と北面とは例えば馬鈴薯、塩の如く非常に値段の異なるものがある。

	北	南	南	面
米	1 kgr 1.5 Rs	"	1 Rs	奥の有無、粘性、種類が多い。
ツアンパ	1 kgr 2 Rs	"	1.5 Rs	大麦の炒粉、シュルパ、チベット人が好む。
アツタ	1 kgr	1 kgr	1.5 Rs	大麦の粉、これを油でいためてロティを作る。
馬鈴薯	10 kgr 1.5 Rs	"	5 Rs	北面は安く美味である。然し非常に小さい。
燕	8ヶ 1 Rs	"	1 Rs	天王寺の如きもの、北面でしか見られない。
大根	1本	1本	4 As	
胡椒	1ポース 5 An	"	2 An	好んで料理に入れる。
唐辛子	1lb 3 Rs	"	1 Rs	シュルパ、現地に欠かず事な出来ない。
柑橘類	8ヶ 1/2 Rs	30ヶ	1/2 Rs	種類が多く温州よりも美味、南面は大変安い。印度へ輸出する。
砂糖	"	1ザンニ	8 Rs	ザンニ=2.5 kgr
塩	2 kgr 1 Rs	"	3 Rs	
鶏	1羽 4 Rs	"	5 Rs	
卵	7~8ヶ 1 Rs	6ヶ	1 Rs	
羊	1匹 32 Rs	"	25 Rs	
山羊	1匹 21 Rs	"	21 Rs	
ギ	10lb 21 Rs	"	17 Rs	北面ではヤクの乳から作り、臭い。
ロウシュ	2合 1 Rs	"	1 Rs	} 土人酒
チャン	2合 1/4 Rs	"	1/4 Rs	

ポーターは実に粗食である。ツアンパを湯でねつて石の上に置き、唐辛子をつけて右手でつまんで食べる。そして、すべての
食事にカレー粉や唐辛子を入れ、これは到底我々には食えない代物だ。又米の粉を油でいためてドーナツの如きを食べたり、(シ
エル)押米をかじる。血はなくキャスタープシスの葉を二、三枚重ねて竹針で止めて皿を作つたり、里芋の葉を使つたりする。ヨ
ーグルト(ドホイ)を里芋の葉に包んで食べるをよく見かけた。シュルパ、チベット人はツアンパを好む。

二、登山食糧

1 登山食品

- (1) 主食 a米、クラッカー、ビスケット、スポンジ・ケーキ、かたくり粉、スパゲティ。

a米は第五キャンプでも調理しおいしく食べる事が出来た。高所では全隊員がa米と漬物を欲しがつた。クラッカーの塩味が
過ぎると、高所で食べる事が困難になる。ビスケットは昼食用に三種類用いた。五種類のスポンジ・ケーキはミルクに溶かした

り、缶のまゝ暖めて食べる。非常な食慾不振におちいつた時、かたくり粉は大変重要である。スバゲティは変化をもたすのによい主食である。此等の主食をコルタル・ペーパーに包んでカートン・ボックスにつめたが、コルタルの臭が移つていた。高所ではわずかな臭も食慾に大きく影響する。コルタル・ペーパーに包んでないカートン・ボックスのビスケットも最後まで湿る事がなかつた。

(2) ドレッシング バター、チーズ、マーマレード、ジャム。

バターは高所で料理用に使つたが、(此の時臭のする悪質の油は絶対不可) ドレッシングとしての嗜好は出なかつた。チーズは全然食慾が出なかつた。ジャム、マーマレードはすばらしい。一食七〇グラムにすべてのドレッシングを小別にしたが、高所では缶を開く事すら大変な努力である事を知つた。

(3) 乾燥蔬菜 キャベツ、玉葱。

スープに非常によく合つた。

(4) 肉類 ペミカン、コーンビーフ、ポークマカロニ、無味ポイルドチキン、同ビーフ、サラミソーセージ、鮭、サージ、うに、現地の羊、鶏肉。

肉類は主食と同様な、或はそれ以上の重要性を持つ事を知つた。食慾の出る肉類を最前線テントと共に、常に移動しなければならぬ。我々が食糧計画を立てた時一番困つたのは肉類だつた。苦心して種々な肉類を準備した。ペミカンも五種類作つた。然し結局一番よい物は第一キャンプで現地の肉をポイルして大きな塊りを高所テントへ上げたものだつた。缶詰は低地では臭気が付かないが、高所になるとわずかな臭も鼻について食べられなかつた。唯わずか鮭、サージンはアクリマティゼーションの出来ていない時にも食べられた。サラミソーセージについては、たまたま見るだけでも吐気を催す位だつた。又缶詰の加工肉はいくら調味料を変え、材料を変えても柔かく加工されておき、何等味の変化を覚えず第二キャンプですでに飽きが来た。うにと米の組み合わせは我々にとっては非常にすばらしい。シュルパはこれを食べる事が出来なかつた。

(5) 飲料 煎茶、ココア、コーヒー、紅茶、レモンパウダー、粉ミルク、煉乳。

此等のうち紅茶が一番よかつた。紅茶六、ココア三、コーヒー一、位の配分がよいだろう。ミルク類は何時何処でも食慾があつた。特に高山病にかかつた時、高所順応の出来ていない時、前述のカタクリ粉とともにコンデンスミルクがよかつた。粉ミルクは高所で臭が鼻につく。

(6) 漬物類 蕪、磯自慢、福神漬、紫漬、木芽煮、塩昆布、紅薑、梅干。

高所で米に対して一番欲しいと思つた食品は漬物類で、ポリエチレン系のフィルムに入れた(二幸パック)もので充分であつた。カキモチは一重袋では湿つたが、二重袋では完全であつた。漬物にかぎらず食品の包装が、缶詰から此等の袋へと変つて行く事は重要である。全食品中、缶詰の缶の重量の占める割合は極めて大きい。

(7) 調味料 味の素、粉醬油、スープの素、砂糖、塩、辛子、胡椒、七味、トマトケチャップ。

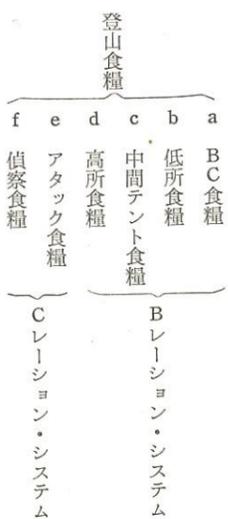
トマト・ケチャップはすばらしい。高所での砂糖の消費量は非常に多く、低地では想像する事が出来ない。

(8) 嗜好品 乾燥リンゴ、桃缶詰、枇杷、蜜柑、チョコレートバー、チョコレートかたまり、ソフトチョコレート、キャンディ、氷砂糖、ようかん。

これらのうち板チョコを溶かして煮つめて持つて行つたチョコレートの塊りが全員一致して一番好評であつた。次によかん、缶詰がよかつた。前述のコンデンスミルク同様、いつ如何なる時でも食べられたのが、果物の缶詰、特に蜜柑である。キャンディ類の低地で一旦溶けたものは、後にかたまつても変質して駄目であつた。

2 登山食糧の配分

前述の食品を種々組合せて、その食糧の使用時、使用場所によつて次の如く食糧を区分した。



ベースキャンプ(BC)では栄養のあるものをゆつくり時間をかけて薪で調理し、新鮮な現地食を多量に用いる。第一キャンプ(C)が事実上、此の部類に入つた。同様に中間テントでは、これからのキャンプではあまり食事が進まず、又栄養のとれなくなる事を考え、調理に少々時間がかかつて、ゆつくり調理して美味いものを、栄養のあるものをとれるようにする。この間にエネルギーの蓄積が望ましいからだ。これからの高所キャンプでは、すべて「ノー・クッキング」と云う事を条件にする。何故ならば、此の高さになれば沸点降下の為に、もはや十分に調理することは不可能であるから。又テントに入れば、出来るだけ労力を使わずに、又時間もあまりかけない為。かくして、副食はすべて暖めるだけで食べられるペミカンや其の他肉を入れたいく種類かの缶詰を使わざるを得ないことになる。そして、いよいよアタック・キャンプの近くなれば、今度は勿論此の「ノー・クッキング」と云う条件の他に、機動性と云う条件が大きく浮かび上つて来る。そして此等の時に起りがちな不備を起させてはならぬ。事実我々は高所テントで食糧が何人分残つているかを調べるごとく自体ものすごい労働である事を知つた。かかる意味ではあらゆる種類を一つの箱に入れて一日分の食糧をすべてまとめておかねばなるまい。かかる意味からアメリカ軍隊食をまねて一人一日一箱のレーション・システムをとり上げた。其の他に、偵察に出る時或はテントを進めて行く最前線にいて、下からの補給が不完全である時にも、此のレーション・システムを採る事が適していると考えた。レーションにしたアタック食糧を一例にあげれば、

- スプレッドケーキ 90 gr × 1包
- ビスケット 90 gr × 1包
- コーヒー 6 gr × 1包
- 米 80 gr × 1包
- 肉類缶詰 6種類のうち2缶 200 gr × 2缶
- ココア 5 gr × 1包

コンデンスミルク	100 gr × 2缶	チョコレーン	60 gr × 1包
角砂糖	70 gr × 1包	ジャム	70 gr × 1包
バター	45 gr × 1包		
ビタミン剤	1包	マチオニン剤	1包

4650 cal

Bレーション・システムは三十日人分、或は二十日人分の食糧を、夫々のテントに応じた幾種類かの材料を組合せて、一つのカートン・ボックスに入れる。此の場合、α米を例にとれば一食分一〇グラムを袋に小分けする。砂糖なら角砂糖、スープの素なら六人分一袋の小包、乾燥野菜五人分二〇グラムの小分けと云つた如く、消費量、使用量の目安がつくようにしてあつて、現在量は何食分あるかをつきり明示されるようにしてある。然しこのBレーションの計画は舟便と飛行機便に分れたり、南面から北面への時、パーティが二つに分れたりして完全な計画を押し進められなかつた事は残念であつた。登行がすんで我々が反省をした時、此のシステムをしなければならぬことがよく判つた。

以上述べたレーション・システムについて我々はシステムそのものに異存はなかつた。唯此処に問題になることは、かくの如き組合せをすることにより、食べられない無駄な食糧を上げてしまふ恐れのあることであるが、我々の失敗はその内容をあまりにもヨーロッパ的な物にしてしまつた所にあつたと思われる。次にも述べる如く、最も危急に直面した時に、病的になつた時には、やはり日本人の食欲は、日本人が伝統的に採つて来た食糧を要求する。これはやはりヒマラヤでの実際の経験を土台にして、新しい試みを機会ある毎に行いながら、内容の改善を次第に行つて日本人のヒマラヤ食糧の完成に歩一歩進み行くより方法がないのではあるまいか。

3 我々の得たヒマラヤ登山食糧の概念

食べられるものであると云うこと、これは極くあたりまえの話であるが、ヒマラヤ食糧の一番重要なキーポイントであり、第一条件になることが、今度の遠征で非常によく判つた。例えば、我々は内地の山で果物の缶詰などは、水を運ぶものであるとして、採用することが出来なかつた。此処にヒマラヤの食糧と内地の山の食糧との相異が、大きく現われて来る。高所で何時如何なる時にも食べられたのが、此の果物の缶詰なのである。或は煉乳なのである。高所では、重量を少くする為の乾燥リンゴ、粉ミルクが水を多く含んだ果物の缶詰、煉乳に置きかかざるを得なくなつて来るのである。我々は「ノー・クッキング」と云う高所食糧の条件を満たす為、七種類の肉の缶詰を設計し作つた。然し、高所(C3より)では一種独特の臭が鼻について、食欲があまり進まなかつた。この缶詰は、低地では好評であつた。一方C1で屠殺しボイルした羊、鶏の肉はすばらしくうまかつた。そしてC1の肉を最前線のテントと常に行動を一にしなければならぬ最初に上げるべき食糧だと云う考えにまで到達せざるを得なかつた。又低地旅行中チーズは皆がとりあひするばかりの好評であつたが、五八〇〇米の高さで、すでに食欲は全然なくなつていた。かくの如く我々が下界では考えられない幾多の事実にぶつたが、ともかく我々自身の経験から我々自身に食べられる食糧計画を作り上げねばならぬことがよく判つたのである。我々は内地の山で欧米的な食事になれることにとつとめ、内

地の山では一応の自信を持つていた。然し高所で頭が痛み食事が進まなくなり、病的になつて来た時、我々の食欲と云うものは、長い月日の習慣も破ることが出来ずに、どうしても日本のものを要求した。流動食であるオートミールにかわるに、「おかゆ」と紅薑を要求した。かくして我々は今までの考えを大いに反省せざるを得ない立場におかされるに至つた。そして此の食糧を如何にたくみに組み立てるか、組織化するかと云う問題が、ヒマラヤ食糧の特に重要な問題であるとの結論に到達したわけである。

種類	品目	重量(kgr)	種類	品目	重量(kgr)
主食	米	220	漬物類	ダーク	4
	クラッカ	116		パウダ	27.5
	ビスケット	50		ミルク	70
	「	23		ウシ	3
	「	22		キマ	1.5
食	スポンジケーキ	1.5	ウシ	5	
	「	1.5	ケケ	3	
	「	1.0	ニブ	3	
	「	1.0	コガ	2	
ドレッシング	ムド	12	シウ	3.5	
	ジャマ	11	ガシ	3	
	レター	33	バシ	3	
	バター	22			
野菜類	ツギ	9	菓子	チョコレート	13.5
	ベネ	3.5		チョコレート	4.5
	タケ	1		チョコレート	6.5
肉類	ニン	10	砂糖	6.5	
	カロ	11	ウカン	7	
	ソイ	11	ゴ詰	20	
	肉	21	詰詰	4.5	
	肉	20	詰詰	10	
	詰詰	3	詰詰	9	
	詰詰	21	詰詰	5	
	ケフ	2.5	味の		
	ソー	7	トケ		
	セー	22.5	砂糖		
メニ	2	塩			
飲料	茶	1	調味料	胡椒	
	茶	0.5		子味	
	茶	5		粉素	
	茶	3.5		布草	
コ	3		10,000本		

(藤村 良)

気象に就いて

ヒマラヤの登山に於て、気象は最も重要な要素であることは論をまたない。このことは今迄のヒマラヤ登山史をひもとけば直ちに判ることであろう。技術的な困難は別として、登頂の可能性を充分につかみ乍ら、激変し悪化する天候に抗し得ず敗退した例は枚挙に暇がない位である。

従つてこゝに当然起つて来るのは天気予報の正確度であろう。然し、これにはやはり過去の種々の記録や、現地における幾多の気象データが必要であることは勿論である。

我々の隊も又かゝる観測より気象係の任務としては、観測によるデータのしゅうしゅうと天気予報であつた。

予報

勿論予報は専門家でない我々の良くなしうるところではなく、局地的な観測しか行い得ない我々にとつては、カルカッタ気象台のラジオ放送のみが唯一の頼りであつた。幸にもカルカッタ気象台の台長マル博士は年来、各国の遠征隊に対して協力して来た人であり、ヒマラヤの気象に就いては特に関心を抱いていて我々の如きポスト・モンソン中に登山を行う隊が極く少いせいか、好意ある態度をもつて接して呉れ、種々のデータを提供していただき、特に「アンナプルナ地方の気象の概観」と題する一文を草して呉れた。

オールインディア・ラジオ(A. I. R.)を通じて特別放送をすることを約して頂き、我々も登山日程と予定表を提出し各高度に於ける予報をしてもらつた。ところでヒマラヤの天気予報を行う場合次の様な困難がある。

A データが少いこと、例えばヒマラヤ山脈中に一つの測候所もないことがそれである。最も近接した測候所のデータと過去の記録に依つて、類推しなければならぬ。特にチベット方面のデータ入手が殆どないことを、あげねばならない。

B 「山はそれ自体の気象を作る」と云われる如く、ヒマラヤのジャイアンツにおいては、その山の独自の地形に応じて当然天気も異なる。若し目的とする山の地形及び周囲の山の地形が明確でない場合は、予報が特に困難となる。

C 我々の場合には、特にポスト・モンソン中なるが故に資料の欠如甚しく、正確度は期し難い。

以上の如き悪条件に拘らず、カルカッタ気象台の予報は、非常に正確度を示した。このことは昨年五月末のエベレスト登頂時にも現われて居り、当時の予報のコピーを我々も貰つたが、実に正確に登頂日の天候を予報して居る。

出来得れば現地の気象状況を刻々通信すれば非常に有利であるが、我々は受信装置しかもつていながつたので、それは出来なかつた。

我々はマル博士に天気予報を依頼する際に、特にポスト・モンソンであることを考慮に入れて、風と温度に重点を置き、出来得れば四、五日先まで予報するよう依頼した。

観測

先ず器具に就いては、我々の如き軽装の際、特に途中種々計画を変更し、出来うる限り軽装備をとつた隊においては、思うよきな器具をもち得ず、全く不十分なものであつた。アネロイド気圧計三個、アースマン寒暖計、風車式風速計、磁石、アルコール寒暖計、最高最低寒暖計、これだけしか携行し得なかつた。当然自記器械はもつて行くべきであつたと考える。

観測時間及び観測種目はカルカッタ気象台と打合せて、グリニッチ標準時三時、十二時の二回に観測することにした。因みにローカル・タイムは各々八時三十分、十七時三十分である。

観測種目は、観測時の天気、観測時迄の天気、風速、風向、気圧、温度(乾球、湿球)空の状態、雲量、雪の種類、視程、地面状態、その他雪煙等の形態、方向である。

往路のキャラバン中は観測も容易であつたが、アンナプルナ第四峰登攀中の観測は実につらかつたことを思い出す。特に十七時三十分の観測は真暗になつており、アースマン寒暖計を握ると、手のひらが寒さで痛くなる位であつた。一日の登高に疲れて、皆シュラーフザックの中であたたまつている時に、吹きすさぶ風の中へ出て懐中電灯の光で読みにくい目盛を見つめる間に、身体中すつかり冷え切つてしまつたことが屢々であつた。

モンソン

六月から九月一杯にかけて印度洋上に発生した低気圧が、ヒマラヤ山脈にぶつかつて雨を降らす。これが所謂モンソンであつて、此の間中は登山に不適である。このモンソンの始まる直前約一週間と終つた直後一週間とが好天気が続く。所謂移行期と呼ばれるものであつて、昨年のエヴェレスト登頂時はこの移行期の好天を巧みにキャッチしたものである。このモンソンが何時来るかということが、プレ・モンソンの登山隊の最重要な関心事である。ポスト・モンソンにおいても、モンソンの終了が何時であるか、其の直後の好天を利用する為、矢張り最も関心をもちものである。昨年のモンソンは始まるのが例年より遅く、終了は大体例年通りでアンナプルナ地方においては、十月五日頃であつた。尤も終了直後の二、三日はモンソンの湿気が残つていて、時々小雨をもたらした。

風に就いて

モンソンが十月上旬に終つて移行期の好天が約一週間続く、そして十月中旬過ぎより突然強い西風がヒマラヤ上空をおそつて、次第に強度を増して一月頃には最高潮になり、その後徐々に衰えるが、モンソン前の移行期の好天まで吹き続ける。これがジェット・ストリームと呼ばれる強風帯であつて、ポスト・モンソン最大の強敵である。一九五二年秋エヴェレストへ挑んだスイス隊の失敗も、このジェット・ストリームに原因することは周知の通りである。此の時のジェット・ストリームの中心はエヴェレストの真上約三万米のところにあつた。

尙、カルカッタ気象台で一九五二年秋のエヴェレストに於ける等風速線図表を見せてもらつて調べた結果、十月中は三日から

五日の周期をもつて小康期間があることに気が附いた。勿論月が経るに従つて小康期間とはいつても、登高を続けうる様な風速ではなくなる。

我々の作戦としては、この小康期間を極度に利用することであつて、ラジオの予報も勿論であるが、頂稜の雪煙の形状、方向をメモすれば、或る程度の成果を期し得るものと考えられた。事実、途中ラジオの故障その他で予報を利用し得ない時は、雪煙を観測し乍ら、周期をあてはめてみたが、相当的中率を出した。時速四〇ノット(秒速二〇米)をこす強風が吹き始めたのは、十月二十六日からであつて、この時はすでに四峰に対する登高は開始されていたのであるが、我々のルートの真西に第三峰の巨体があつて西風から完全に保護されていて、殆ど風らしい風にもあわなかつた。唯四峰、二峰、三峰の頂上附近の物凄い雪煙を見て、愈々ウェスターン・ディスターバンス(ジェット・ストリームの爆発的悪化を、カルカッタ気象台ではこう呼んでいる)が始まつたことを知つたような次第であつた。十月三十一日、偵察隊が前衛峰を越えて初めて主稜の上に立つたが、此の日は非常に強い風が吹き、予報によれば六〇ノットの風速であつた。

第五キャンプが吹き破られた十一月三日夜半から十一月四日にかけては(予報によれば)時速七〇ノット(秒速三五米)の風であつた。因みに風速計は使用できなかった。

気 温

我々が印度国境を出発した時は、未だモンスーンの最中であつた。従つてネパール国内に入つて以来暫くはむせかえる様な暑気に悩まされた。

九月二十二日ノータンワでは午前八時半ですでに二十九度(以後全て摂氏)であつた。ネパールに入つてからは山又山を越えて行くので、所によつては一五〇〇米位の高度のところもあり、割合涼しかつたが、それでも二十四度前後であつた。ポカラ以後、シクリスをこえて南面のベースハウス迄も二十度を下つたことはなかつたが、十月六日の夜の観測に於て初めて十四度になつている。恰度モンスーンの終了と同時に、気温が急激に低下している。

ナムン・バンジャンを越えて北面のマルシャンディ河を遡行した時は、十月の中旬を過ぎていたが、零度に達することは珍しくなく、日中においても十度を越えることは殆どない位であつた。

第四峰の登攀については、北面を登るルートのため日照時間が非常に短く、午後二時を過ぎると陽はすでに山の彼方に沈んでしまひ、気温は急激に低下する。アースマン寒暖計は気温の低下で使用出来なくなるのを恐れて携行しなかつたが、アルコール寒暖計を使用したのが、日中では零下二十度を下ることはなく、予想したほどには寒くなかつた。

然し、主稜上に出でからは、急激に強度を増した風の為、気温こそさしたる低下は見なかつたが(零下二十度前後)体感温度

は相当低下していたと考えられる。

帰路はずつとマルシャンディ河を降りて来たが、日中は大体十五、六度前後であつて、快適な温度であつたが、ポカラに近くに従つて段々暑くなり、二十度近くなつた。

その他の気象条件

雨は当初の低地旅行中即ちノータンワよりシクリスまでの間は相当降つたが、ナムン・バンジャン越えにかゝつて以来、全然降らなかつた。

雲も前記低地旅行中は積雲系の雲が良く出ていたが、その後は殆ど雲らしい雲もなく、連日透きとおるような快晴が続いた。唯、四峰の登高中において、十一月三、四、五日の第五キャンプ設営、そして退却という時に初めて降雪が有り、約七〇〇〇米以下が濃いガスに包まれた。此の時の降雪は相当深く、第三キャンプでは約三〇センチの新雪でマルシャンディ河の主流においても降雪が有つたらしく、十一月十日ピサン部落の近辺の松林の中に日蔭の場所に、少量の残雪を見た(高度約三〇〇〇米)。

マル博士にこのことを話すと眼をまるくして驚き、非常に興味有る事実だと言つていた。此の時詳細を聞かなかつたが、帰国後、中央気象台で種々話をきいてみたが、ポスト・モンスーンに於て降雪が有るかということについては、殆ど判つていないと云つた。ともかくマル博士も降雪が有つたことが非常に意外であつたらしい。

ポスト・モンスーンの降雪の問題は、要約すれば大体次の通りになることと考えられる。

- 1 マル博士提供の資料中にヒマラヤ山脈近接地の九、十月の降雨量の平均があつたが、月に二、三回しか降雨がない。
- 2 つまりドライ・シーズンなので、多量の雪を降らすような湿気が存在しないこと。
- 3 従つて冬季においては少量の降雪はあつても、ヒマラヤの巨大な水河を維持させる程の多量の降雪はないと考えられる。
- 4 一九五二年秋マナスル偵察隊がマナスルの東稜を試登した際「おせんべい」のような大きな雪の結晶に覆われている斜面に出会つているが、これは明かに新たに降つた雪ではなく、モンスーン中の雪の再結晶であること。

大体以上の理由でマル博士の驚きが判るような気がする。

これよりすれば、ヒマラヤの雪は大部分はモンスーン中に降るといえる訳であるが、仲々そうと許り簡単に言い切れないものがあるようである。例えば私達の遠征中、アンナプルナ北側を歩いているとき土民に尋ねると、冬は三尺位積るといつていた。但し不完全な言葉で話をするのであるし、又通訳するシェルパは陽気で時々冗談を云つたりするので事の真偽は判らないが、若し本当とすれば、先程の所論は根底よりくつがえる訳である。

又、ネパールヒマラヤの水河は小さいということは良く知られており、これに反してカラコラムにはヒスパー、バハトロ、シアチェン等有名な大水河が存在するのは、当然降雪量と密接な因果関係があるものと考えられるが、カラコラムはモンスーンの影響が比較的少ないことは登山界の常識であつて、且又雨量も他のヒマラヤ地方と比較してぐつと少いことは記録においても明らかである。とすれば(勿論水河の形成、維持は単なる降雪量に依つてのみ支配されるとは考えられないが)カラコラムの

氷河に就いては又別個の考えが必要なのではあるまいか。

以上を以て簡單乍らアンナプルナ遠征中の氣象に就いて述べたが、専門家ならぬ私達の考察であつてみればかなりの誤りも有ることと思われる。大方の御教示を願えれば幸甚である。(藤平正夫)

装 備 に 就 いて

() 我々がアンナプルナに遠征することが決定し、実際に装備の準備を始めたのは出発の二ヶ月前だつた。

それまで我々のグループでは、この日の為にくらかの外国文献、記録などを読んで、テントなど数張の試作品をこしらえていた。ところが実際に装備の設計をはじめると、やはりヒマラヤの高度という魔物の正体がどうもはつきりつかめず、とまどいを感じた。

ところがその頃日本人で初めて七〇〇〇米以上の経験をしたマナスル遠征隊が帰国し、その生々しい体験談を聞いて大へん教えられるところがあつた。

そして結果的にはマナスル隊の装備を改良した装備が出来あがつた。

ところが、ヒマラヤを全然知らないのが改良したと思つただけで、やはり使つてみて不満足な点が沢山あり、イギリスをはじめヨーロッパの国々のヒマラヤに於ける伝統をつくづくらやましく思つた。

やはりヒマラヤの装備は、ヒマラヤを何度も経験し、その上につみあげられた結果の所産物でなければ、本当に良いものは出来ないだろう。

それともう一つ結果的に見て、我々の低地用、高所用の装備がマナスル隊といつた大部隊のスケールのものであつたことも、考えられなければならない重要な点であつて、即ち、我々の隊は、マナスル隊とはちがつて軽遠征隊であつた。軽遠征隊は大いに機動力を持たねばならないし、又よけいなものを沢山もつて行つて輸送費その他の出費は絶対にさけねばならない。高所においてはおもくも低地では、郷に入つては郷に従えという言葉もあるように、旅行の方法、技術はやはり現地人にまかしておけば、彼等は彼等の方法でたくみに処してゆくものだ。ライト・エクスペディションは、ライトらしくこじんまりした所帯道具で登攀に出かけねばならないだろう。

以下、主な装備について重点的にのべて見よう。

1 高所用個人装備

(1) 衣 類

衣類はサイズにゆとりがあることが大切で、身体をしめつける感じのものは絶対に不適当である。

例えばセーターでも、少しだぶつくくらいのがよい。羽毛服でも身動きのしにくいようなものはいけない。

衣類として、下着に上質のラクダシャツ、毛のセーター、フラノ地のカッターシャツ、羽毛服(上、下アマミラン使用)、ウインドジャケット(アマミラン使用)を用意した。

手袋、靴下は上等の毛糸を用い、手袋には五本指、三本指、二本指と毛糸のもの三種類、外側サージで内側フラノのオーバー手袋、前者の内二層の間にポリエチレンを入れたもの等を作つた。このオーバー手袋は、やや大きすぎ(手袋の枚数がそんなにいらなかつたので)して失敗した。(すぐぬげた。)

手袋、靴下は重ねて着用したときに、同じサイズのものだと、手足をしめつけ、かえつて冷たく感じさせるし、凍傷にもかかりやすくなる。

靴下は毛糸のもののみを用意し、日本内地の冬山でみなそれぞれ経験によつて、自分自分の方法を生かすいみで、個人負担の靴下を三足とした。

(2) 靴

最近の傾向として登山靴のつま先のつまつたものがほとんどであるが、これは思い切つてゆとりをもたせ、高所では靴をはくことも労働と感じられる場合もあるから、靴の着脱は簡單になる様な様式をとつた。

靴についての一、二のテストとして、外皮と内皮の間にウサギの皮を入れた靴と、内皮と外皮の間にポリエチレンを入れ内皮をカモシカの毛皮を使つた靴と、二通り作つた。

ところが甲皮の部分はよかつたが、足の保温に最も大切な部分である靴底の内敷がお粗末だつた為、いずれも底から足が冷えた。而し凍傷といったような事故はおこらなかつた。

靴底にフェルトの層をつくれれば良かったのではないかと思う。

今後の問題として、靴の目方を軽くすることが必要だと思ふが、シェルパの一人にスイスのエヴェレスト隊のフェルト靴を持つていたのがあるが、これはアメリカ空軍の電熱靴の電線部分を取り外したものらしい。厚いフェルトで出来ていて、とても軽く調子がよさそうにはいていた。この次にはこんなものも考えてみようと思う。

(3) オーバー・シューズ

木綿製のもの、ナイロンの中に羽毛を入れたものと、二通り用意した。羽毛入ナイロンオーバー・シューズは、保温の点で申分なかつた。

(4) 寝 袋

表、裏ともナイロンを使つた。当初、寝袋を二重に(内、外)しようかとも考えたが、これは重さの点で難があり、我々の隊ではそれほど輸送能力があるわけではないから、一重にして羽毛服を着て入つても、まだゆとりのある大きさにし、羽毛を多く入れ、口はチャックにして、総重量4キログラムにおさえた。

大へん快適なものが出来あがつたが、問題は入口のチャックであつた。我々の隊では低地旅行中、別に寝具を持っていないかつたので、下から上まで全部チャックをつけ、低地の時は全部開放し毛のようにして使えろという点考えた。けれどもチャック

クの目方というものは馬鹿にならず、低地のしわ寄せを高所まで持ちはこまねばならなかつたことを、もう一度考えてみなければならぬ。チャックにすれば、非常に楽に寝られることはたしかに利点だけれども、封筒型にしても、我々の持つて行つたぐらゐのスペースがあれば、別に入るのに息がきれる（内地の山で）という代物でもない。こんなところに無駄な重さがひそんでゐるのではないかと思う。

(5) 空気マット

イギリス隊のアイディアをかりて、空気の層が二つになるように、マットの中に一重か壁を入れ、口を表裏の二つにつけた。下に一ぱい空気を入れ、上の層に空気を少し少なめに入れると非常に快適であつたし、表に穴があいても、一層だけで使えるという点非常に便利だつた。而し重いのはなんとしても（一、五キログラム）欠点だつた。この点はマットの大きさを、もう少し小さくしてもよいし、材質を改善するということも考えたら、なんとか解決出来るだろう。

(6) 空気入れ

マナスル隊の使つたゴム袋式を使つたが、これはなんとしても能率が悪く、シエルパの持つていた英国製のフイゴを使つた。これは大きさは子供が持つてゐるボール紙製の手風琴ぐらゐで、実に軽いかにも強く、空気もよく入つてすばらしかつた。

2 高所用共同装備

(1) テント類

ナイロンにビニールをコーティングした生地を使つた。これを使つた理由は、ポスト・モンソンの風が強い事を想定し、当時ナイロンの生地で打込みをきかし目のつまつたものがなかつたため、ビニールの膜をはつて生地をつぎぬける冷い風の防壁とした。この為にナイロンを使つてゐるのに幾分テントが重くなるのを犠牲にせざるを得なかつた。この結果、テントのウォールからの通気が出来ないことになるからベンチレーターを大きくして通気の調節をはかつた。

ところが我々が使つた様な薄い生地に対するビニールのコーティングは技術的にむずかしく、おまけに片面だけしかコーティングしなかつたので、低地旅行中一、二ビニールのはけてくるテントがあつた。それに加えて登攀にかかる頃（約四週間）低地でテントを使つただけで、綿で云う老化の現象に似た症状を呈していた。この理由については今後の検討にまたねばならないが、ともかく結果的に十一月三日の暴風に、第五キャンプのテントが破られてしまつた。

第五キャンプに張つたテントは、中間ベース附近のものとして設計した耐風性のわるいテントではあつたが、根本的にいつてテント地の強さには安全率を多くみて重さのことなどにあまり気をとられるべきではなかつたと思う。またポスト・モンソンのとても、わざわざビニールをコーティングしてテント自体でそれをかたづけようという考え方よりもテント以外で考えられる問題ではなからうかと思う。結論としてテントの生地に関しては完全に失敗であつた。

テントのスペースに関してはアンナプルナーIのフランス隊または、そのアイディアをとり入れた日本のマナスル隊は、目方を軽くするためにテントを思いきつて小さくしていた。この為に居住性が非常に悪くなる。これを使つたマナスル隊は居住性は良

くしないと休養がとれないから長い登攀にはよくないという結論を出してゐた。我々はこの考え方を入れて中間キャンプ迄のテントには、一尺のウォールをつけ天井を高くし、底は張出しはのぞいて、一人当たり幅二尺、縦六尺のスペースを考えた。別に最前進キャンプとしてフランス隊の基準で、二人用の小さいテント二張をつくつた。ポールは超ジュラルミン（住友金属、古川電工）の二二ミリを使い、吊下げ式にした。入口はチャックにしたのだが、これはやはり吹流し式にしたほうが確実でよい。チャックは一度こわれたら、何とも融通がきかず大変危険である。

低地用のテントを我々は持たなかつたので（後発隊）高所用と兼用したが、やはり小さな隊でも低地用と高地用とは分けたほうがいいと思う。

3 キャラバン用装備

キャラバン用品としては、前にも書いたように我々の場合は、大連征隊の資格をもつてゐたのではなからうか。実際、考え出したらきりが無い。橋がなかつたら、ジャングルだつたらと考へたら、それに要するあれもこれも、ということになつてくる。併し、実際トラベルしてみると、土地の人夫たちは、実にうまく無から有を生ずるものである。スイスのドウラギリ隊はマヤン・デイ・マールをさかのぼるのにジャングルを歩いたというがポーターはネパール刀一ふりを実にうまく使つてその仕事をやつてのけたという。隊の規模によつて一番大きく調節出来るのはキャラバン装備であつて、また経費もやりよつて大へんちがひいてゐる。

この問題はこの次のエクスペディションの宿題である。（脇坂 誠）



装 備 一 覧 表

品 目	数量	重量 単位(kg)	品 目	数量	重量 単位(kg)
第一類 登攀用具					
リュックサック (キスリング型)	10	1.7	マフラー (毛)	14	0.13
サブザック	10	0.2	ウィンドヤッケ (上, 下)	11	0.8
ザイル (ナイロン, 9mm)	360m	1.5(40m)	ズボン (サージ)	14	0.7
ザイル (ナイロン, 6mm)	200m	0.9(40m)	ズボン (毛)	14	0.8
ザイル (ナイロン, 12mm)	160m	2.0(40m)	カッター (フラノ)	14	0.5
ピッケル	12		毛メリヤス (上, 下)	30	0.65
アイス・バイル	4	0.8	毛セーター	21	0.6
シュタイグアイゼン	20	0.7	目出帽	7	0.2
同バンド (皮, 布)	28		ジャージ帽	14	0.1
ハンマー	6	0.45	日除キャップ	7	0.05
アイス・ハーケン	45	0.1	第三類 露 営 用 具		
"・ローレン	5	0.2	テント (家型大・B・C用約8人用)	2	19
ロック・ハーケン	30	0.08	" (家型・4人)	2	9
カラビナ	100	0.2	テント (家型・3人)	8	6.5
スキー杖	10対	0.5	テント (ミード型・2人)	7	3.9
赤 旗	300		テント (アタックキャンプ用2人)	2	2.9
隊 旗	40		テント支柱 (2,3,4人用計)	18	
呼 笛	7	0.04	テント ベグ (アングル)	150	0.08
ヘッドランプ	7	0.6	" (丸型)	118	0.03
日焼止クリーム	11	0.2	シャベル	8	1
雪 眼 鏡	20	0.1	ツェルト	2	0.8
かいろ (灰とも)	14	0.2	寝 袋 (A)	8	4
耐寒電池	100	0.1	" (B)	6	3.5
感光剤	1	0.13	同 カバー	21	0.5
磁 石	0.01	10	空気マット	21	1
第二類 高地用衣類					
登山靴 (ビブラム底)	10	2.6	ファイゴ (袋式)	10	0.3
高所登山靴	7	2.4	第四類 高所炊事用具		
オーバーシューズ (キャンバス)	20	0.6	石油ストーブ (スベア)	4	1.5
" (羽 毛)	14	0.65	" (プリムス)	2	1.0
テント靴	10	0.6	メタ・バーナー	7	0.08
羽毛服 (上, 下)	7	0.5	アルコール・バーナー	12	0.03
オーバー手袋	28	0.3	アルコール・タンク	5	0.1
毛手袋 (5本指)	28	0.07	ガソリン・タンク	20	0.4
毛手袋 (3本指)	14	0.075	コップアー	11	0.7
" (2本指)	45	0.1	炊事用 (テントの外で炊事する時 風を防ぎ熱効率をよくす るためにコンロにコップ アーをのせてこの中にす つぽりと入れる)		
毛靴下	63	0.1	メ タ	200箱	0.24
ストッキング	10	0.15	ケロシン	30ガロン	3.8
マフラー (絹)	15	0.04	アルコール	15ガロン	4
			まほうびん	16	0.6
			第五類 キャラバン用品		
			キャンバスシート (大)	2	10

キャンバスシート (中)	11	8	うちわ	38	0.02
" (小)	15	3	ほそびき		
キャンバス袋 (貨幣用)	20	1.3	ブラシ	1	0.1
"	29	0.7	ちり紙		
やかん	4	0.4	バスケットボール用靴	29	0.96
支那なべ	1	0.5	地下足袋 (ポーター用)	16	0.5
フライパン	2	0.3	布バケツ	5	1.2
な べ	5	0.2	タ オ ル	50	0.06
水 筒	13	0.2	手 拭	30	0.03
ボ ー ル	50	0.1	木綿シャツ (ポーター用)	28	0.85
皿	30	0.1	レインコート	14	1.2
コ ッ プ	10	0.15	手袋 (軍手)	28	0.06
大根おろし	3	0.2	靴下 (木綿)	52	0.07
カメノコたわし	10	0.1	は ん だ		
さじ (セット)	5	0.5	はんだごて		0.23
しやもじ	5	0.1	ペ ン チ		0.5
大工道具 (キリ, ノコギリ, ナタ カナヅチ, くぎぬき)	2組	3	のこぎり	5	0.4
あ み	15	0.05	モンキースパナ	1	0.25
かんきり	30	0.1	ケロシンランプ	5	0.86
ほうちよう	5	0.4	マ ッ チ		
じようご	10	0.05	さらし木綿		
ローソク (小)	280		D.D.T	10	0.01
" (大)	396		B.H.C	10	0.03
懐中電灯	15	0.2	文房具類多数		
同 電球	40	0.002	タイプライター	1	3.0
消 火 器	9	0.3	半そでポロシャツ各人	2	
ラ ッ カ ー	2カン	0.3	半ズボン "	1	
の り	2	0.5	木綿下着	3	
ヴィニールのり	2	0.1	文房具一式		
ゴムテープ	1まき		第六類 観測及調査用具		
フマキラー	24		高度計 (アネロイド携帯用)	3	
粉石けん	1袋	0.5	温 度 計	20	
石 け ん	9包	0.1	湿度計 (アスマン)	1	
はみがき粉	7タース	0.1	最高最低寒暖計	10	
ワセリン	5ビン	0.8	ポケットコンパス	1	
靴あぶら	26かん	0.1	どうらん	2	
はかり (さお)	1	1	野 丹	2	
" (ばね)	3	0.6	捕 虫 網	1	
釘	多数		毒 び ん	1	
針金 (14番線, 20番線)			根 掘	2	
ぶりき			せんていばさみ	2	
目ざまし時計	3	1.5	三 角 袋	多数	
木材チョーク	14	6.05	パラフィン紙袋	"	
番号札	14	0.03	望 遠 鏡	2	
ナイフ	10	0.3	携帯ラジオ	1	

—一九五三年—

八月

三〇日 先発隊の伊藤、舟橋両隊員、二三時三〇分、BOAC「コメット」にて羽田発。
 三二日 先発隊、沖繩、マニラ、バンコック、ラングーンを経て二時三〇分カルカッタ着。

九月

一五日 先発隊、カルカッタにて関係方面（税関、ネパール総領事館その他）と折衝。銀光丸の遅延を知り心を痛める。本隊の今西隊長、藤平、藤村、脇坂、立平、一〇時SAS機にて羽田発。
 六日 本隊、沖繩、バンコックを経て九時五〇分、カルカッタ着、先発隊と合流。
 七一―二日 折衝続行。銀光丸、依然として入港せず。
 一二日 先発隊、今西隊長、伊藤、藤村、立平の四名、パンジヤップ・メールにて一九時、カルカッタ発。他は船荷の到着を待つ。
 一三日 先発隊、パトナを経て一三時三〇分、バナレス着。夜のゴラクプール行までサラナートの仏蹟見学。二三時三〇分発の夜行でゴラクプールへ。
 一四日 先発隊、ゴラクプールを経て二三時二〇分、ノータン

ワ着。ディリーとガルツェン以下のシェルバたちの出迎えうく。
 一五日 先発隊、午後ノータンワ発、印度、ネパール国境を越えて、夕方、プトワール・バザール着。
 一六日 先発隊、荷物の再梱包、人夫募集のためプトワール滞在。
 一七日 先発隊、プトワールからボデガウンへ。
 一八日 先発隊、ボデガウンからルームレへ。
 一九日 先発隊、ルームレからタンシンを通つて、ダウラギリからアンナプルナ連峰、マナスル三山まで一目で見えるボグナスで泊る。後発隊カルカッタ発。

二〇日 先発隊、ボグナスからカリガート・バザールを経てプレバッティへ。
 二二日 先発隊、プレバッティからブーブレへ。後発隊、ノータンワ着。
 二三日 先発隊、ブーブレからガエルジャガルへ。後発隊、ノータンワからプトワールへ。
 二四日 先発隊、ガエルジャガルからヌワコートを経てデオラリへ。後発隊、プトワール滞在、荷物の整理。
 二五―二六日 先発隊、デオラリからマティガウンを経てボカラへ。一五時バザールの前の広場でテントを張る。後発隊、プトワールからボテガウンへ。
 二六日 先発隊、荷物の整理のためボカラ滞在。州知事ポーラン・シン氏訪問。後発隊、ルームレへ。
 二七日 先発隊、一二時、ボカラ出発。四時、川原の草地でキャンプ。後発隊、ルームレからタンシンをへてボグナスへ。
 二八日 先発隊、尾根を一つ越えて、マディ・コーラに出、雨の中をタプラン着。後発隊プレバッティへ。

十月

二八日 先発隊タプランよりマディ・コーラの底に下り、再び登つて一五時シクリス着。後発隊、プレバッティからブーブレへ。
 二九日 先発隊、シクリス滞在。荷物の整理人夫取りかえ。後発隊、ガエルジャガルへ。
 三〇日 先発隊一時半、シクリス発。小さな枝沢の出合でキャンプ。後発隊、デオラリへ。

十一月

一日 先発隊、マディ・コーラのほとりて第二回目のキャンプ。後発隊、デオラリからボカラへ。
 二日 先発隊、南面ベース・キャンプ建設。伊藤、ダナムギヤルをつれ沢筋の偵察。後発隊、ボカラ発。
 三日 今西隊長、伊藤の二人はガルツェン、ダナムギヤルをつれ、マディ・コーラ源流へ。奥壁の下に偵察キャンプを設く。後発隊、タプランへ。
 四日 今西隊長とガルツェン、奥壁のルンゼ試登。一〇時、キャンプを引払いベース・キャンプへ下る。一三時着。後発隊、シクリスへ。
 五日 シェルパ二人伝令としてベース・キャンプ着。
 六日 今西隊長と藤村、シェルパ四人をつれて再び源流へ。伊藤はシェルパ三人、人夫二人をつれてベースの左手の尾根を偵察のため試登。後発隊、藤平、脇坂、シクリスからベースへ。
 七日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 八日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 九日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一〇日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一一日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一二日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一三日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一四日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一五日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一六日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一七日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一八日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 一九日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。
 二〇日 今西、藤村、双子岩の側面を登る。伊藤尾根の上のキャンプからベースへ。後発隊、舟橋、アンニマ及び人夫たちベース・キャンプに到着。

二二日 本隊、ベースにて荷物の整理と休養。藤村隊、クティからタグリングへ。

二三日 今西、藤平、伊藤、舟橋、脇坂、C1(五〇〇〇米)まで往復。シエルパとポーター全員で荷上げ。藤村隊、タグリングからチャムチェへ。

二四日 藤平、舟橋、脇坂、シエルパ三人をつれて、C2までのルート開拓に八時C1発。岩壁の上の雪の台地(C2a予定地)で前年のマナスル踏査隊の物資を発見。一六時、C1帰着。藤村隊、トンジエからターンジヤムチェへ。

二五日 今西、藤平、伊藤、舟橋、脇坂、シエルパ五人、人夫四人をつれてC2建設へ。八時二〇分、C1発。一三時一五分C2のサイト着。今西隊長、脇坂、ダナムギャル残り、他は一三時三〇分下降を始む。C1着一五時。藤村隊、ターンジヤからチャーメ西方のキャンブ・サイトへ。

二六日 C2aの今西、脇坂、ダナム、C3へのルート開拓。C1は休養。一五時、舟橋、人夫一人つれてB・Cへ。藤村隊、ピサンと湖畔キャンブ・サイトへの中間まで。

二七日 C2aの今西隊長、脇坂、二回往復してテントをC2bへ移す。藤平、伊藤、シエルパとポーターをつれてC1よりC2へ荷上げ。藤平、アンニマ、グンディとC2bへ入り、伊藤は残りのポーターをつれてC1へ戻る。舟橋、C1へ。藤村隊、B・Cへ。その知らせをうけ舟橋、一七時C1発、再び連絡にB・Cへ下る。

二八日 C2の今西、藤平はアイス・クリフにルートを拓く。脇坂シエルパ二人をつれC2aからC2bへ荷上げ。伊藤、シエルパ二人をつれC1からC2へ上る。舟橋、藤村、B・CからC1へ。

二九日 今西隊長と藤平はダナムをつれてアイス・クリフのタック続行。伊藤、脇坂はクリフの下まで荷上げ後、登攀を支援。アイス・クリフの攻略に成功し、全員C2に戻る。舟橋C1よりC2へ荷上げ。

三〇日 今西隊長、舟橋、脇坂、ダナムをつれてC3(六一〇〇米)建設。藤平、伊藤C2で荷物の整理。午後C1より藤村、ガルツェンと人夫二人つれてC2へ荷上げ。ガルツェン残り他はC1へ。

三一日 C3の舟橋、脇坂、シエルパ三人はC4へのルートの偵察。一四時、主稜線に達してC3へ戻る。今西隊長、アイス・クリフの荷上げ。伊藤、藤平、シエルパ三人C2からC3へ上る。藤村、C1からB・Cへ。

十一月 一日 今西隊長、藤平、脇坂とサーゲイのガルツェン及びシエルパ五人、八時C3発、C4建設に向う。一四時主稜線に到着。シエルパ二人C3へ下る。立平、C1からC2へ。

二日 今西、藤平、脇坂、シエルパ四人、C5(七一〇〇米)の建設へ。今西、藤平、ダナムC5に入り、脇坂とシエルパ三名C4へ下る。舟橋シエルパ二名をつれ荷上げにC4往復。夜半より風強くなる。藤村、B・CからC1へ。

三日 C5、C4、C3、いずれも強風のため停滞。夜半よりジェット気流の襲来を思わせる烈風つり、C5の下る。

テント吹き破れる。C4テント一つ倒壊。藤村、C1からC2へ。

の広場に帰着。ポラーン・シン知事のすすめで同氏の官邸の庭でテントを張る。

四日 今西隊長、藤平、ダナム、十時C5より下降を開始。風、依然として強烈。一五時、C4へ着。藤平、泊り、今西、ダナム、それにアンニマ加わりC3へ下降続行。C3着一八時。舟橋C2からC1へ。

五日 舟橋シエルパ三人をつれC4へサポートに上る。伊藤凍傷のダナムをつれ、アンニマとC2を経てC1へ下る。一二時頃、C4を撤収して全員C3へ。

六日 全員C3を撤収してC2へ下る。今西、藤平、C1まで下降。立平C1へ。藤村、ポーター二人をつれサポートにC2へ上る。

七日 舟橋、藤村、脇坂及びポーターたちC2からC1へ。全員C1に集結。

八日 全員、C1に滞在。荷物の整理。今西、測量。

九日 全員C1より下りB・Cも撤収して、マルシャンディの出会いの湖畔のキャンブ・サイトへ。

一〇日 ピサン過ぎて池のそばのキャンブ地へ。

一一日 チャーメの村外れのキャンブ地へ。

一二日 チャーメからトンジエの対岸のキャンブ・サイトへ。

一三日 マルシャンディのゴルジュ状の地形を通過。壮大な滝を対岸にみる河原でキャンブ。

一四日 ジャガートの近くの河原の幕営地へ。

一五日 ジャガートからクティ・バザールへ。

一六日 クティから峠越えをしてポカラへ向う。途中のナルマという部落の近くで段々島の中でキャンブ。

一七日 ナルマからマディ・コーラに出て、さらにその南の涸れた川を遡行し、尾根の上の稲田の中で幕営。

一八日 峠をこえてポカラへ。一五時、ポカラのバザールの前

一日 カルカッタにて帰国準備。二日、伊藤カトマンズよりカルカッタへ。一日、海路をとる藤村、脇坂、日勝丸乗船。

二日 朝今西隊長、藤平、伊藤、舟橋、立平、SAS機にてカルカッタ発、羽田着翌日一時。

十一月 藤村、脇坂、神戸着。



アンナプルナ遠征経費決算報告

I 収入	8,841,475円
内訳	
新聞社分担金	4,700,000円
会社寄附金	3,355,000
会員寄附金其他雑収入	530,075
借入金	256,400
II 支出	8,841,475円
内訳	
航空運賃・旅費	2,422,333
国外経費	2,782,020
装備費	2,040,226
食料費	359,317
梱包費	268,615
国内交通費	316,062

通信費	142,423
医薬, 医療器具費	41,991
写真器材費	73,806
土産物費	9,670
事務費	64,968
募金費	62,981
雑費	257,063

註 梱包費中には装備、食料などの国内運送費を含む。
募金費は募金事務関係の費用であるが事務費と明確に区分
はできない。尙国内交通費中には募金関係の交通費も含まれ
ている。
通信費についても同様である。

(鈴木 信)



A・A・C・Kアンナプルナ遠征に援助を賜った法人及び個人(アイウエオ順)

愛知機械工業K・K、愛知化学工業K・K、朝日加工K・K、味の素K・K、池田商店、五日会、稲葉七宝K・K、今西組、英
国海外航空K・K、大阪建設業協会、大阪建設業有志会、大阪瓦斯K・K、大阪デパートメント協会、尾西食品K・K、
関西電力K・K、川崎重工K・K、川崎製鉄K・K、川崎車輛K・K、近畿日本鉄道K・K、協和会、倉敷レイヨンK・K、京
阪神急行電鉄K・K、京阪電鉄K・K、神戸製鋼所、神戸工業K・K、神戸銀行、小西六写真工業K・K
三和銀行、島津製作所、敷島紡績K・K、親和会、新三菱重工K・K、松榮化学工業K・K、静岡工電社、秀山荘、住友銀行、住
友信託銀行、住友機械K・K、住友金属工業K・K、住友電工K・K、住友化学工業K・K、住友倉庫K・K、住友商事K・K
住友生命保険、住友石炭鉱業K・K、住友金属鉱山K・K、住友海上火災保険、セーラー万年筆K・K、全購連邦神戸ゴム工場
K・K、高田アルミニウム製造所、太陽工業K・K、大成物産K・K、武田薬品K・K、高千穂通信機K・K、待稜山岳会、東洋
生命保険、大和銀行、天理教、天理教船場大教会、電路工業K・K、東邦ガスK・K、東海建設K・K、東京登歩溪流会、東洋
レイヨンK・K、東海整毛K・K、東洋プライウッドK・K、南海電鉄K・K、名古屋鉄道K・K、名古屋タイムズ、名古屋製
糖K・K、日本リースK・K、日本繊維K・K、日本クロスK・K、日本電池K・K、日本新薬K・K、日本板ガラスK・K、
日本生命保険、K・K・日商、日本陶器K・K、日本碍子K・K、日本特殊陶業K・K、日本石膏K・K、日本紡績K・K、日
本ベイントK・K、日本興業銀行名古屋支店、京大支店、日興証券名古屋支店、日本技術K・K、日本感光色素K・K、K・K
二幸、西日本新聞東京支社、日本光学K・K、日本通運K・K、日本ベッド製造K・K、野沢石綿セメントK・K、阪神電鉄K
K、播磨造船K・K、パノンカメラK・K、服部時計店精工舎、浜口染工K・K、阪東調帯ゴムK・K、紡績協会、福井山岳
会、福岡山の会、藤倉ゴム工業K・K、古河電気工業K・K、松下電器産業K・K
K・K・松本商店、マミヤ光機K・K、K・K・美津濃、丸山工業K・K、水谷ペイントK・K、K・K・明治屋、森永乳業
K・K・森永製菓K・K、森永薬品K・K
ラッポ北陸連盟、ラクトウフォトサービス、芦田均、大野木秀次郎、棚橋馨、藤木九三、松本泰山、水野国治、○

昭和三十一年六月十五日印刷
昭和三十一年六月二十五日発行

アンナプルナ日記

定価 六九〇円
千 四五円

発行 京都大学学士山岳会

印刷 東京 赤坂 溜池五

写真 便利堂 京都 三条 竹屋町

発売 茗溪堂 東京 神田 駿河台 二の一

電話(二九)二一〇一一・六五二一一
振替東京 二四、七二三